

---

# LEGEND 『伝説』【輪廻の出会い】

上川 勲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】

### 【Nコード】

N7016A

### 【作者名】

上川 勲

### 【あらすじ】

広大な宇宙。そこには、数え切れない数の星があり、惑星があり、命がある。そして、その命の数だけ、喜びが存在する。また、悲しみも……。『仲間』との絆が生み出す長編ファンタジー小説。

## 序章（前書き）

やや専門用語（作者が勝手に作った造語）が物語が進むに連れて多くなります。

# 序章

フェルト暦1500年

「はあああああッ！！」

「くっ……っのっ!!」

周りは戦争で倒れた兵士たちであろう死体が散乱し、土煙のうっすらと浮かぶ中

で、戦いは起きていた。

互いに武器である剣を互いの身体に斬りつけようとするが、お互い  
一歩も引かない

互角の勝負。

片方は17歳前後の青年で、もう片方は15歳前後の少女だった。

「てやっ！」

「あまいッ！」

カキンッ、キンッ……と刃が交差することに金属音が鳴り響く。

周りに何もないのでその鋭い金属音がよく響く。

「はあ……はあ……。」

「はあ……はあ……。」

互いに息遣いが荒い。どうやら相当の時間の間、戦い続けていたようだ。

「はあああああああああああああああああああああ  
ああ

あ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

「やあああああああああああああああああああああ  
ああ

あ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

キ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
ン

荒れた野全体に響き渡るかのような、金属音が鳴った……

フェート暦2050年

世界は平穏だった。

特に大きな争いもなく、ただ同じような時間が流れている。

タイガ・ウナバラ。男性。

そんな平穏な世界を旅する17歳の流浪の剣士である。

これは、この青年を中心に繰り広げられる物語である。

この物語の先にあるものは、

笑いか、悲しみか、感動か・・・

それはまだ誰にもわからない。

## 序章（後書き）

初小説です。

文章的に、かなり雑＆変な場所があるかもしれません。

また、このあとがきでは専門用語（作者が作った造語が多数）を主に説明していききたいと思います。

フェート暦

年表の単位。

## 第1話　プロローグ

フエート暦2050年。

大きな争いは表面上では起きていない時代。

ここに、1人の青年はいた。

「…………ふあ…………。」

澄み切った青空の下でひとつ、大きなあくびをする青年。

青年の髪の色は青色。服装はTシャツに上着を羽織っているだけの軽装で、ジャー

ジのズボンをはいている。そして、ジャージのベルトには剣の鞘がぶら下がっている。  
た。

「きょーもぶらぶらひとつり旅　行く先決めずにまっしぐら

」  
青年オリジナルソングを歌いながら草原の中を歩き続ける。

「おい、タイガ。ちょっと気がぬけすぎなんじゃねーのか？」

「しかたないじゃない、ティレク。何にも起きないから気がだれるつて。」

青髪の青年、タイガに話しかけたのは、金髪の青年だった。

金髪の青年の名前はティレク。背中に槍を背負っているところから槍使いだろうと想像できる。

「まあまあそう言うなって。なーんにも起きないのはいいいことじゃないの。」

「まあね。」

ぬぼぬぼと町を目指して歩き続けるタイガとティレク。

「…………だが、

「……………………てくれ。」

「……………ん？」



「どうした？タイガ。」

「いや、何か聞こえたような気が……。」

草原にかける風と共に聞こえてきた声。その声は次第にはっきりと聞こえ始める。

「……すけてくれ。」

「行ってみよう。」

「しゃーねーなあ。ほっとくわけにはいかねーし。」

タイガたちはひとまず声が聞こえてくる方角へと走っていく。

「……助けてくれッ!!」

そこには1人の人がいた。

大きなリュックを背負っているところから商業人が旅人の類だろう。

おそらく戦えないところを見ると前者の可能性が高い。

商業人は魔物に襲われていた。

体長が3メートルほどあるクマ型の魔物である。

「いくよ、ティレクッ!!」

「はいよッ!!」

タイガとティレクは互いに得物を取り出す。

「あ、あんたたちは？」

「あなたはさがって下さい!!」

タイガがそう言うのと商業人はひとまずその場から逃走する。

「さてつと。これで存分に暴れることが出来るってわけだ。」

ティレクはそう言うのと口を緩ませる。

「そういう……ことだッ。」

タイガは一足飛びで魔物の懐に入り込む。

魔物はタイガの足の迅さ<sup>はや</sup>に完全に不意をつかれた。

「はあああああ!!!!」

タイガは大きく斬り上げて斬りつける。

「があああああああああああああ！！！！！！！！」

まともに喰らった魔物は激痛の悲鳴を上げる。

「もう一回！！」

続けて突き攻撃を放とうとするタイガだが、

「がああッ！！！！」

痛みで怒り狂った魔物に巨大な爪で攻撃される。さしずめ熊にちなみ『ベアークロ

ー』と言ったところか。

だが、紙一重で攻撃から防御に変えたおかげで直撃は避けられたが、衝撃だけは得

物を通じて喰らった。

「・・・つうう。」

大きく飛ばされるタイガ。

魔物がもう一撃与えようと試みたとき

「烈空破ッ！！」  
れっくうは

魔物の背後から剣の斬撃が放たれ魔物はその場で息絶えた。

「まったく、ひとりですつこみすぎだったの。」

「ティレク・・・ありがとう。」

危うく大怪我をするところを助けられ、タイガはひと言礼を言っただった。

## 第2話　歴史

「ティレク、ありがとう。」

タイガの間一髪のところを助けたのはティレクだった。

「いや、どうってことねーよ。」

と、ティレク。

「……………あ、そうだ。おじさん、大丈夫ですか。」

戦場から離れていた商業者らしいおじさんは、でかい荷物を背負ってこちらに向かってきた。

「いや、ありがとう。センキューベリーマツチョだよ。や、ホント。」

思いつくことをとにかく次から次へと言葉に出す商業者。

さすがというべきか…………。

「俺たちは人助けしながら旅してるから当然さ。な、タイガ。」

「まあね。」

「まあ、立ち話もなんだからわたしの町まで来てくれ。礼もしたいしね。」

そう言うと、おじさんはタイガとティレクの腕を引っ張って返答を待たずに町まで連れて行く。

「貿易の町　イクスポート」

（……………来てしまった。）

（それも強引に・・・。）

と、互いに思うタイガとティレク。

「さあ、ぜひわたしのうちに来てくれ。」

と、にこにこ笑顔の商業人じいさん。

しかし、ここまでタイガとティレクをひっぱってこれる・・・  
かつ、ダッシュしてここまでこれる力と体力があるならば、別にあのとき助けを呼ぶ必要はなかったのではないかと、切実に思う2人だった。

「さ、どうぞ。」

おじさんから差し出されたお茶をずずっと一服するタイガとティレク。

「いや、どうも。ちょうどのがからだったんです。」（おじさんに引つ張られたせいです。）

途中、あえて言葉をにこらせるタイガ。

本人に悪気がないので言うのは失礼だと思ったのであろう。

「そういえば、ここは貿易の町なんだな。ここまできるとき、貿易の船や宇宙船があつたし。」

と、ティレク。

「その通り。ここは、大陸間の貿易はもちろん、惑星間の貿易も盛んな町なんだよ。なにせ、文明が大きく変わったからね。550年ほど前から。」

と、おじさんも自分で入れた茶を一服。

「550年前って言うと、『崩壊戦争』が終わったところか。」  
と、ティレク。

「そうだよ。あの『崩壊戦争』を期に、世界は繁栄していったんだ。」

「『崩壊戦争』が原因で、人類のみならず生き物が全滅しかかったときに登場したのが、『ルシア』と『ヴァイン』。今でも英雄とし

て語られている2人だよ。」

「へえ。」

おじさんの話を素直に感心するタイガ。

「ってタイガ。知らなかったのか？」

「だって、僕が旅立ったのは10歳のときだよ。勉強もほとんどしてなかったし……。」

「ったく、知つとけよ。ほとんど常識だぞ。」

呆れ顔で言うティレク。

「……まあ、この際教えといてやる。現在英雄とされている『ルシア』と『ヴァイン』だが、ある程度文明が栄えたのを期に、二人は互いに戦いを挑んだらしい。その戦いの場所がたしか……惑星『カムラン』だっけ。そして、戦いの結果同士討ち両者共倒れになったらしいな。」

「なんで、『ルシア』と『ヴァイン』は戦いをしたのさ。」

と、タイガ。

「たしか……『ルシア』は民の意見を反映させて文明を築き上げようとして、『ヴァイン』は、自分の独断で文明を築き上げようとした。……要するに、互いに思想が両極だったから戦いになったわけだよ。」

「そして結局両方の思想はかなわず……か。話し合えば、何とかなったかもしれないのに。」

と、タイガがつぶやく。

勝手に口から出てきたように。

「それで、残された民は、結局両方の思想に分かれてそれぞれに文明を築き上げた。それが今の現実さ。」

「ふん。」

そう言つと、タイガは茶を飲み干すのだった。

そして夕方、

「で、これからあなたたちはどこに行くんだい？」

「僕たちは行き場所を決めてないからね。わからないよ。」

「そういうこと。」

と、タイガとティレク。

要するに、行き当たりばったり、適当に事件があつたら巻き込まれて解決していく……そんな感じである。

「それなら、惑星『スレイミア』へいったらどうだ。宇宙船を使つての航海旅となるがいい経験になるだろうし。」

「そうしたいけど、あいにくラルクが底についてまして。」

と、タイガ。

「大丈夫だって。まあ、今日は遅いうちに泊まりなさい。何とかといてあげるから。」

イマイチ理解できなかったものの、とりあえず意味を理解しようとせず泊まることにした。

## 第2話〜歴史〜（後書き）

### 専門用語解説

ロシアとヴァイン

550年前に終戦した『崩壊戦争』後の英雄。

2人は全く対極の思想をしており、のちに戦って相打ちとなる。

崩壊戦争

フェート暦1400〜1500年にかけて起きた大戦争のことで、この戦争のせいで危うく惑星『カムラン』の全生物が滅びかけた。

惑星カムラン

人類の故郷の惑星。今は生物がほとんどいない『死の惑星』となっている。

### 第3話　　迫る影

次の日・・・

「じゃあ、宇宙港はここから南に進むとあるから、そこで受け付け  
うけてね。」

「はい、ありがとうございました。おじさん。」  
「世話になったな。」

商業人のおじさんにそれだけ言うと、タイガとティレクは宇宙港へ  
と向かった。

「・・・にしてもラッキーだったな。」  
と、ティレク。

「ホントだね。あのおじさんがこの宇宙港のオーナーだったなん  
てね。」

どうやらあの商業人のおじさん、この貿易の町『イクスポート』に  
ある宇宙港のオーナーだったらしい。

また同時に、世界をまたにける商業人でもあるらしく、商売を終  
えて帰ろうとしたところを魔物に襲われ、タイガたちに助けられた  
というわけだ。

イクスポート　宇宙港



「……さつてと、手続きも終わつたしついに宇宙の旅だぜ、タイガ」

「ティレク。あまりはしゃがないでよ。……気持ちわかるけどさ。」

初めての宇宙旅。

それにわくわくと子供の心を蘇らせているのはティレクだけではなく、タイガもだった。

実は、フェート暦1700年程くらいから惑星『カムラン』を中心に、文明が急速に発達し、滅びかけてた人類も戦争終結後、人口が一気に増加。惑星1個ではとても治まりきらないほどの人口爆発ぶりになっていた。

そこで人類は宇宙船をつくり、惑星『カムラン』から離れ、人が住める他の惑星を探してはその惑星を開拓しては、人口を増やしていた。

人が他の惑星に住み着くことによって、惑星『カムラン』にいた人々もそれに釣られるように他の惑星に住むようになってしまったので現在、『カムラン』にはまったく人がいない。

……と言うのも、急速すぎる人口爆発のせいで食料となるものがなくなり、大地や水もかれてしまったからである。

そのため人類の母星、惑星『カムラン』は、現在『死の惑星』となつてしまった。

……話を元に戻そう。

とにかくそのような超高度経済成長が起きたため、惑星間を移動するなんてことは当たり前となつていた。

「ついにやつを発見しました。」

「へえ。やっと見つけたのかい。」

「はい。記憶は輪廻転生が原因で失っているようですが、いくらかのショックを与えれば元に戻るかと。」

「それで、そいつがいる場所は？」

「惑星『スレイミア』へ向かう宇宙船に乗っています。」

「そうか……。よし、その船を打ち落とせ。ショックで記憶が戻るかもしれない。」

「もし失敗したらどうします？」

「そのときはそのときだ。そうなたら、ボクの期待はずれだったということさ。遠慮なくしてくれ。」

「かしこまりました。」

世界の影で、この会話は成されていた。

## 第4話　船からの脱出

　宇宙船　内部

「うわぁ。僕、宇宙船に乗ったの初めてだよ。」

「まあ、それは俺もないんだけどさ。今の時代じゃ、乗ってないやつのほうが少ないって話だぜ。」

童心に戻ってやややしやぎぎみのタイガにティレクは言った。

たしかに、タイガたちの生きている時代は、人々が宇宙に出るようになってからだいぶ年が経っている。

値段的にも、もちろん距離にもよるが、現代（自分たちの住む）の電車代を少し上げた程度である。

「ま、まあ。それは仕方がないんじゃない？だって、僕たち自分で言うのもなんだけど・・・・・・世間知らずだし。」

「おいおい。おまえはそうでも、俺はこれでも勉強してたほうだぞ。それでも、学年成績で常にベスト10に入ってたくらいなんだからな。」

「え！？そ、そうなの？」

ティレクの意外な一面を聞いて驚くタイガ。

それも無理はない。普段、美人な女性を見つけるなりナンパをし、チャラチャラとしているのだから・・・。。

人は見かけによらないものである。

「あれが『スレイミア』行きの宇宙船か。」

「よっしゃ！早速作戦開始だぜええええッツ！！」

「作戦というより、破壊だな。」

タイガたちが乗っている宇宙船より2万キロほど離れた場所に、3機の戦闘機がいた。

その3機の戦闘機が2万キロ先を航行している宇宙船に標準を定める。

「・・・・・・よし。」

航行して10時間。乗客が疲れて眠っていたとき・・・・・・

ドゴオツ

突然、船内が激しく揺れる。

その振動に乗客たちは強制的に目を覚めさせられる。

タイガたちも、当然ながら例外じゃなかった。

「なんだ!？」

「さあな。ただ事じゃないことは確かだ。」

乗客たちが右往左往しているときに、アナウンスが流れる。

「乗客は、すみやかに非常用の小型船にお乗りください。繰り返します。・・・・・・。」

いわゆる避難命令だった。

そのアナウンスを聞くや否や、乗客たちは悲鳴を上げながらおのの小型船に乗り込もうとしていた。

「と、とにかく今は指示に従おう。ティレク!」

「ああ、しかたねーな。」

そう言うと、タイガたちも小型船に乗り込んだ。

く小型船 内部く

どうやらこの小型船は2人乗りらしい。

タイガとティレクが席に着くと、操縦席側に座っていたティレクが小型船を発信させた。

「・・・ふう。ひやひやものだっただね。」

「まったく。初の宇宙船旅行が台無しだぜ。」

「いや。旅行じゃないから。」

ティレクにツツコミをしてから『スレイミア』行きの宇宙船を窓越しで見ると、宇宙船のあちらこちらから煙が出ており、正直宇宙の塵となるのはほぼ確定的だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「大丈夫だって、タイガ。乗組員の連中だって避難したはずだ。」

「だといいいんだけどね。」

宇宙船が宇宙の塵となったのは、その直後だった。

乗組員たちの無事は、絶望的だった・・・。

## 第5話　ぶらり遭難の果てに……

広大な宇宙。

そこには、数え切れない数の星があり、惑星があり、命がある。

そして、その命の数だけ、喜びが存在する。

また、悲しみも……。

タイガたちは現在、『ワームホール・ドライブ空間穴転移移動』を使つての航行をしていた。

「このまま行くと、どこにつくの？ テイレク。」

「さあな。宇宙視点からしてみれば俺の知識や地理なんて1ミクロの点以下だろうし。正直、お前も知ってるだろう？ 宇宙に出たのは初めてだつて。」

「まあね。」

今のタイガたちの乗っている小型船は、難破船当然。ある意味ぶらり旅なのだろうが……。とにかく、このようなぶらり旅は2人も望んじやないだろう。

切実に救助、または適当な人の住んでいる惑星に着陸したい思いの2人だつた。

「そろそろ『ドライブ・アウト転移移動解除』するぞ。」

「うん。」

『転移移動解除』して、再びもとの宇宙空間に出た小型船。

周りに惑星はあるが、明らかに人の手は入っていないような感じだつた。

「……ハズレ。」

「仕方ないからしばらく経ってからまた『空間転移移動』しようか。」

「だな。」

ワーム・スペース

『別空間』に入っの『空間転移移動』をせずに、普通に航行するタイガたちの小型船。

惑星間を潜り抜けるように移動しながら、『空間転移移動』できるまで通常航行する。  
と、そのとき。

バシユウウウウウン

突然、タイガたちの小型船から1000キロほど離れた場所に大型の船が現れた。

それは、タイガたちにも小型船に標準装備されているレーダーでわかった。

「おッ！！船が突然でてきやがった。」

「その……さっき僕たちがしていた『空間転移移動』から『転移移動解除』をつかったからじゃないの？」

「あ、そつか。まあとにかくこれで……。」

と、ティレクがいいかけたとき、突然通信が入った。  
通信相手は目の前の大型船だった。

「……はい。」

とりあえず、通信にでるタイガ。

「キミ達、どうしてこんなところにいるんだい？小型船でこんなところに来るなん

て……。しかもその船、緊急用のシャトルじゃないか。」

通信越しから聞こえる声は男性のものだった。

「じ、実は僕たち、ちょっと事故にあってしまいました。」

「事故？」

「はい。それで、ここまでさまよってたんですけど……。」  
と、タイガ。

「……わかった。とにかく、そちらに船を出すからその船に従って航行してくれ。」

「は、はい！」

そう言うと、通信は切れた。

「いやゝ。助かったなタイガ。」

「そうだね。これでたすかったあ。」

そして、ものの数分後。男の人が言っていた船が……というより戦闘機だった。その戦闘機から通信が入る。

「はい。」

再び通信に出るタイガ。

「お待たせしてすみません。」

声は女性のものであった。

どうやらさっきの男の人とは違うようだ。

「それでは、私についてきてください。」

「あ、はい。わかりました。」

そのタイガの声を聞くと、通信は切れた。

そして、言われるとおりにその戦闘機についていった。

また、これが始まりだった。

壮大な冒険の幕開けの……。



## 第5話くらり遭難の果てに・・・（後書き）

### 専門用語解説

ワームホール・ドライブ

#### 空間穴転移移動

『空間転移移動』と書いてこの物語上では『ワームホール・ドライブ』と読む（長い＆複雑ですいません）。

宇宙空間とは別の空間を通っての長距離移動をする。

この航行のメリットは、宇宙空間（通常空間）との干渉が特殊な方法以外では干渉されないということ。

デメリットは、『空間転移移動』する船の周りに星間物質（例としては小惑星、チリなど）があると使えないということと、一度『空間転移移動』から『転移移動解除』をすると、しばらく使えないという事。

また、『空間転移移動』はエンジンに大きな負荷をかけるのでずっと使うことはできず、船によって違うが小型船で最大10時間、大型船で1～2日程度である。

なお、速度の目安として10時間に1光年ほど移動が可能。

ドライブ・アウト

#### 転移移動解除

『転移移動解除』と書いてこの物語上では『ドライブ・アウト』と読む。

『別空間』から通常空間へと移行すること。

『転移移動解除』は、周囲に星間物質があってもつかうことが可能。また、ある程度なら星間物質にあたらないように転移場所の移動も可能。

ワーム・スペース  
別空間

『空間転移移動』したときに移行する空間。

## 第6話　救助

「ここから入ってください。」

タイガたちの小型船に目の前の戦闘機から通信が入った。戦闘機が出てきた大型船に、船の出入り口が開いていた。入ってもいいということだろう。

「いいのかなあ、ティレク。」

「いまさら何言ってるんだ、ダイガ。せっかく助けてやるって相手が言ってるんだからここは話に乗るもんでしょーよ。それともおまえはこの小型船で干乾びるまで乗ってるつもりか？」

「それはさすがに……。」

「なら、ここはお言葉に甘えよーぜ、タイガ。」

「う、うん。」

ややしぶっていたタイガだが、たしかにティレクの言うとおり、干乾びるまで小型船に乗るのはごめんだと思い、大型船に入らせてもらうことにした。

「……ところでティレク。」

「ん？どうした？」

「キミは単にさっきの女の子に会いたいだけなんじゃないの？」  
「……。」

その問いかけに、ティレクはだんまりになる。

「図星？」

「ったりまえでしょーよー！！世界中の女の子は俺のもの！！世界中の女の子は俺様をまってくれてるんだぜー！！！」

ティレクの女好きっぷりには、7年以上行動を共にし続けているタイガでもついてはいけないものだった。

「どうでもいいけどさ。あまり恥ずかしくなるような行動は慎んでよね。」

「俺がいつお前に恥じ欠かすような行動をしたんだよ。」  
(ナンパの度に僕は恥ずかしいんだって。)

言葉に出すとどうなるかわからないので、あえて口には出さないタイガ。

そんな会話がなされている間に、小型船は大型船に無事収納された。

「ふいっ。動けるってすっばらしーっす!!」

大型船に降りて開口一番、ティレクが放った言葉だった。

たしかに、タイガとティレクが宇宙船から脱出して約10時間以上、2人はずっと席についてまったく動いてなかった。

「うん、そうだね。正直ずっと座りっぱなしだったから尻が痛いよ。」

「そう言うとタイガは大きなあくびを1つする。」

結構疲れが出てるようである。

「あの……。小型船に乗っていた人たちですよね。」

2人が会話していたときに、横から女性の声が割り込む。

女性はどうかやらあの戦闘機に乗っていた人のようだった。通信機越しに聞こえていた声と同じである。

「あなたが、あの戦闘機に乗っていたのですか？」

と、タイガが尋ねてみる。

「はい、そうです。『コメット・カリバー』のパイロット、セルリ

ア・ハーベリアです。」

ブラチナブロンドの髪で、パツと見た感じ16〜17歳の少女、セルリア・ハーベリアがタイガの問いに答えた。

「やあ、ハニー。これから俺様とお茶し……。」

早速ナンパをしようとしたティレクを鉄拳制裁をして黙らせるタイガ。

普段あまり力技で他人を黙らせようとしないタイガなのが、相手は自分たちを助けてくれた恩人。いくらなんでもその恩人にいきなりナンパは失礼だと思ったのだろう。

制裁を受けた（この場合喰らったといったほうが良いかもしれない）ティレクはシヨックで気絶していた。

「あ、あの……。大丈夫なんでしょうか？」

と、ばったり地面にひれ伏しているティレクを指差して尋ねるセルリア。

「え、ああ大丈夫だよ。これくらいで大怪我するようなやわな鍛え方はしていないから、僕たちは。」

ハハハハ……と最後に笑いながらタイガが言うと、セルリアはひとまず安心したようなため息をつく。

「あ、これから艦長にあつていただくために私についてきてくださいますか？」

「へ？……。ああ、うん。別にいいよ。」

「それではついてきてください。」

「うん。わかったよ。……。ティレクも寝てないで早く起きなよ。」

（……。誰が寝かせたんだよ。誰が。）

タイガの言葉に素直になれないティレクだった。

## 第6話〈救助〉（後書き）

### 専門用語

コメット・カリバー

セルリアが乗っていた戦闘機の名前。

全長50メートル。全幅27メートル。全高25メートル。

『スペース・フォース』と呼ばれる戦闘機で、戦闘能力は、他の戦艦よりはかなり高いほうである。

また、『スペース・フォース』は誰でも乗れるわけではなく、適性がある者にしか乗ることが出来ない。

ちなみに現在『スペース・フォース』は3機確認されており、その3機ともタイガたちが救助された大型戦艦『ラグナエース』に収納されている。

スペース・フォース

宇宙各地から発見された高性能の戦闘機。

一般の軍が所有している戦闘機よりはるかに優れた戦闘能力を持っているが、誰でも乗れるわけではなく、適性があるものだけしか乗ることが出来ない。

現在発見されているのは3機で『コメット・カリバー』のほかにも2機発見されている。

ラグナエース

タイガたちを救助した大型戦艦。

『スペース・フォース』の母艦である。

## 第7話　艦長登場

タイガたちは、自分たちの乗っていた小型船を誘導してくれた戦闘機のパイロット、『セルリア・ハーベリア』のあとについて行っている最中だった。

理由としては、艦長が呼ぶようにといわれているらしい。

大型戦艦『ラグナエース』の中は、外で見てわかったとおりかなり大きく、かつ内部はやや複雑だった。

「……ねえ、ハーベリアさん。」

「はい、なんででしょうか。」

「さつきから……というより、救助される前から思っていたんだけどこの船って軍が所有している戦艦なの？」

「はい、そうですよ。でも、この戦艦の中は正直『戦艦』って感じがしないんですけどね。」

と、セルリアがにこにこしながら言った。

たしかに、たいていの人は『戦艦』と聞くと、内部は機械だらけでギッチギチ、人の動けるスペースと言えば自分の座っている席範囲1メートルしかない……。と、正直作者の勝手な想像かもしれないが、そんな感じがするものである。

だが、この戦艦内ははっきり言って戦艦とは思えないほど広いかつゆったりとしていた。

「カイルさん。連れてきました。」

タイガたちの連れて来られた部屋はこの戦艦の操作や、戦艦内の監視などを一手にまかっているブリッジだった。

「やあ、君たちがあの小型船に乗っていた人たちかい。」

「あ、はいそうです。この度は助けていただいてありがとうございます。」

「いやあ。いいってことよ。オレの名前はカイル・クロード。」

応、この『ラグナエース』の艦長であり、司令官だ。」

「一応ではありませんよ、カイルさん。」

セルリアにそう言われると「ハハハ……。」と笑う艦長、カイル・クロード。

「あ、ちなみに歳は21歳。」

「は、はあ。」

とりあえず頷いておくタイガ。

正直なところ、艦長であり司令官であるはずのカイルなのだが、威厳というものが全くとは言わないが、それに近いほどない。

「まあ、君たちは誰なのか。適当に自己紹介してもらえるかな？」

まずは親睦を深めようとしているのかカイルはタイガたちに自己紹介を頼んだ。

「えつと……。僕はタイガ・ウナバラ。17歳です。流浪の剣士をしながら旅をしていました。」

「なるほど。タイガ・ウナバラくんか……。ところで、そこで寝ている人は誰だい？」

威厳ゼロの艦長さんが指差すところには鉄拳制裁で気を失っているティレクがいた。

実はここまで来るまでの間、タイガが床に引きずりながら連れてきたのだ。

そのせいなのか、それもとどめになっているようでいまだに目を覚ます気配なしである。

「え〜っと。この人はティレク・アーカイト。21歳。僕の親友です。」

「へえ〜。じゃあ親友同士で今まで流浪の剣士をして旅をしてたんだ。」

「はい。」

ちなみにここで話しておく、タイガとティレクは7年間、旅を続けているのだ。

「……さて、それじゃあ自己紹介も済んだところで……」



あ、セルリアはちゃんと自己紹介したの？」

「はい。」

「それじゃあ、他のメンバーは？」

「いいえ。私だけです。まっすぐここまで来ましたから。」

「そうか……。じゃあ、あとで皆にも一度顔合わせさせといてよ。」

「わかりました。」

そう言うときセルリアはブリッジから退室した。

「えっと何するんだっけ？……。ああ、そうだった！なんでもこのような辺境にさまよってたか聞きたいんだ。教えてくれるかな？」

「あ、はい。わかりました。」

その後、タイガはこれまでの経緯を説明した。

突然、自分たちの乗っていた宇宙船が攻撃されたことを……。

「なるほど。惑星『スレイミア』行きの宇宙船に乗っててねえ……。それは災難だったね。」

「はい。……。。」

「まあ、そんなに気を落とすこともないよ。きっと宇宙船に乗ってた人たちは全員無事だった。」

「そうだといんですけど……。」

タイガたちのさまよっていた理由を聞いてブリッジ内がやや重い空気が漂う。

「……。さてッ！辛気臭い話はこれで終わりッ！人生明るくいこーよー！」

（……。この人、ティレクとそっくりだ。）

性格的に何かそう思ってしまうタイガ。

「まあ、それはそれとしてタイガ。これから行かないといけない場所とかある？」

「え……。いいえありません。」

流浪の剣士ゆえ、別に目的地など存在しなかった。

「それじゃあしばらくこの船で暮らさないかい？」

「え、ええッ！？で、でもこの船ハーベリアさんから聞いたんだけど軍の船なんですよ？あまり勝手なことをしちゃ……。」

「大丈夫だって！オレの上司はちよつとした知り合いだから多少のことなら問題なしッ！なにより艦長であるオレの言ったことなんだよ？納得してくれるって、絶対ッ！」

「で、でも……。」

「いいじゃないか、別に。朝昼晩3食ついているつえ自室もある。こんなにいいところで暮らせるんだよ。」

「よっしやあー！ー！ーッ！！決定しようぜ、タイガッ！！」

突然に復活したティレク。

そして、第一声がこれだった。

「だけどさ。」

「いいじゃないか。相手が厚意で住ませてやるって言ってるんだからよろうぜ、ここはよ。」

「………わかったよ。」

結果的にティレクに説得させられてしまうタイガ。

「よっし、けつてーいッ！！それじゃあ、セルリアに2人分の部屋を用意してもらってから、それまで艦内を自由に行動してもらっていいよ。」

なんだかんだで、大型戦艦『ラグナエース』で住むようになったタイガとティレク。

この先の2人の行方は……。

## 第7話〈艦長登場〉（後書き）

今回はあとがきページを使ってキャラクターの説明をしたいと思います。

タイガ・ウナバラ

年齢 17

性別 男

職業 剣士

一人称 僕

青髪の青年。

10歳のときより旅をする決意をして7年、親友のティレクと共に行動をしている。

容姿は中性的。ボケっとした性格で旅をしてからまったく勉強をしていないため常

識というものがあまりない。

お人よしで、正義感が強い性格。

ティレク・アーカイト

年齢 21

性別 男

職業 槍使い

一人称 俺

金髪の男。

年の割には若作りでパツと見た感じは17歳前後。

やや軽い性格で、きれいな女性にあっちは時々ナンパをする。

だが、槍を操る能力は達人も舌を巻くほどの実力。

ちなみに勉強で社会と数学が得意で学校でも常に上位だった。

カイル・クロード

年齢 21

性別 男

職業 ラグナエース艦長&司令官

一人称 オレ

黒髪で若くして艦長&司令官となった人物。

性格はティレクと同じでおちゃらけており、女性好き。

だが、いざ大事な局面に立てば冷静な判断でその場を解決する面もある。

いざというとき頼れる人物。

なお、セルリアの紹介はまた後ほどします。

## 第8話　艦内探索1　2人の女性

「艦内を自由に動き回ってもいいって言われてもなあ．．．。」  
と、ぼそりと言うタイガ。

この大型船で済むための手続きを終わらせたタイガとティレクは、ただ意味もなく船内をぶらついていた。

前にも述べたように、この船の内部は正直とても広い。

ちよつとした小型マンションとして経営できるんじゃないかと思えるくらいである。

．．．．．とは言え、艦内にある部屋全部が人が暮らせる部屋ではなく、24時間経営しているコンビニや、ちよつとした休息として使えるティーラウンジ、食事が出来る食堂、話し合いの場として使えるピロティと呼ばれる場所や身体がなまらないように身体を鍛えることが出来るトレーニングルームやのんびり散歩が出来る公園．．．．．などがあるため、住める部屋は結構少ない。ほとんどがひとつの部屋を数人で使うようになっていて。

「．．．．．ねえ、これからどうするティレ．．．。」

ティレクと呼ぼうとしたとき、さっきまで隣にいたティレクが知らないうちに消えていた。

ちようと通路の角を曲がったところから話し声が聞こえていた。

ティレクの声も混じっている．．．。

（まさか．．．。）

いやな予感がしながらもタイガはティレクの親友としての責任を少し感じているので、こっそりと通路の角からのぞき見る。

「まあまあ、これから俺様と一緒にあつまゝいひとときでも楽しもうぜ。」

「え、あゝでも．．．。」

「急にそんなこと言われたって．．．。」

女2人をナンパするティレク。

ティレクの左手にはどこから用意したのかバラの花束が握られていた。

「そんなこと言わないでさあ、俺様この船に来たばかりで船のことよくわからないんだ。そして同じように、君たちのこともね。」

その台詞を言い終えた瞬間、ドゴオッ！とティレクの腹に強烈なパンチが繰り出される。（通称：鉄拳制裁）

[illegible]

突然のことに全く対応できなかったティレクはその場に倒れこむ。

「すみませんね。うちの子が全く迷惑かけて……。」

まるで2児の母親のような口調でその場を無理やりごまかそうとするタイガ。

通路の角から高速でティレクは前方に回りこみ、その勢いを殺さないままパンチをくりだした青年の口からはとても出せないようなものである。

2人の女性がその衝撃（ティレクのナンパ&タイガの行動）に固まっている間に、タイガはティレクを荷物よろしく引きずってその場を去った。

「えっつと……。ここがたしかピロティって場所か。」

ぶらぶらとして、行き着いた場所はピロティだった。

大きく開けた場所で、大広間のような空間である。

このピロティを中心に12時方向、3時方向、6時方向、9時方向にそれぞれ通路があり、いわゆるこのピロティは、通路の分岐地点みたいなものだった。

「あれ、人がいるみたいだよ、ティレク……で。」

タイガのそばからティレクの姿がまたもや消えていた。

「やあ、お嬢さん。どうかこの俺様とベリーナイスな時間を楽し  
ましょ……グハアツ!!」

タイガが高速の鉄拳制裁をしようとしたところ、ティレクが大きく

蹴り飛ばされた。

蹴り飛ばした張本人は、ティレクがナンパしてた女性だった。

「なによあんだ。あたしはそんなに簡単に落ちないのよ。」

「すぐに落ちそうだけどね。」

「だ、黙っててください！！」

蹴り飛ばした張本人はもう1人近くにいる女性にそう言った。

女性はオレンジ色の髪の色をしており、年齢はぱっと見た感じ16歳程度。

服装は女性の髪の色と同じようにオレンジ色系統のものだった。そして近くにいたもう1人の女性は、髪の色が赤色で、女性の割にはあまり髪の色を伸ばしておらずサッパリした髪型だった。

「す、すみません。」

その2人の前に初めから頭下がりはなしのタイガ。

どいつもこいつもティレクのせいである。

「あんたがこいつのしつけ人？」

（しつけ人って・・・。）

年齢的にはティレクのほうがお兄さんなのだが、精神年齢的にはタイガのほうが上なのかもしれない。

「ねえ、どうなの？」

ややつめよるオレンジ髪の少女。

「どうって言われても・・・僕はティレクの親友だけど。」

「・・・ん？ひょっとしてあんたたち、セルリアが言ってた人かい？」

ふと気づいたように赤髪の女性はタイガに尋ねた。ちなみにティレクは蹴り飛ばされた後、案の定気絶していた。

「あ、はい。流浪剣士のタイガ・ウナバラです。そして、あそこでのびてるのがティレク・アーカイト。ナンパ癖をどうにかしてほしいと切実に思っている僕の親友です。」

「なんだ。あんたたちだったのか。この船で見かけないやつかと思っただら・・・。」

そう言つと、オレンジ髪の少女は少し間を置くと・・・

「まあ今回のことは多めに見てあげるわ。」

「は、はい。ありがとうございます。え〜っと・・・。」

「ん？・・・ああ、あたしの名前？あたしはミラージュ・オーラント。よろしく。」

「じゃあ、アタシも自己紹介したほうがいいかねえ。アタシはシャープ・エージェンシー。よろしく、タイガ。」

「あ、はい。こちらこそよろしく願ひします。」

そう言つとタイガは一礼をする。

「へえ〜。あの変態と違つて真面目そうねえ〜。」

「え・・・あ、ありがとうございます。」

たしかに真面目なタイガなのだが、学力的に言えば蹴り飛ばされてのびている変態男のほうが圧倒的に上である。

真面目＝学力上というわけではなさそうだ。

「ところでアンタたちは何やってたのさ。」

と、シャープ。

「実は、この船の中を散策していたといひますか・・・その・・・。」

「

「ああ、なるほど。広すぎてどこがどこかわからないんだね。」

「え、あ、はい。そうです。よくわかりましたね。」

シャープの鋭い洞察力に感心するタイガ。

「まあ、この船は広いからねえ。わからないのも無理ないさ。」

「じゃあシャープさん、こうしましうよ。あたしたちがこいつらに船の説明をするつて言つのは。」

「いいねえ。ちょうど暇だったし、あんたらがよかつたらアタシらが艦内を説明してあげるよ。」

「いいんですか？」

「オーケー、オーケー。そうと決まれば善は急げつて言つし早速出発しましよー！」

「はい、わかりました。」



タイガはそう言つと、のびてるティレクを引きずつて2人に艦内の説明をもらうことにした。

## 第8話〈艦内探索1 2人の女性〉（後書き）

### キャラクター紹介

ミラージュ・オーラント

年齢 16

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 あたし

オレンジ色の髪 of 少女。

負けず嫌いで男勝りな性格。

だが、人情に厚く他人に優しいのだがほめられるのが苦手。格闘術が好き。

シャープ・エージェンシー

年齢 20

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 アタシ

赤髪でさっぱりした髪型の女性。

髪型と同様性格もサッパリしており、行動が結構豪快なものが多いがちゃんとした考えがあるものがほとんどなので他人にほとんど害はない。

戦術も豪快。

武器全般を扱うことができ、趣味は武器磨き。

一番扱いに長けている武器は剣。

セルリア・ハーベリア

年齢 16

性別 女

職業 スペース・フォースパイロット

一人称 私

礼儀正しい白金髪の少女。

細かいことに気がよく利き、模範的な優等生。

## 第9話　艦内探索2　格納庫

「ここが格納庫。船や戦闘機を収納する場所よ。」  
と、ミラージュが現在いる場所の説明をする。

タイガたちが、初めてこの『ラグナエース』に入った場所だった。  
「ねえ、あの機体は何？」

そう言ったタイガの視線の先にはセルリアが乗っていた戦闘機があった。

「なんか、救助されるときからずっと気になってたんだけど・・・。」

「ああ、あれは『スペース・フォース』って言う戦闘機だよ。」  
タイガの質問にシャープが答えた。シャープはこの手の質問が結構得意だったりする。

「『スペース・フォース』って、何なの？」

「『スペース・フォース』ってのは、宇宙各地に散らばっていた大型の戦闘機のことだよ。大型の割には小回りが利くし、速度も出て軍が所有している戦闘機よりも圧倒的に高性能なんだけど適性のある人間にしか乗れないってのがデメリットだね。」

「なんで宇宙各地に散らばってたの？」

「さあねえ・・・。」『超高度先史文明時代』の遺産だってことくらいしかわかってないねえ。」

「それじゃあ、その『超高度先史文明時代』って何なの？」  
再びタイガが質問をする。

「・・・あんだどこまで無知なの？」

「し、仕方ないじゃない！僕は10歳くらいのころから旅をしてて・・・成績も並以下・・・。」

最後の言葉が小さくなりながらそう答えるタイガ。  
ちなみにタイガ、最初はミラージュたちのことを「さん」付けと敬語で話していたのだが、2人曰く「かたっ 苦しい言い方はなしで！」

と言われたのでいつもどおりの口調で話すことにしちる。

「と、とにかくその言葉の意味教えてよッ!」

「よっしゃあッ! その質問には俺様が答えてあげましょーぞッ!」

「うわ。いつの間に復活したの・・・。」

いきなり復活していきなり会話に割り込んできたティレク。

そのティレクにミラージュは少したじろぐ。

「『超高度先史文明』のことだったな、タイガくん!」

「話の内容も気絶してたのにわかってるし・・・。」

実は気絶していたふりをしていただけではないか? と疑問に思ってしまうシャープ。

「まあ、こんなやつだから気にしないでよ。」

とりあえず忠告しておくタイガ。

復活したのに完全無視なティレクである。

「おい! こら、タイガッ! ! 超高度以下略の説明してほしいんじゃないのかYOッ! !」

「え? ああ、うん。そうだよ。」

「それじゃあ、説明するぜ。『超高度先史文明時代』とは、現在の文明が発達するより前に栄えていた時代のことだ。学者たちに言わせると、今より文明が栄えていたらしくてその『スペース・フォース』・・・だっけ? その戦闘機がその学者たちの意見が正しいことを証明しているらしいぜ。」

「あれ? ティレクって『スペース・フォース』のこと知ってたの?」

「名前だけな。実物とかは全く知らなかったけど・・・。とにかく、説明は以上だ。」

ティレクの説明を聞いて、ミラージュとシャープは驚いたような表情でティレクを見る。

「・・・なに?」

「いや、あんたがそんなに博学だったなんて・・・と思って。」

「ちよつとどころか、かなり意外だね。」

「・・・ひどい言われようだ、俺様。」

これも普段の行いというものだろう。自業自得である、ティレク。  
「じゃあアタシが3機の『スペース・フォース』について、説明してあげるよ。」

シャープはそう言うと、近くにあったコンソールを触って、コンソールに標準装備されているモニターに『スペース・フォース』の画像を表示させた。

最初に映し出されたのはセルリアが乗っていた黄色の横ラインが入った戦闘機だった。

「まずは、この機体。アンタたちを助けたセルリアの『スペース・フォース』である『コメット・カリバー』。性能のバランスは3機の中でナンバー1で、武装は中距離ビーム砲、レーザーフラנקス、小型ミサイル。」

セルリアの戦闘機の説明を終えると、次は別の戦闘機の画像が映し出された。

戦闘機の形はさきほどの戦闘機とあまり変わらないのだが、武装が大きく変更されているものだった。

また、セルリアの機体と同じく今度はオレンジ色の横ラインがアクセントとして入っていた。

「これはミラージュの『スペース・フォース』である『アタック・セイバー』。近距離戦が得意な『スペース・フォース』だ。性能としては『スペース・フォース』の中でもっとも小回りが利き、敵からの攻撃をかわしやすい上に、スピードもトップ。ただ、装甲が他のに比べると弱いから耐久力は低いねえ。武装は近距離ミサイル、バルカン砲、小形ビーム砲。」

言い終えると再びコンソールをいじり、別の『スペース・フォース』が映し出された。

これも、基本的な形は同じなのだが、武装が大幅に変更されていた。「これがアタシの『スペース・フォース』である『クレイジー・スコーピオン』さ。性能は重装備のためにスピードは遅く、旋回性能もやや劣る。が、その分は攻撃でカバーするのがアタシの機体さ。」

攻撃は最大の防御ってね。武装は、レーザーファランクス、中距離ミサイル、電磁砲、粒子砲、大口徑ビーム砲。」

最後の『スペースフォース』の説明が終わると「こんなもんでいいか？」と、シャープが言った。

「うん。けっこうわかったよ。ありがとう。」

説明してくれたお礼を言うタイガ。

「そういえば、班長たちがいないわね。」

「ん？そう言われてみればそうだねえ。休憩かねえ。」

「班長って？」

と、タイガが尋ねる。

「ああ、作業中はここにいるはずなんだけど……まあ、後日会えるさ。」

「まあ、この説明はこれくらいだから次行くわよ。」

そう言ったミラージュが先導して次の場所へ向かうタイガたちであった。

## 第9話〈艦内探索2 格納庫〉（後書き）

### 専門用語解説

超高度先史文明時代ちやうこうとせんしぶんめいじだい

かつて大昔に栄えていた超文明時代のこと。

現在の文明よりも栄えていたと今まで言われていたのだが、『スペース・フォース』の発見により、その仮説が証明された。

アタック・セイバー

ミラージュがパイロットの『スペース・フォース』。

全長40.5メートル

全幅32.7メートル

全高20メートル

近距離戦が得意な機体。

クレイジー・スコピオン

シャープが操る『スペース・フォース』。

全長65メートル

全幅35.2メートル

全高23メートル

重武装で近距離〈遠距離が得意な万能型だが、動きがやや緩慢なため敵の攻撃はよけにくい。〉



### 第10話　艦内探索3　ティーラウンジ＆医務室

「ここがティーラウンジ。まあ、簡単に言えばみんな集まってわいわいがやがやするみたいな感じかな。」

「へえ。」

ティーラウンジの内部はさしずめ気品のいい喫茶店のようであった。暇な乗員が暇つぶしにとばかり集まっている場所である。

「・・・あれ？アイツがいないみたいだねえ。」

ふと気づいたように言うシャープ。

「あいつって、誰？・・・あ。」

シャープの言っていた「あいつ」の正体はものの数秒考えるとすぐにわかった。ティレクである。

しかもそのティレクが自分たちのいる場所から約3メートルほど離れた場所でまたいつものごとくアレを始めていたのだ。

「やあ、麗しのお嬢さん方。どうかこの俺様と一緒に、熱く恋について語り合いませんか？・・・へヴウウツ！！！！！」

「！」

ティレクの女性の口説き台詞が終わった瞬間、タイガの・・・ではなくミラージュの制裁跳び蹴りが発動し、ティレクを大きくぶっ飛ばした。

今までそれはタイガの仕事だったが、この船の中ではミラージュの役目となっていた。

「なあゝにナンパしてんのよ。この不良変態色魔男ッ！！！」

「っいつてゝなあゝ。少しはお前も女性らしい振る舞いをしろってんだ。この暴力筋肉女ッ！！！」

その言葉を聞いたミラージュ。

瞬間的に頭の中の切れてはいけないような血管が怒りのあまり切れ、もう我慢や忍耐といった地層を突き破り爆発寸前・・・



タイガはボロ雑巾ティレクをその医者に見せた。

「おやおやこれはこれは……。さてはミラージュさん、あなたの仕業ですね。」

「ま、まあね。」

その医者から視線をそらしながら言うミラージュ。

「あ、そうだ。先に自己紹介をしておきませんかね。わたしはこの医務室で医者をしているゴールド・D・ゼクターと申します。」

低く、落ち着いた声で自分の自己紹介をする医者、ゴールド。

「さて、早速その方の怪我を治しませんとね。」

そう言うゴールドはティレクが負っている怪我の部分に手の平を添える。

すると、手の平が光り出し、見る見るうちにティレクの傷を癒していった。

「す、すごい。ゴールドさん、さっきのは魔術ですか？」

「はい、魔術です。わたしはれっきとした魔術師ですからね。とはいえ、わたしは攻撃系の魔術は使えませんが……。はい、治りました。」

光が止むと、そこには傷ひとつ無くなっていた。

「ありがとうございます。」

「いえいえ、これがわたしの仕事ですからね。」

「じゃあ、変態の怪我が治ったところで次行くわよ、次。」

ミラージュから受けたティレクの怪我を治すと、タイガたちは次へと向かった。

第10話 艦内探索3 ティーラウンジ&医務室 (後書き)

ゴールド・D・ゼクター

年齢 30

性別 男

職業 医者

一人称 わたし

『ラグナエース』の医務室で医者を務めている人物。

白色の髪は生まれつきで、比較的落ち着いて、温厚な性格。

常にニコニコしており、よほどの事態がない限り笑顔を絶やすことはない。

また、魔術師の家系で育ったので魔術は使えるが、攻撃系の魔術は使えず、治癒系の魔術だけである。

## 第11話 7年ぶりの再会

「・・・ふう、一応一通り艦内を説明したわよ。」

ミラージュはそう言うのと紅茶を一服した。

現在タイガたちはピロティにいる。

医務室に行った後タイガたちは、コンビニ、食堂、トレーニングルーム、公園に行つて、そのあとまたタイガたちとミラージュたちが最初に出会ったピロティへと戻つたのである。

ティーラウンジでもよかったと言えばよかったのだが、ミラージュの殺戮ショー（ティレクをハメ殴り）の傷跡がまだ残っていたのでピロティとなつたのだ。

「やっぱり改めて考えてみるとこの艦内って広いな。」

目の前の机に並べられた菓子をつまみながら言つたティレク。

「まあねえ。なにせこの『ラグナエース』も実は『超高度先史文明時代』の遺産なんだから。」

「へえ。そうなんだ。」

と、誇らしげに言うシャープに頷くタイガ。

「この発見されたばかりの『ラグナエース』の中には『コメット・カリバー』があつたのさ。」

「『コメット・カリバー』・・・・・・・・ああ、ハーベリアさんの乗つてた戦闘機か。」

「まあね。だから『ラグナエース』は、もしかしたら『スペース・フォース』の母艦専用に使われたんじゃないかって学者たちが言ってるんだよ。まあアタシも、その仮説はあってるんじゃないかって思ってるんだけどね。」

「へえ。」

「ていうかあんた、タイガだっけ？」

「え、うん。」

不意にミラージュがタイガに話しかける。

「あんたセルリアのこと『ハーベリアさん』って言ったでしょ。」  
「え・・・あ、うん。」

「この船ではよそらしい態度は厳禁よ。あたたちのことを名前で言ってるんだからセルリアのこともちろんと名前で言いなさい。」  
「う、うん。わかったよ。」

タイガはミラージュの忠告に頷いた。

「あれ？そういえばセルリアはどこだい？」

「あ。ハーベ・・・セルリアなら僕たちの部屋を用意するためにどこか行ったようですけど。」

また『ハーベリアさん』と言いかけたタイガだったが、今度はちゃんと名前で言ってみせた。

「あの子は真面目だからねえ。アンタと同じで。」

「ま、まあたしかに。第一印象は僕もそう思いますけど・・・。」

「それがあの子のいいところで、悪いところだね。」

「あの、シャープ。真面目が悪いところなの？」

「うーん。それはちょっと難しいねえ。アタシはどっちでもあるって思ってるし。」

どっちでもあるとは、良いでも悪いでも言う意味だろう。

「でも時にその真面目ってやつを断ち切らないとやりきれないこともあるんだよ。」

「・・・・・・・？」

「まあ、あんたはまだ若いからね。じきにわかるさ。」

そう言うとお菓子をつまむシャープ。

と、そんなところに

「お、シャープにミラージュじゃねえか。・・・・ん、そこにいる2人は誰だ？」

3時方向の通路から人がやってきた。

「お、格納庫の整備員じゃないか。休憩か？」

「まあな。そろそろ休憩も終わりだけど。」

「ちようどいい。この子たちに自己紹介してやりなよ。さっき格納

庫へ行っただけど人がいなくてさ。」

「……………ああ、なるほど。おまえらが艦長の言ってたやつらか……………あれ？」

「……………ん？」

整備員はティレクと目が合うと少し何かを考え始める。ティレクもだった。

「……………アアーーーーーッッ!!!!!!!!!!おまえ、ティレクかッ!?!」

不意に大声で叫ぶ整備員。

「つてことはやっぱりおまえスピルかッ!」

その整備員の言葉で相手が誰なのかがわかったティレク。

「スピルってまさか……………ヴァルゲール会社の？」

タイガもわかつたらしい。

「知り合い、あんたたち？」

と、ミラージュ。

「うん。スピル・ヴァルゲール、宇宙をまたにけるヴァルゲール会社の息子だよ。」

「じゃあ、おまえはタイガか？」

「うん。そうだよ。」

整備員……………スピルの問いにタイガが答えた。

「うわゝ、久しぶりだな、おいッ!?!7年だっけか?会ってないのはよ!」

と、そのとき。

ピピピピピピ……………

「あ!ヤバッ!!俺もう行かなきゃなんねえッ!!じゃあな、タイガ、ティレク!」

アラーム音が鳴るとスピルは走って格納庫へと向かった。

「……………なんであいつがいるんだ？」

「さあ。」

不思議がる2人。

「スピルは2年ほど前からこの『ラグナエース』に入ってきたんだよ。それにしても、アンタたちが知り合いだったとはねえ。」

「まあね。ただ、スピルの家の事情でなかなか会える日が少なかつたんだけど。」

そう行つたタイガは、7年ぶりにティレク以外の知り合いと会えたせいか、どこかうれしそうだった。



## 第11話 7年ぶりの再会（後書き）

キャラクター紹介

スピル・ヴァルゲール

年齢 18

性別 男

職業 船の整備員

エメルルドブルーの髪をした青年。

大企業ヴァルゲール会社の社長の息子で、タイガとティレクの親友。家の事情により、なかなか2人に会うどころか外に出ることも許されなかったが、家の人の目を盗んでは勝手に外に出て2人と遊んでいた。

そんな家がうつとおしくなり家の邪魔が入らない場所を就職場所を選んで軍に入隊。やがて船の整備員になる。

格闘や剣術が得意で、よくタイガとティレクと一緒に稽古をしていた。

性格は軽いがティレクのようにナンパはしない。

また、仕事はちゃんと真面目にする人物である。

## 第12話　襲撃

「ふう。疲れたあ。」

タイガはどさつとソファーに座り込んだ。

現在、タイガはセルリアが用意した部屋にいる。7年ぶりに友人と再会した後、セルリアがやってきて部屋が用意できたことを知らせに来たのだ。

用意してくれた部屋は、4、5人ほど座れるソファーが1セット。それにベッドや洗面器、風呂もあった。

そのほかにも住むために必要なものはほとんど揃っており、「他に必要なものがあるのでしたら、コンビニで買ってください。」とセルリアが言っていたが、買い足す必要は特にない。

あえて言うのなら、洗面器に用意されている歯ブラシや、歯磨き粉、石鹸や、風呂にあるシャンプーやリンスといったものがけっこう小さいことである。

歯磨き粉も石鹸もそう長くは持たないだろう。

ちなみにタイガとティレクはそれぞれ別々の部屋が用意されていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これからどうなるんだろ。」

ソファーに座ったまま考え込むタイガ。

なんだかんだ言っても、スレイミア行きの船が襲撃されたことを忘れてはいない。

他の乗客は逃げ切ったのだろうか、乗務員は脱出できたのだろうか・・・・そんなことを考えると、自分たちのおかれている状況ははつきり言ってもとても良いほうで、こんなことをしていいのだろうか、とか考えてしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらく黙りこくって考えるタイガ。

じっとしているとついあのことを考えてしまう・・・・・・・・。

（とにかく、ブリッジに行ってみようかな。）

そう思うとタイガは自室を出た。  
ブリッジに行く理由は特にない。ただ、じっとしていると落ち着かないからだ。

タイガがブリッジへ行こうとしたそのとき

ドゴオオオオオオンッ

何かがぶつかったような音と共に、艦内が大きく揺れ出した。

「な、なんだッ!？」

さっきまでブリッジに行っても話題のなかったタイガだが、さすがに何が起こったのか気になってブリッジに向かって急いで行った。

「失礼しますッ!」

「ん?タイガか。」

「艦長、さっきの揺れは?」

「カイルでいいよ。まあ今はおいといて、揺れのことかい?現在解析中だから、なんともいえないね。」

「そうですか・・・。」

だが、ただ事ではないと思っているのかどこか緊迫したような雰囲気漂わせていた。

「クロード指令ッ!」

『ラグナエース』のオペレーターがカイルを呼んだ。そうとうあせっているように聞こえた。

「どうした?」

「格納庫に小型船が激突し、これからドリルで穴を開けたみたいですよ!!」

「なんだってッ!侵入する気かッ!!」

大型モニターに映し出されていた格納庫には、すでにドリルの先端

が見えていた。

そして、ある程度ドリルが格納庫に入ると先端がドアのように開いた。

「あッ！ドリルの先端がドアになっていて、そこから……魔物がッ！！」

「魔物だとッ！？くそ、中からこの船を落とす気がッ！！戦闘員を向かわせるッ！！なんとしてもこの船を守り抜くんだッ！！」

「わかりました！」

オペレーターは、大急ぎで艦内中に放送を流す。

「タイガは安全な場所に隠れててくれ。」

カイルの言葉に少し考えるタイガ。

せめてこの船の人たちのために……。

「艦長……いや、カイルさんッ！僕も剣士です、だから……僕も戦いますッ！！」

「タイガ……。」

少し意外だったのか考えるそぶりを見せるカイル。そして……

「わかった。実を言うところの船にいる戦闘員は実戦経験がほとんどないんだ。少しでも実戦経験のある人がいてくれると心強い。」

そして、

「タイガ・ウナバラ。この艦内に侵入した魔物たちを片付けてくれッ！」

「はいッ！！」

### 第13話　艦内戦闘

タイガは、現在格納庫へ向けてとにかく全速疾走していた。走るのはタイガの専売特許である。

この船は全5階層になっており、一番上段が第1階層で一番下が第5階層だった。

ブリッジは其中で第1階層にあり、格納庫は第5階層にあったので、走っても結構な時間がかかる。

ちなみにタイガたちの部屋は第2階層だ。

「あッ！！」

第4階層目に移ろうとしたとき、ようやくタイガは進入してきた魔物の姿を見ることが出来た。

全身鎧で中身がわからないほどの重装備をした魔物だった。

「リビンググアーマーか・・・。」

リビンググアーマーとは、全身を鎧でまっており、その上で剣や斧といった武器を装備している魔物で、中身はない。かわりに、鎧の中に紋様がありそれを破壊する事でこの魔物は倒せるのだが、正直表面から見てもその紋様はどこに書かれているのかわからず、ほとんどマグレ勝負だった。

幸い相手は1体のみだった。他にもいるだろうが他の場所に散らばっているらしくここにはいない。

タイガは腰にぶら下げている鞘から剣を抜いてかまえた。

（一度鎧をばらばらにしてから紋様を探すか・・・。）

そう思ったタイガにリビンググアーマーが自分の得物である剣を大きく振り下ろした。

（思ったより動きが緩慢だ、簡単にかわせる！）

攻撃をかわしたリビンググアーマーの背後に回るタイガ。

「はああッッ！！！！」

大きく剣を腹部付近に横殴りに振るう。

ガシャアツと音と共にリビンググアーマーはバラバラになる。

今のうちにとばかりタイガは紋様を探すが突然武器を持ったままりリビンググアーマーの右手がタイガに襲い掛かってくる。

「なッ!!」

瞬時に剣で受け止めるが、そのままタイガは弾かれてしまう。

「っ・・・。」

そのまま壁に激突したタイガは少しよろめきながら立ち上がる。外傷は無いようだった。

だがさっきのことで紋様を探す暇はないと悟ったタイガ。じっくり紋様を探していたら攻撃されてしまう。

（だったら僕の長年の勘で勝負するしかない。）

そう思うとタイガは急に目にもとまらぬ俊足で敵に近づく。

「げんえいつい幻影突ッ!!」

その俊足を維持したままタイガは背後に回り人間で言う心臓部分に突き攻撃を放つ。

すると、それが当たりだったのかリビンググアーマーはピクリとも動かなくなり、やがて砂となって消えていった。

「ふう。」

ほっと一息ついて座り込んだそのとき、背後に殺気のような気配を感じ取ったタイガ。

「しまッ・・・。」

殺気の正体は別のリビンググアーマーだった。しかもすでに武器を振り上げており、確実にタイガに向けて振り下ろすことがわかる。

（やられるッ!!）

一撃喰らうことを覚悟するタイガ。だが・・・

パンパンパンツと、銃の音が響き渡ったかと思うと、リビンググアーマーは先ほどのものと同じように砂となって消えていった。

「・・・。。。。。。？」

唐突だったため、何が起こったかわからないタイガ。

「なかなかの剣術だけど、最後の最後まで気を抜くんじゃないよ。」

「シ、シャープ……。」

銃を放ったのはシャープだった。

シャープはリビングアーマーを倒すと拳銃を右腰に引っ提げた。左腰側には剣がぶら下がっていた。

「よお、タイガ。アンタもやっぱり戦うんだねえ。」

「あんたもって?」

「さっきティレクのやつが『もうすぐタイガがくるはずだからおまえさんは待ってやっといてくれ。』て言われたんでね。待っていたのサ。」

「いつからそこにいたの?」

「あんたが1体目のリビングアーマーと戦っていたときからずっと。少しばかり見物させてもらったよ。さすがは7年間流浪剣士をやっていることはある。が、ほっとして敵に背を見せるのはどうかと思うよ。」

褒めたかと思うと喝を入れるシャープ。

正直、厳しい……。

「まあ、それはおいといて急いで格納庫へ行くよ。この辺の敵は全滅させといたから。」

「う、うん。わかったよ。」

そう言うシャープに、タイガは再び全力疾走で追いかけるのだった。

## 第13話 艦内戦闘（後書き）

技紹介

幻影突<sup>げんえいつい</sup>

神速で相手の死角に入り、瞬時に突きを放つ技。



## 第14話 Space force is stolen

「くそッ。」

「おらおらあッ！！ぜんぜん攻撃があたつてねえぞ！」

ティレクは現在、小型船を操っていたパイロットかつ、魔物たちを操っている張本人と対峙していた。

茶髪の長髪で白いハチマキを頭に巻いている男性……もとい女性だった。

言葉遣いが男性（それも不良っぽいと言うか荒い性格の人）に似ているので声だけを聞くと男性にしか聞こえない。声の高さは別としてだが……。

その女性にティレクは悪戦苦闘していた。

「真空衝撃波ッ！！」  
しんくうしょうげきは

ティレクは一度剣を鞘に収め、一気に鞘から剣を抜くと衝撃波がその女性めがけて一直線に飛んでいく。

「動きが直線的過ぎるつてのッ！！」

女性は放たれた衝撃波をたやすくかわした。

「おれも暇じゃねえんだ。用をとつとと済ませたらトンスラさせてもらうぜ。」

「その用つてのはなんだ？」

「まあ、単刀直入に言わせてもらおうとあそこにある『スペース・フオース』とやらを1機もらいにきたんだ。本当は3機とももらいたいんだが、お前みたいに邪魔なやつがいるからな。」

「お邪魔虫で俺様は大いに結構だけど………なッ！！」

ティレクは言葉を言い終えると同時に一気に最高速度まで走る速さを上げ、その女性に一太刀あびせようとする。

れつくうは  
「烈空破ッ！！」

「ふ。」

渾身の一撃をその女性は瞬時にかわした。



シャープはいきなり格納庫を目指して猛スピードで走っていく。  
「ど、どうしたんですか、シャープさん。」

ミラージユは疲れているのかふらふらとながら格納庫へと向かおうとする。

タイガはと言うとシャープと一緒に全力疾走で駆けていった。

「しまったッ!!」

シャープが目にした光景は小型船が『スペース・フォース』、それも『コメット・カリバー』をワイヤーでつなげて逃げようとしているところだった。

「させるかッ!!」

シャープがワイヤーめがけて銃をぶつ放そうとしたが・・・  
(しまったッ。さっきの戦闘で銃弾がゼロ・・・。)

思わず自分のおろかさになくなって燃え尽きるシャープ。さしずめ、明日の。ーのとあるワンシーンのようである。

「その姉さん。『スペース・フォース』とやらはいただいていくぜッ!!」

そう台詞を残していくとその女性は追突させた小型船に乗って、『コメット・カリバー』を盗んでいった。

「シ、シャープさん・・・も、燃え尽きてる。」

シャープからは「燃え尽きたよ、真っ白にな・・・。」と言う台詞をぶつぶつぶやいていた。

「ふう・・・。やっと追いついた。」

後から来たミラージユ。そこでタイガはひとつのことに気づく。

「あれ？そう言えばセルリアは？」

そのタイガの一言に、ミラージユはそっぴえッ!!と感じの表情になるのだった。

## 第14話 Space force is stolen (後書き)

### 技紹介

真空衝撃波  
しんくつしょうげきは

一度剣を鞘に収め、一気に鞘から剣を抜くと同時に衝撃波を発生させる技。

烈空破  
れつくつぱ

剣の刃に『気』をまとわせ、通常以上の威力で剣の斬撃で攻撃する技。

斬影突牙剣  
ざんえいついがけん

最初敵を真正面から斬り下ろし攻撃を喰らわせ、瞬時に死角に回り突き攻撃を喰らわし、とどめに斬り上げ攻撃をする技。

## 第15話　セルリア奪還戦1

「正直、とてもたいへんなことになったな。」

それが艦長カイルから発せられた一言だった。

現在タイガたちはブリッジにいる。

カイルが言った「たいへんなこと」とはセルリアのことだ。

盗賊と思われる女性が『ラグナエース』から去った後、タイガたちはセルリアを探したが、どこにも見つからなかった。

ブリッジに装備されているレーダーを使っても見つからない。

そうくると、導き出せる結論はただひとつ・・・。

「セルリアがああ盗賊に誘拐されたってわけかい。」

燃え尽き状態から復活していたシャープ。

「だけど、なんでセルリアが誘拐されるのよ。」

「たしかに。俺様がやつから聞いたのは『スペース・フォース』を盗む、くらいしかああの女から聞いてねーよ。」

「・・・まさか。」

ティレクのその言葉で、タイガがわかったように言った。

「なんなの、タイガ。あんた何かわかったんでしょ！」

「え、うん。あくまで仮説だけどね。」

「今はそれでもいいよ。話してくれないかな？」

と、カイル。

「うん。まあさつきも言ったように仮説なんだけど、セルリアがその・・・盗まれた『スペース・フォース』の中に入っていたとしたら。たしかあの『コメット・カリバー』ってセルリアがパイロットなんでしょ？」

「なるほど。一理あるかもね・・・。」

と、シャープ。

「それが正解だとして、問題は場所なんだけど・・・。」

「ああ、場所なら大体わかるよ。」

「本当ですか、艦長！」

「ああ、『スペース・フォース』には識別コードがあるから、それを追っていけば場所はわかると思うよ。現在、ブリッジのオペレーターに頼んでるんだけど……どう？調子は？」

カイルはオペレーターに現在の調子を確かめる。

「今はまだわかりません。結構の速さで逃走しましたから……。」  
「そうか……。」

オペレーターからの返答を聞くと再びタイガたちに振り返った。

「まあ、そういうわけだから君たちはゆっくりしといてよ。」

「ゆっくりしとけて……だって、セルリアが……！」

「ちよいまち、ミラージュ！」

食ってかかっているミラージュをシャープがとめようとする。

「セルリアのことは心配だけど、ワーワーアタシらが言ったところで事態は変わらないだろ。少し冷静になったほうがいい。」

「……はい、すみません。」

理解したのかミラージュは食ってかかるそぶりをやめた。

どうもミラージュは、シャープにだけ敬語を使うようである。

「さあさあ！！シャープの言葉を納得してくれたと言うことで解散解散。各自休養をとるように。」

カイルがそう言うので、タイガたちはひとまずブリッジを出た。

「……さあ、艦長殿が言っただよようにアタシらは休養とるよ！」

シャープはそう言うと、ブリッジのドア前から解散した。

（休養とれって言われてもなあ……。仲間が誘拐されたと言

うのに、そんなお気楽にできないよ。  
(

## 第16話　セルリア奪還戦2　傭兵ジークフリート

タイガたちが、『スペース・フォース』の識別コードで盗まれた機体を探しているところ、盗賊の女性は正直なところ、困っていた。

現在、盗賊の女性は渓谷にできた洞窟にいた。

（・・・やべ。とんだアクシデントだぜ。）

と、つい思ってしまう盗賊の女性。

『スペース・フォース』を盗んだのは良かったが、なんとその中に人が入っていたのだ。

さすがの盗賊の女性も想定範囲外である。

その『スペース・フォース』の中に入っていた人はセルリアである。どうやら、タイガたちの予想が当たっていたようだ。

そのセルリアはと言うと現在、女盗賊特製の眠り薬で眠っている。

（さてと・・・これからおれはどうしようか・・・。）

洞窟の壁にもたれて座る女盗賊。

この女をどうにかしてあの船に帰さねえと・・・と思う女盗賊。どうやら、必要なもの以外は必要ないようだ。

女盗賊は考える。さっきの手で帰そうとすると今度は捕まる可能性が高いだろうし、いっそのこと宅配便で送るか、とも考えるがあまりにも非人道的だと女盗賊は考え直す。

そもそも、他人のものを盗むこと自体、非人道的だが女盗賊はそのことに気づいていない。

「だあーッ！くそッ、面倒なことになっちまったあーッ！」

髪をくしゃくしゃさせる女盗賊。

ザッ

「ん？」

突然足音が聞こえたので洞窟の外の様子を見る女盗賊。近づいてく



るものは人だということがわかった。

こんな渓谷の洞窟まで来る人間。道に迷ったのか、あるいは盗賊である自分に用があるのか……、とりあえず武器の短剣を腰にぶら下げる。

ある程度までの距離になると、人影は男とすることがわかった。

蒼い長髪をし、腰には長剣を装備していた。

「……おまえは？」

どうやら女盗賊に気づいたらしい。開口一番名前を聞こうとする。

「おれか？おれはラピス。ラピス・スレイミアだッ！おまえさんこそ、誰だ？」

「私はジークフリート・フェルド。傭兵だ。」

「ジークフリート……どこかで聞いたような。」

「ひとつ聞く。」

女盗賊　ラピスが考えている最中にもかかわらず自分の用を済ませようとする傭兵ジークフリート。

「あ、なんだ？こつちが思い出そうとしているつてのによ。」

「『スペース・フォース』とパイロットがそこにあるだろう。」

「　　ん？なんでおまえさんがそれを知ってたんだ？」

「答える義理は無い。」

淡々と言うジークフリート。

「あつそ。悪いがわたせつてんならお断りだぜ。これはおれが危険をかえりみず、手に入れたモンなんだからな。」

「どうしてもか？」

「どうしてもだ。」

渡す気はないとはつきり宣言するラピス。

「そうか。……なら、仕方ない。力づくでもいただこうか。」

ジークフリートはそう言うのと長剣を鞘から抜き出す。

「ヘッ。上等！！」

ラピスもジークフリートが得物を抜くのを見て、短剣を構えた。

「あんた、傭兵って言ったな。」

「ああ、そうだ。」

「誰に雇われたんだ？この『スペース・フォース』と奪い返しにでもきたか？」

「少なくとも『スペース・フォース』の所持者から依頼されたわけではない。」

（　　）　　と言うことは、おれのほかにもこれをほしがってるやからがいるって事か。）

「今なら間に合うが。退いてそれを渡すか、戦って痛い目を見てからそれを渡すか。」

「悪いがその両方にも当てはまんねえな。なぜなら、このおれが勝つかからだああああッ！！！！！！」

その言葉と同時に、ラピスは戦いの火蓋を切った。

第16話〜セルリア奪還戦2 傭兵ジークフリート〜（後書き）

ラピス・スレイミア

年齢 16

性別 女

職業 盗賊

一人称 おれ

茶色の長髪、そしてハチマキを頭に巻いている女性。

性格は男勝りで言葉遣いが荒い。

とても身軽く、また走る速さもそこそこ速い。

修羅場を切り抜け続けたせい、戦闘慣れしている。

ジークフリート・フェルド

年齢 25

性別 男

職業 傭兵

一人称 私

とある依頼人に雇われた傭兵。

蒼い長髪をし、腰には長剣を装備している。

非常に名の知れた傭兵であり、剣客の中では知らないものはほとんどいない。

冷静沈着で、氷系の技を多用することから『冷氷れいひやうのジーク』  
2つ名を持つ。

### 第17話〈セルリア奪還戦3 無情の長剣〉

紅く輝く夕日が沈もうとしているころ、とある渓谷で2人がにらみ合っていた。

互いにそれぞれの得物を構え、隙を見せないようにしている。

（・・・できやがるな。）

茶髪の女性      ラピスの長年の盗賊の勘だった。

一度は猪突猛進しようとしていたのだが、気配に押され一度踏みとどまった。

ラピスに睨みをきかせている傭兵ジークフリート・・・どこかで聞いたことのある名前のようなだが、ラピスはそれを思い出せずにいた。だが、気配で只者ではないということがラピスにはわかっていた。

（まあいい。名前なんざわからなかったって、おれが勝つに決まっているんだ。）

硬直状態が続く。あれから30分は経っていた。が、互いに動こうとはしない。

夕日もほとんど沈み、星空が見え始めていた。

（くそ～。こういうのはやっぱり性しょうじにあわねえなあ。）

ややいらいらし始めたラピス。もともと短気なため、こういう硬直状態は苦手である。

（・・・・・・くそッ！！もう我慢できねえッ！！）

ついに我慢できなくなったのか、ラピスはジークフリートとの距離を一気につめる。

さすが盗賊と言うべきか、みごと盗賊と言うべきか、ラピスの速さは常人の域を超えるものがあった。

「もらったあッ！！」

その俊敏な速さで、ジークフリートの背後を取るラピス。  
そのまま逆袈裟に斬りつけようとする。

「あまい。」

ジークフリートの低い、かつ重みのある声がラピスに聞こえたかと思うと、ラピスの短剣の斬撃がさばかれる。

「――！」

確実に背後を取ったと感じ取っていたラピスだが、それをさばかれたことにより隙が出来る。

「零圧剣。  
れいあつけん」

攻撃をはじめ、隙を見せていたラピスに冷気をまとった衝撃波が襲いかかった。

「ぐあああああああああッ！！！」

短剣ではさばききれず、衝撃波を喰らったラピスは、そのまま壁に激突した。

壁にもたれ、ややぐったりぎみのラピスに立ちなおす暇を与えずに続けて『零圧剣』を浴びせる。

ドゴンツ、ドゴオツ……と、痛烈な音が渓谷中に響き渡る。

衝撃波の影響で、戦場に砂煙が発生していたが、間もなく煙が晴れようとしていた。

とどめをさしたかどうかを確認するためにジークフリートは煙が晴れるのを素直に待つ。

やがて、砂煙が止んだのだが、さきほどまでラピスがいた場所にはその姿がなくなっていた。

「おれならここだあああああッ！！！」

ジークフリートがラピスの声に気がついたときにはすでに遅かった。背中を大きく斬られるジークフリート。

「へ、どうだッ！さっきの砂煙の間におまえさんの背後に回らせてもらったんだぜ。」

「なるほど。私としたことが、少し油断しすぎたか。」

斬られたにもかかわらず悲鳴ひとつあげず、淡々と自分の言いたい

ことを述べるジークフリート。

「何余裕ぶつこいてんだよ！そりゃあおまえさんの技はおれの結構喰らったが、擦り傷程度だぜッ！」

「そうか。なら今度は、その傷程度ではすまない技でおまえをしとめよう。」

ジークフリートはそう言うのと剣を構え直す。

「ヘッ。どんな技仕掛けてこられようと、おれは負けねえぜ！」  
「なら……受けてみよッ。」

次の瞬間、ジークフリートの姿がラピスの視界から消える。

「なッ。」

さすがのラピスもあせるのだが……

「遅い。」

すでに背後に回っていた。

「殺戮氷舞剣さつりくひょうぶけんッ！！」

長剣に冷気を宿し、剣技の乱舞攻撃をするジークフリート。

「ぐわああああああああああああああッッッ！」

「！！！！！！！！」

静かな溪谷に、絶叫の悲鳴があがった。

第17話 セルリア奪還戦3 無情の長剣（後書き）

技紹介

零圧剣 れいあつけん

冷気をまとった衝撃波が襲う剣術。

殺戮氷舞剣 さつりくひょうぶけん

剣に冷気を宿らせ、剣技の乱舞攻撃をする。

## 第18話　セルリア奪還戦4　目指す場所

「……………」

1人の少女が目覚めると、そこはベッドの上だった。

なんでこんなところにいるのかと、少女は考えるがわからなかった。確か自分はジークフリートと言った傭兵に斬りつけられてそのまま気を失った……………それくらいしか思い出せなかった。

「目を覚ましましたか？」

どうやら人がいたらしい。白髪の男性に声をかけられた。

「……………ここはどこだ？」

「医務室ですよ。『ラグナエース』の。」

「『ラグナエース』……………どこかで聞いたような気が……………」

少女が考えているとき、医務室に人が入ってきた。

「おー、目が覚めたんだね。」

「誰だ、おめえは？」

「オレかい？オレはカイル・クロード。一応、この船の艦長だ。」

艦長と言つわりには、威厳っぽさが全く感じられないと少女ラピスは思った。

「このまえはどうも。盗賊さん。」

医務室に入ってきた人の1人、ティレクが一言ラピスに言った。

「……………ああッ！！おまえはあんときの！！」

一度戦ったことのある顔を見て、ラピスはこの場所を思い出す。

自分が襲ったことがある戦艦だと……………

「さあて、傷も癒えたみたいだし、ここで話を聞かせてもらいたいだ。」「

一言カイルは言うつと、テーブルにおいてある紅茶を一服した。



現在、タイガたちはピロティにいる。

医務室から場所を移したのだった。

「話を聞いていいかな？」

「別にかまわねえよ。……つつかおれに拒否権なんてねえだ  
る。それに聞かれる内容も大体はわかるしな。」

「そうかい。それじゃあ……『スペース・フォース』はどこにや  
ったんだい？」

「『スペース・フォース』……ああッ！そうだったッ！  
あの場所に無かったのか、カイルッ！！」

「へ？ああ、うん。無かったけど……。」

その言葉を聞いて、ラピスはしまったとばかりの表情をした。

「どうしたんだい？」

「いや……。おまえさんたちがおれを助けたときボロボロだった  
る。」

「うん。てつきり魔物にでも襲われたんだと思ったけど……。」

「……実は、おれ以外にも『スペース・フォース』とやらを  
狙ってた輩がいたんだよ。」

それを聞いて、カイルのみならず、その場にいた全員が驚いた。

「……だれなんだい？それは。」

「たしか……。ジークフリートつつてたな。」

その名前に、その場にいたシャープの眉がピクリと動く。

だが、何もその後言葉を発さなかった。

「誰かに雇われたとか言ってたな、そいつは自分の職業を傭兵って  
言ってたからな。」

「そうか……。それじゃあセルリアも……。」

「セルリア？誰だそれ？」

「君と一緒に誘拐していった女の子のことだよ。」

と、タイガ。

「誘拐したんじゃないッ！！勝手にあの機体ん中に入ってたんだッ  
！！」

今にも噛み付きそうなくらいの勢いで、ラピスは反論した。

「まあまあ、落ち着いてよ。」

2人の間で火花が散っているようだったので、カイルはとにかくその場を落ち着かせようとする。

「……………それで、その女がどうしたって？」

「うん。実はいなかったんだ。周辺を探したんだけどね。」

「そうか。ってことは、あの野郎が連れ去ったと言うわけか。」

「そう言うことになるんだけど、そのジークフリートって言う男はどこにいったんだい？」

「しらねえな。あの男に関しちゃあな。」

『スペース・フォース』ならびに、セルリアの行方すらも手がかりゼロになったカイルたち。

下手をすれば、この広い宇宙をしらみつぶしに探すことになる。

「ジークフリートの居場所なら、だいたいわかるよ。」

そう言ったのは、シャープだった。

「本当かい？シャープ。」

「ああ。やつはたぶん惑星『ファーマル』にいるはずさ。」

「そうか。だけど、なんでシャープはその男の事知ってるんだい？」

「へ。あゝいや……。昔、一度会ったことがあってねえ。そのときによつが自分の居場所が『ファーマル』だっていつてたんだよ。」  
少々怪しかったが、下手に聞けばただでは済まないだろう。

「まあ今は、シャープの言うとおりに惑星『ファーマル』に向かうでしょう。」

カイルはそう言うトラピスへの聞き取りを終わった。

第19話　セルリア奪還戦5　『色々』

（・・・ったく、あの艦長。何考えてんだ？）

そんなことを考えながら、盗賊ラピスは『ラグナエース』の艦内をうろろろしていた。

ラピスはあるのあとカイルに「あ。もう艦内を自由にしていよいよ。」と言われたのである。

盗賊を捕まえたんだから普通は牢屋行きとかだろうにうろろろについてかまわないと言われてラピスは正直なところ、とまどっている。

盗賊を牢屋に入れないなんて、逃げておかまわないと言っているものである。

とにかく、そんなわけで艦内をぶらついているラピスなのだが艦内は広くて何があるのかなんて格納庫くらいしか知らないの、しかたなくちようどラピス視点から見て暇そうなタイガに艦内案内をさせている。

（なんで僕がこんなことを・・・。）

一方のタイガはそんなことを考えていた。

だが艦長が「友好的にいこう」と言ったので仕方ないとばかりに案内をしている。

正直、元々敵だったラピスと仲良くなるとそう簡単には出来ない。

「えーっと。さっきまで僕たちがいたところはピロティと言ってみんなの憩いの場所として普段は使用しているんだ。」

タイガも実のところ、最近ここに来たばかりで実はほとんど何も知らなかった。

なので、説明的にも簡略的なことしかいえない。

「そう言えば、タイガだっけか？」

「ん、なんだい？」

「おまえは何でこの『ラグナエース』にいるんだ？」

「何でいるって・・・。」

ちょっとした事故と言うか事件にあつて、とりあえずこの船に住ま  
せてもらう事になったなんて……

（いえない……）

「おいッ！聞いてんだけどよ。」

「それは……。まあ、色々あつてね。」

「なんだ？その色々って。」

「まあ色々だよ。それより、なんでラピスは盗賊をやつての？」

タイガの質問に、ラピスも先ほどのラピスと同じく言葉が詰まる。

「……それは、その……。色々だッ！」

「なんだよ。その色々って。」

「色々だから色々なんだよッ！」

「は、はあ……。」

頷くくらいしか出来ないタイガ。

追求することは今のタイガにはできない。

もし追求したものならラピスのことである。「なら先におめえの『  
色々』の内容を教えやがれてんだッ！」とか言つてきそうであ  
る。

自分が『色々』の内容を話せないのに、相手に『色々』の内容を教  
えてもらおうなんて、タイガ自身むしのいい話だと思つていた。

「まあ、とにかく。艦内の案内の続きをするよ。」

「おそろしく変な話の転換の仕方だな。」

「ま、まあいいじゃない。」

とにかくこの話題から切実に逃れたいと思つているタイガであつた。

## 第20話　セルリア奪還戦6　忍び寄る脅威

現在時刻は草木も眠る丑三つ時。……と言っても宇宙なので恒星の近くを通るとき以外はほとんど真つ暗なのだが。

戦艦『ラグナエース』を操作するオペレーターや格納庫の一部の整備班の人たち以外の人はほとんど就寝していた。

とは言っても、オペレーターたちも24時間完全無休養と言うわけではなく、時間で常に交代していた。

朝や昼間や夕方のときの『ラグナエース』内のにぎやかさは、この間だけなくなる。

しずかな『ラグナエース』というのは、なんとも妙と言うか変な感じがしてしまう。

「『ラグナエース』。あいつが乗ってる船か。」

そんな『ラグナエース』から距離2万〜3万キロほどの先に、戦闘機が一機。

全体的なフォルムがなんだか『スペース・フォース』に似ていた。

「命令なんだね。悪く思わないでくれよ。」

戦闘機のパイロットはそう言うつと、注射針のように先が鋭くかつた長さ5センチくらいの針……と言うかカプセルを『ラグナエース』に向けて発射する。

その針に似たカプセルは『ラグナエース』の表面に突き刺さると、謎の液体を『ラグナエース』に注入する。

「24時間後が楽しみだなあ。船内がどんなになるのか。そしてあいつがどうなるのか。」

独り言のように戦闘機のパイロットはつぶやくと、その場で『空間穴転移移動』をしてその場から姿を消すのだった。（正しくは『別空間』へ移動した。）

午前8時。

タイガはベッドから起き上がった。

いつもはもっと早く起きるのだが、ベッドに入ったのはいいもののセルリアのことが気になって眠れなかったのだ。

今頃はどうしているだろうか……。

ジークフリートという人は、どうして『スペース・フォース』と一緒にセルリアをさらったのだろうか……。

そう言えば、シャープは何かジークフリートのことを知ってそうだったけど……。

グキウウルルルルウウウウウウ……。

………お腹減ったなあ。

食堂のご飯は美味しかったなあ。

流浪時代のティレクのつくってくれた料理は核兵器並だったなあ。

………などと、お腹がなった後は完全にセルリアのこととは関係ないことを考えたタイガ。

（とりあえず食堂に行こう。腹が減ってはいくさができぬってね。）  
ベッドから起き、服装を着替えた後タイガは食堂へと行くのだった。

「お、タイガじゃないか。アタシと一緒に朝食食べないかい？」  
食堂に入ってきた早々、シャープとミラージュとティレクに会う。

………あれ？

「ねえ。ラピスの姿が無いようだけど……。」

「ああ、ラピスならもう朝食済ませてどっかいっいたらしいわよ。」

「俺様がラピスにあったとき、そう言ってたからな。」

「ふん。」

「あ、そういえばラピスのやつ『なんか嫌な予感がするからちょっとばかり気をつけたほうがいいぜ。おれの盗賊としての勘がそう言ってるやがるんだ。』とか言ってたな。」

「なに？その『嫌な予感』って？」

「さあ。俺様に聞かれてもなあ。そんなことよりめし食いに行こうぜ。」

『嫌な予感』というのが少し気になったものの、朝食を食べたがっているティレクに、タイガはとりあえず賛同することにした。

## 第21話　セルリア奪還戦7　ティレクの災難（笑）

「……………と言うことがありました。艦長に連絡しようと考えたのですが、相手も何もしてきませんでしたし……………」

「うん。報告ありがとう。」

「失礼します。」

カイルと深夜の当番のオペレーターが会話をしているとき、タイガがブリッジにやってきた。

「ん、タイガか。どうしたんだい？」

「え？あ……………」

艦長を目の前にして、言おうとしていたことをためらうタイガ。

「……………ああ。なるほど。セルリアのことだね。」

ずばり当てられて、タイガは「違います。」とは言えなかった。

「そうだなあ……………はつきり言っ、今のところはなんとも言えないね。無事が無事じゃないのか……………。もちろん、無事であってほしいけどね。」

「そうですか……………」

収穫ゼロだったので、少し気を落とすタイガ。

「まあ、そんなに気を落とさないでよ。オレだって仲間のことだから心配なんだから。」

「はい……………そういえば、さっき何か話してたみたいですよ……………」

「ああ、あのことが。たいしたことはないとは思っただけど、深夜3時ごろ何か不審な船がこの『ラグナエース』を偵察してたようなんだ。」

「それで何かされたんですか？」

「いや。何もされてないんだ。敵なら何か妨害とかしてくるはずなんだけど……………」

「じゃあ何のためにその船は……………」



その言葉のさきを言おうとしたとき不意にティレクが言った……  
・と言っかラピスが言った言葉を思い出す。

『なんか嫌な予感がするからちよつとばかりし気をつけたほうがいいぜ。おれの盗賊としての勘がそう言ってやがるんだ。』

「……………」

「ん、タイガ。どうした？」

急に何か考え出したようなタイガを見て、カイルは声をかけた。

「あ、いいえ。なんでもありません。」

まさかそんなわけない……………」

「それじゃあ、艦長。失礼しました。」

「うん。何か情報があつたらいうから、それまではリラックスしてなよ。」

カイルのそんな言葉を背に受け、ブリッジから出た。

だが、ブリッジから出たというものの、タイガはやることがない。ティレクはおそらくティーラウンジかそこから女性のナンパをしているだろう。

そしてその光景をミラージュに見られて制裁を受けているだろう。

（ティレクはたぶん暇じゃないな。）

そんなことを考えながら第3階層までさまよっていると、通路でティレクがナンパをしているところを見た。相手はちなみに2人。

「やあ、麗しきお嬢さん方。どうかこの俺様と、練乳より甘いひとときを楽しみませんか。」

そう言ったティレクの左手にはバラが一本握られていた。おそらく、

『ラグナエース』にあるコンビ二で買ったものだろう。

ナンパされた女性たちは、見た感じまんざらでもない様子だった。なぜなら頬を赤らめていたからだ。

「かわいいねえ、キミ達。その赤く染まった顔。リンゴみたいに食べちゃいたいよ。グフォアアアアアアアアッツ！！！！！」  
とどめの台詞を言っているとき、ティレクは背後から後頭部へ跳び蹴りされた。

そしてそのまま地面とキスしながら顔スライディング……。  
「ごめんなさいねえ。この色魔は女を遊び道具としか考えていない男失格の人間だから。」

跳び蹴りしたやつ……ミラージュはそう言っているとティレクを引きずってどこかにいくのだった。

（ああ。僕の思ったとおりの光景がついさつき発生した。）  
そう思うと、タイガは再びぶらぶらと艦内を散歩するのだった。

「あれ、ミラージュ。それはなんだい？」

「これ？ボロ雑巾。人型の。」

「……………」

「……………」

「……………へえ。」

その後のミラージュとシャープの会話だった。  
それだけ。

## 第22話　セルリア奪還戦8　真夜中の侵入者

現在、草木も眠る丑三つ時。

今、『ラグナエース』に危機が訪れようとしていた……………。

ここは、ブリッジ。現在、2人のオペレーターが艦内監視と船の操縦を分担で行っていた。

ピピピ……………

「ん？」

「どうした？」

「いや。倉庫に何かあったみたいで……………」

そう言っているとブリッジに搭載されている艦内モニターで確かめる。

すると、何者かが倉庫でうろついているところをモニターで確認できた。

暗くてわかりにくかったが、少なくともこの船の人間でないことはわかった。

そして、それだけがわかった次の瞬間、モニターが壊されたのか何も映らなくなってしまった。

急いで緊急の放送を流すオペレーター。

「緊急事態ッ！倉庫に何者かが侵入しているッ！！繰り返す！倉庫に……………」

「なんだってのよッ!!」

それがミラージユの第一声だった。

髪がかなりぼさぼさなので寝相が悪いようだ。

タイガ、ティレク、シャープ、ミラージユは現在倉庫に向かっていく。

タイガたちの部屋は第2階層。そして倉庫は第5階層にあるので結構長い道のりだ。

「なんだっていいさッ!!それにしても何でこんな真夜中に侵入者なんか・・・。」

「そういえば艦長が昨日の真夜中に誰かがこの船を監視してたっていつてたけど、まさか今回の騒ぎの原因って・・・。」

「たぶんそいつの仕業だろうね。」

「とにかく、早く倉庫へ行こうッ!」

第5階層・・・。

倉庫付近で、茶髪の女性が侵入者と交戦していた。

あの放送の後、真っ先に駆けつけたのがラピスだった。

「はッ!!」

元盗賊ラピスが短剣を振るって衝撃波を繰り出す。・・・が、相手に全く効いていない。

侵入者は、簡単に言ってしまうえばスライムだった。あの某国民的ゲ

ームやRPGゲームにはお約束の雑魚敵……のはずなのだが、  
どういうわけかラピスの攻撃が全く効かないのである。

アメーバみたくはつきりした形状と言うものがなく、衝撃波でふっ  
飛ばしてもすぐ再生するやっかいな魔物だった。

はつきりした形状……つまり自由に形を変えられるので、お  
そらくこの能力を生かしてこの船に進入してきたのだろっ。

「ラピスッ!!」

そんな相手と戦っているとき、背後から自分の名前が聞こえたラピ  
ス。

振り返ると、タイガたちがこちらに走ってくる姿だった。

「おせーぞッ！おれがせっかく時間稼ぎしてやってるのにッ！」

「グチは後で聞いてあげるから、……それより、あれが侵入  
者だね。」

タイガの視線の先にはスライムがいた。

「ああ……。正直、厄介な相手だぜ。」

「だけど、こいつを倒さないこの船は確実に……。」

タイガは得物を構えた。

同様に、他の一行もだ。

「よし……行くぞッ!!」

## 第23話 セルリア奪還戦9 スライム撃退作戦

「くられッ！爆裂斬ッ！！」  
ばくれつざん

タイガは得物である剣に魔力を込めて、スライムに大きく振りかかった。

ズバアッと景気よくスライムは斬れて、通路にゼリー状の物体が飛び散った。人で例えるなら……いや、けっこうグロテスクなのでやめておこう。

「やったか？」

「いや、たぶん無理だろうな。」

そのラピスの言葉の理由はすぐにわかった。

飛び散ったゼリー状の物体は、一度散乱すると再び元の1つのゼリー状の物体に戻ったからだ。

「ならこれでどうだいッ！！」

シャープは腰にかけていた拳銃を構えると、

「連射ああああッ！！」

バンバンバンバンバンバンバン……

とにかく弾切れになるまで撃ちつづける。

だが、スライムには効果なし。ゼリー状の身体の中にはシャープが撃った銃弾が空しくふよふよと浮いていた。

「なら俺様の攻撃はどうだッ！！」

3番手ティレク。

「くらいやがれッ！疾槍突ッ！！」  
しつそつ

スライムとの間合いが広すぎるにもかかわらず、ティレクは槍を構えると刹那の間にスライムとの間合いをつめ、加速を保ったまま突きを放つ。

ドッゴオオオオンと、車が壁に激突したみたいな音と一緒に、ス

ライムは大きくぶつ飛ばされてゼリー状の物体を飛び散らせる。  
が、これも効果なし。再び元の姿（と言っても合体するだけ）に戻るスライム。

「ダメか・・・。」

「次はミラージュ。アンタの番だよ！」

とシャープが振り返るが、元いた場所にミラージュはいなかった。  
そしてそこにはこんな置き手紙。

『あんな見た感じでわかるヌルヌルしてそうなやつと戦えません。  
タイガ、シャープさん、ラピス、・・・ついでに色魔男、がんばってね  
』

・・・逃げ。

ついでに言うとミラージュは格闘術で戦う。のだが、相手はスライム。

剣や槍や拳銃や短剣と違って、もろに相手と接触しないといけないのでなおさら逃げたくなつたのだろつ。

「・・・あとで懲らしめないかね。」

ボソリと呟いたシャープの手には・・・拳銃。

それにしてもいつの間にかこんな置き手紙を書いたのだろうか・・・。  
そんな疑問を抱くタイガだが、そんな場合ではない。

「それにしてもどうすんだよ、この魔物。」

さつきからスライムの攻撃をかわしているラピスが言った。ちなみに、ティレクも。

というか、スライムが攻撃しているのを見たのはタイガたち初めてである。

ゼリー状の身体の一部を伸ばして、鞭のようにして攻撃するのがこのスライムの攻撃方法だった。

「……と、説明している場合じゃない。」

「でも、僕たちの攻撃が全く通用しないんじゃないか……。」

「水みたいに攻撃しても手ごたえゼロだからねえ。」

「……水？」

シャープの言葉で、タイガはひらめいた。

「そうだ！相手が水なら、いつそ凍らせればいいんだッ！」

「でも凍らせるって、どうなんだよ。」

「あ……。」

ラピスの言葉で、思考が停止するタイガ。

現在、この場にいるメンバー全員魔術は使えない。

よって、氷系の魔術も使えないのである。

「いや。方法はあるよ。」

と、シャープ。

「本当？」

「ああ。この5階層には冷凍食品とかを保存する冷凍庫があるんだよ。そこまでおびき寄せれば……。」

倒せるかもしれない……。

「どこにあるの？」

「ちようどあそこの角を曲がってすぐだね。」

シャープの指差す方向には……スライム。そしてその先に曲がり角があった。

「……よし。」

そう言うとタイガは先ほどから攻撃をかわしまくっている、もしくは受け流している2人に、

「これから僕がスライムの後ろ（？）にいくから2人は注意をひきつけておいてよ。」

「ん？ああ、わかった。……で、ことだ。金髪、ミスんなよ。」



金髪……ティレクのことであろう。

「わかってるって。そんなに俺様ドジじゃないぜ!」

そう言い終ると、いつそう避けるのに磨きがかかり始める2人。

そして、タイガは隙を見つけようとする。

一瞬でも隙ができれば背後に回ることはタイガにとって造作もないことだった。

そして……そのときがくる。

(……いまだッ!)

次の瞬間、タイガの姿が掻き消える。

と、思ったらスライムの背後に回っていた。

(疾いッ!)

例えるなら疾風のごとき。肉眼で捉える事はほぼ不可能だった。

「はぁッ!」

挑発にタイガは背後(?)から一発斬りつける。

すると、まんまと挑発にのるスライム。タイガに攻め寄る。

釣りで例えるなら餌に魚が食いついた……と言えればいいだろう。

タイガは角を曲がると、そこに『冷凍庫』とプレートに書かれていた部屋を開けた。スライムが確実にタイガに迫ってきていた。

だが、タイガにとってはこれこそが狙い。

ある程度距離が近づくとタイガは冷凍庫に入った。

それにつられるように入ってくるスライム。

そして、スライムが攻撃にかかろうとしたとき、スライムの目の前からタイガが掻き消える。

スライムを出し抜いたタイガはそのまま冷凍庫の扉を閉めた。

中でバンバンと、なにやらたたく音が聞こえるがおかまいなし。

やがて2〜3時間ほどすると何も聞こえなくなったので、扉を開けてみると、そこには氷のオブジェとなったスライムがいた。

スライム氷付け作戦、成功ッ!!

## 第23話〜セルリア奪還戦9 スライム撃退作戦〜（後書き）

### 技紹介

ばくれつざん  
爆裂斬

剣に魔力をともらせ、相手に大きく振りかぶる技。

しっそうついで  
疾槍突

刹那の間に相手との間合いをつめ、加速を保ったまま突きを放つ技。  
ある程度の遠距離からの攻撃も可能。

## 第24話　セルリア奪還戦10　魔女風の少女

ここはブリッジ。

「みんな。侵入者の撃退、お疲れさん。」

「まだ冷凍庫ん中にいるけどな。凍っちまってるけど……。」

ラピスの言うように、現在『ラグナエース』の冷凍庫にはスライムのオブジェ（と言っても謎の物体が変な形で固まっているだけだが）がある。

問題はこのスライムをどうするかだ。

「艦長。あのスライム、どうするんですか？」

少しばかり気になり、タイガがカイルに尋ねてみる。

「うーん……。凍っているなら、凍らせたままどっかに捨てようと思ってるけど。」

たしかに。普通に戦って倒せないならそのままどっかにやったほうが身のためだ。

「それよりオレも聞きたいことがひとつあるんだけど。」

「なんだい？」

「シャープの後ろで転がってるミラージュは……。何かあったの？」

カイルが指を指している場所には、どこかの戦争に借り出されていたのか？と思うくらいボロボロになっていた。

頭にはいくつものたんこぶが出来上がっており、なにやら銃弾の穴らしきものがミラージュの羽織っていたマントにはあった。

虐待の域を超え、もはや殺人未遂の域である。

「気にしないでくれよ、カイル。」

そういうシャープの手には、ちょうどタイガとティレクの死角になるように構えられた拳銃が、カイルに向けられていた。

本気でやりかねないのがこのシャープの恐ろしさ。

「そ、そう言うんなら気にしないでくれよ……。それより、

もうすぐ着くよ。」

「着くつて……まさか。」

タイガにカイルはうん。と頷く。

「惑星『ファーマル』さ。」

「……………ん？」

「やつほーッ！！ジークくん 元気にしてますかな？」

蒼い長髪の男に向かって比較的高い声がかけられる。

黒い衣装に黒いマント、そして魔女のようなデカく黒いとんがり帽子をかぶっている少女……というか『魔女のような』ではなくぱつと見た目だれもが『魔女だ！』と思わせる身形だった。

「……………なんだ？」

「なんだって言われてもねえ。私はただ、その機体を取りに来ただけ……………うおおッ！！オマケも一緒！？」

「ああ。『スペース・フォース』のパイロットだと思って連れてきた。今は気絶させてある。」

ブラチナブロンドの髪をした少女。さらわれてからろくに目覚めたことがない。

目覚めたと思ったら気絶or睡眠。そのくり返しである。

「いやあ、それならジークくんにはなおさら感謝しないとね あ、そうそう。約束のブツはちゃんとキミの口座に振込んだから。」

口座ということは銀行だろうか。どうやら約束のブツとはお金のようである。

「そうか。」

短く答える長髪の男。

「それじゃ、もらってくね。」

魔女風の少女はそう言う。「『スペース・フォース』と呼ばれる機体とブラチナブロンドの髪の少女を、手下と思われる人たちに運ばせる。」

「それじゃあ、縁があつたらまたね。」

それだけ言うと、魔女風の少女と手下は、頂くものを頂いてその場を後にした。

## 第25話　セルリア奪還戦11　対面

惑星『ファーマル』。

5：5の割合で陸と水がある惑星だ。

さらに50%の陸地が岩石砂漠であり、人が住むには少し不便だ。リーダーが示していたところより少し離れた場所に平らな地形があったのでそこに『ラグナエース』を着陸させた。

見渡す限り砂色の大地。ところどころに柱のように立つ岩もあった。

「ここにジークフリート……だっけ？その人がいるんだね。」

「ああ。たぶん……だけどね。」

たぶん……とか言いながら、シャープの目はここに必ずいると言っているように思えるタイガ。

「さて、行こうッ！！ジーク……なんとかの人の場所に！！」

「しまらねえな、タイガ。相手の名前くらい覚えとけよ。」

「う、うるさいなあ！長い名前だからちよつとばかりど忘れしただけだ！」

「はいはい、タイガにラピス。その辺にしときなよ。」

そういうシャープはつかつかと早歩きで前へと進む。

それに続くように、ティレクと傷がゴールドの手によって癒されたミラージュ。

「あ、まってよ。」

「おれを置いてくなよ！今度こそやつにぎゃふんと言わせてやるんだから……。」

2人の言い合いを完全無視する3人に、急いで着いていくタイガとラピスだった。

ピピピ・・・

シャープの持っている通信機が鳴り出した。

「あいよ、こちらシャープ。」

《あ、シャープかい？実は『スペース・フォース』が移動し始めたらしいんだ。》

「移動だつて！？どこに？」

《わからない。ただ、動きが遅い。急げば追いつくかもしれない。》  
「わかったッ！」

シャープは通信を切る。

「シャープ、『スペース・フォース』が移動し始めたつて？」

「語幹のまま思えばいいさ。急ぐよッ！」

「いやあゝ。まさか護衛までしてくれるなんて感謝感激だよ！」

「別に。提示額より多く受け取ったのでな。当然だ。」

ジークフリートはそう言いながら魔女風の少女とその手下たちを護衛していた。

「それで、この機体をどうするつもりだ？」

「あゝ．．．それは企業秘密。私の一存では口には出せないねえ。」

「そうか．．．。」

真空衝撃波あッ！

殺気を感じたジークフリートはとっさに鞘から剣を抜くと、

「零圧剣ッ！！」

冷気をまとった衝撃波を後方に放つ。

ドゴンと衝撃波同士が直撃し、消える。

「うわあ。なんスか？なんスかあ！？」

突然の出来事に、ややわざとらしく驚くあたふたする魔女風の少女。ジークフリートの視線の先には、5人の男女がいた。

そのうち1人は自分が一度やりあった人物。

「おらあッ！！この前の仕返しと、ついでにその機体と女をかえしてもらうぜッ！！」

ラピスがジークフリートに向かって大声で言った。

だが、ジークフリートはラピスとは別の人物を見ていた。

「．．．．．シャープ、見られてるよ。」

「わかってるって。」

タイガの忠告も本人にはすでにわかっていたようだった。そして一言。

「久しぶりだねえ、ジーク。5年ぶりか。」

「やはりシャープか。もしかとは思ってたが．．．。」

「え？え？なになにジークくん、あの年増と知り合い？」

『年増』と言う女性にとってバッドな響きを持つ単語を聞いて眉をピクリとシャープが動かす。

その行為に、「ああ、やっぱり気になるんだ。シャープでも。」と



つい思ってしまうタイガ。

「まあな。」

魔女風の少女に短く答えるジークフリート。

「それより、おまえたちは先に行ってる。ここは私が引き受ける。」

「アイアイサー！」

敬礼をしてから魔女風の少女は再び作業を手下たちに開始させた。活動を開始したのにもかかわらずタイガたちはその場から追おうとしなかった。いや、できなかった。

ジークフリートから放たれる異様ともいえる殺気にタイガたちは動けない。

「・・・・アンタ、なんで『スペース・フォース』とセルリアをさらったんだい？」

一時期の静寂を破ったのはシャープだった。

「別に。仕事だからだ。」

「・・・・そうだったね。アンタは昔からそんな事務的で機械的なやつだったよ。他人に仕事を言われるとどんなことでもアンタはしていた。」

「私のことをわかっているのなら、それでいいだろ。私はそういう男だ。仕事なら盗みでも人殺しでもやる。」

「そうかい。・・・・なら。」

シャープは拳銃・・・・ではなく、剣を取り出す。

シャープはもともと拳銃より剣を扱うのに長けているのだ。

ただ、よほどのときしか使わないのだが・・・・。

「ここでアンタを殺すよ。」

「・・・・どうしてだ？」

剣を構えて、シャープは言う。

「仕事だからだ。」

## 第26話　セルリア奪還戦12　2つの戦い

「アンタたちは早く『スペース・フォース』とセルリアを取り返してきな。ここはアタシが引き受ける。」

シャープは剣を構えたままタイガたちに言った。

「でもシャープさん。知り合いなのかどうかはわかりませんが、あいつはたぶん手加減はしませんよ。」

ミラージュは、気配でわかっていた。

相手は例え知り合いだろうと仕事なら容赦なく殺す。そんな冷酷な男なのだ。

だが、それはシャープ自身が一番良く知っていることである。

まだタイガたちには話していないが、自分とジークは知り合いだと。そして、知り合いであるからこそ、はつきりと言えることだと。

「手加減なんて、戦場には無用さ。……さあ、早くいきな。」

タイガは、シャープが本気だと言うことがわかると、他を引き連れて『スペース・フォース』とセルリアを取り戻しに行く。

敵が自分の横を通るが、微動だにしないジークフリート。行くなら行けと思っているのだろうか。

やがて、タイガたちの姿が見えなくなる。

「……話してないのか？おまえが私の知り合いだと言うことを。」

「ああ。会うこともないだろうと思ってたからね。……しかしまあなんだ。こんな感じの再会なんて本当にあるんだねえ。偶然とは恐ろしい。」

間。

そして、ジークフリートは剣を抜く。

「……本気かい？」

「さあな。」

ジークフリートの言葉を聞き終えると同時にシャープは大地を蹴る。

戦闘開始の合図であった。

「いや、らくしよーらくしよー ま、私だから当然か。」

余裕を表面に全開している魔女風の少女。  
少女の目指す目的地まであと少しである。

「まてえええええッ!!」

遠くから声が聞こえたので後ろを見る魔女風の少女。

そこには、ジークフリートが足止めしているはずの人たちがいた。

「げッ!? マジ? もう追ってきた!」

手下たちに早く運ぶように指示を出す、いくらなんでも限度があった。

なにせ鉄の塊をワイヤーで、しかも綱引きの要領で引っ張っているのだから。

このご時勢、なんとも原始的であった。

やがて、完全に追いつかれる。

「はぁ………はぁ………。さぁ、おとなしく返してもら

うよ。」

ここまで猛スピードで走ってきたのか、息切れしているタイガ。後続くように息を切らして他の3人が到着する。

「うわぁ。ホントに追いつかれちゃったよ。」

「今なら危害は加えない。おとなしく返してくれれば。」

半ば脅しだとわかっているタイガであったが、それでもしないとわたさないだろう。

「にははははははッ！私を脅しても無駄だよ。これはもう私のものなんだから。」

タイガの脅しに笑ってみせる魔女風の少女。

「キミのものじゃなくて、元は僕たちのものなんだ。」

「いいや。違うよ。私のものは私のもの。私が一回でも手を触れたものも私のもの。よって元キミたちのこの機体とこの子は、私が一回手を触れたから私のもの。」

恐ろしいほどに自分勝手なジャイアニズムを言う魔女風の少女。

「いや、僕たちのだ。」

「いや、私のもの。」

「僕たちのだ。」

「私の。」

「僕たち。」

「私。」

「ぼ。」

「わ。」

「。」

「。」

最後は略しすぎて何が何だかわからないことを言っていたタイガと魔女風の少女。

というか、言い合いがもはや子供の物の奪い合いに似ていた。

大人に近い人たちが情けない。

「タイガ、今はそんな低次元な言い合いをしている場合じゃないで

しょッ！」

「そうだが、タイガッ！」

女2人に言われ、一度冷静になるタイガ。

「と、とにかく。痛い目を見たくなければ返してよ！」

「ヤダ。」

2文字で簡潔に言われ、タイガはついに剣を抜く。

普段温厚なのだが、今は早いとこ返してもらってシャープの援護をしないといけないと言う考えが、タイガを動かしていた。

「ふっふっふ。この私と戦うの？」

「素直に渡してくれないならね。」

タイガの目は据わっていた。

「にゃっはっはっはっは……よかろう。このウィズ様が相手を  
してあげよう。」

相手をまるで小バカにするような口調で、魔女風の少女ウィズは戦いの火蓋を切った。

## 第26話〜セルリア奪還戦12 2つの戦い〜（後書き）

### キャラクター紹介

ウイズ・M・フィアリス

年齢 15

性別 女

職業 魔術師

一人称 私

黒い衣装に黒いマント、そして魔女のようなデカく黒いとんがり帽子をかぶって、いかにも魔女な感じの服装をしている少女。

ムードメーカー的な人物で、かなり明るい性格。

魔術師としての腕前も幼いにもかかわらず一人前で、容姿からは想像ができないくらいの実力がある。

相手を小バカにしたような口調で話したりするので、恨みをかう事もしばしば。

## 第27話 セルリア奪還戦13 知人同士の戦い

ガキンツ、キンツとただっ広い岩石砂漠で、金属音が響き渡っていた。

互いに刃と刃を交差させ、金属音を響かせる。

「おりゃあッ!!」

シャープがジークフリートに剣を振り下ろす。が、難なく受け止められる。

「……ふんツ。」

ジークフリートは交差している剣を力づくで振り払い、シャープとの距離を強引に広げる。

飛ばされてややひるみ気味のシャープに、容赦ない一撃を加えようとするがシャープは体勢を瞬時に立て直すとその攻撃を真正面から受け止めた。

「ほう。腕を上げたな、シャープ。」

「アンタこそ、悔しいけど腕を上げてるねエ。」

短く互いに言葉を交わすと再び互いの間合いを大きく広げる。

「零圧剣ッ!!」

間合いをとると同時にジークフリートは冷気をまとった衝撃波をシャープめがけて放つ。

「はああッッ!!」

シャープは剣を一度、バットを持つように構えると野球ボールを打つように、衝撃波を雲散霧消させる。

その刹那、ジークフリートはシャープとの間合いを一気につめる。

衝撃波は注意を引き付けるためのおとりだったのだ。

ジークフリートは剣を下部から斬り上げる。

「くッ。」

とっさに反応し、回避しようとしたシャープだが、左腕を斬られる。さらに一撃。

「があッ。  
さらに。」

ズバアッ

さらに。

ズシャアッ

「ぐあああああッ！！！」

最初の一撃でひるんだシャープに容赦なくジークフリートは連続で斬りこんだ。  
そしてさらに。

キン・・・

もう一撃攻撃しようとしたが、シャープは4度目の攻撃は受け止めた。

「・・・4度目の正直ってね。」

「・・・普通は3回目だな。」

ジークフリートは受け止められると一度シャープと間合いを置く。  
その間にシャープはよろよろと立ち上がる。

左腕1ヶ所、腹部に交差で斬りつけられ計2ヶ所。

その傷跡からは絶え間なく紅く、そしてやや黒い血が流れ出ていた。



よほど深く斬りつけられているようである。

並の鍛え方をしている人間なら、ここで立ち上がることは不可能だろう。

（さあて、これからどうしようかねえ。）

シャープは考える。

せめて一撃でもいい。一撃でもくらわせてやりたいと思っていた。だが、その一撃でさえやつは攻撃を許さない。

「……これで終わらせてやろう。」

低く、重い声がシャープの耳に入る。

やつにどうやって一撃を与えるかという考え。シャープがああ短い時間で考えたのはひとつ。

そして、それをする絶好の機会が訪れようとしていた。

やつが攻撃した直後に一気に間合いをつめ、体勢が取れていないジークフリートに一撃を与える。

うまくいったら次は2撃目、3撃目……。

「終わらせることができるんならやってみな。」

「……わかった。」

シャープの挑発っぽい言葉にうまくのったジークフリート。

ジークフリートは剣の刃に魔力で冷気を集中的に発生させる。

「氷龍剣ツ――」  
ひょうりゅうけん

冷気を集中させた後、ジークフリートはそれを龍の形にし氷の龍をシャープめがけて放った。

（今だッ！！）

シャープは一気に距離をつめる。

氷の龍はそんなシャープに向かって攻撃をしに来るがシャープはおかまいなしだ。

とにかく今がチャンス。そのためなら、腕の一本くらい氷付けにされてもかまわないと思っているのである。

案の定、ジークフリートは隙だらけだった。

氷の龍を放つ際、大振りだったので当然であろう。

そんなジークフリートにシャープは渾身の一撃を与える。

ズバァッ

紙がはさみで切られるように、ジークフリートの背中豪快に斬られた。

「……………」

悲鳴や苦痛の一言も漏らさなかったが、ジークフリートの表情は苦悶によって歪んでいた。

（さらに一撃ッー！）

もう一撃背中を斬りつけようとするが、2撃目は与えなかった。瞬時に振り返り、シャープの一撃を受け止めるジークフリート。

「なッ……………」

2撃目を与えることができず、シャープは一度距離を置く。そして、剣を構える。

だがジークフリートはそのシャープの姿を一度見ると、剣を鞘に収めた。

「????」

その行動に、思わずシャープは頭の中が『?』になる。

「なんのつもりだい？」

「別に。もう先へ行ってもかまわんぞ。」

「はあ!？」

驚きを隠せないシャープ。

このまま戦い続ければ確実にジークフリートの勝ちだろうに。

「早く行け。私の気が変わらないうちにな。」

そう言うジークフリートに、シャープはとりあえず従うことにする。そして、タイガたちのもとへと急ぐ。

第27話 セルリア奪還戦13 知人同士の戦い (後書き)

ひょうりゅうけん  
氷龍剣

剣の刃に魔力で冷気を集中的に発生させた後、龍の形にし氷の龍を相手めがけて放つ技。

第28話　セルリア奪還戦14　2対50

一方、シャープたちの戦いが始まったときタイガたちのほうも戦いが始まるうとしていた。

相手は魔女の服装をした少女。

それプラス魔女の手下数十人。

「さーで、まずは小手調べだにゃーん　．．．．．みなのもの、かかれえ」

魔女ウィズが指示すると、手下たちは一斉に襲ってくる。

「ウィーッ！」

「ウィ　　ッ！！」

「ウィ　　ッ！！！！」

それが手下たちの気合（？）を出すための声だった。

「こんなザコども、おれ1人で十分だぜ。」

「みるからにバカそうだしなッ！！」

ラピスとティレクはそう言っていると数十人．．．．．50人ほどいる手下たちに突っ込んでいく。

5分後……

「我が人生に、悔い……あり。」

最後に倒された手下はそう言うと、バタリと倒れた。

ラピスとティレクの背後には、魔女の手下の山ができていた。

（（弱ッ！！））

そう思わずにはいられないタイガとミラージュ。

50人ほどいた魔女の手下は5分で片付けられたのである。

1分で10人ペースで……

「ありやあゝ。倒されちゃったかあゝ。」

がつくりと肩を落とすウイズ。

「て言うか弱すぎだぜ。こいつら。」

「数だけって感じたな。」

余裕余裕とばかり言つてのける2人。

そのままタイガたちのもとへと戻る。

「さあ、これでも戦うつもりかい？」

何もやってないタイガがウイズに聞く。

「……まあ、倒されちゃったものは仕方ないしね それに、

私がまさかあんなに弱いなんてこともないし。」

ウイズは得物を何も無い空間から現せた。

先端に丸い水晶を飾った杖である。

「キミたちにこの私が倒せるかなゝ」

タイガたちも得物を構える。

相手に退く気がないという意思がないことがこれではっきりとした。

はつきりした以上は正面から戦いを挑むまで。

タイガたちとウイズの戦いが始まる……

## 第29話　セルリア奪還戦15　魔女の恐怖

「ふっふっふ」

戦いが始まっているのに、余裕といった感じの微笑を口に浮かべているウイズ。

「いくぞッ!!」

そんなウイズに向かってタイガは地面を蹴る。

「無駄だにゃん」

ウイズは杖に魔力を込める。すると・・・

バチィッ

「ぐわッ!」

空が晴れているにもかかわらず、突然タイガに一筋の雷が落ちてきた。

「な・・・」

「にやはははは」私の力、思い知ったかね？」

ちなみに今ウイズがした魔術は『ライトニング』と呼ばれる魔術である。

魔術師の初歩の魔術のひとつである。

普通魔術は『詠唱』と呼ばれるものを唱えなければいけないのだが、この少女は無詠唱で『ライトニング』を発動させた。

「無詠唱で魔術を発動させるなんて・・・」

思わず声にしてしまうミラージュ。

初歩の魔術とはいえ、無詠唱で発動させるのを見たのはミラージュ自身、見たことがなかった。

「どう?すごいっしょ」。私は初歩の魔術くらいなら、無詠唱で発

動させることができるのだ。」

にやはは、と後で笑うウイズ。

だが、これでひとつはつきりしたことがわかった。

言葉遣いはふざけていて、なおかつ外見は少女だが、並の魔術師ではないことが。

「なら次はおれが相手だッ!!」

ライトニングの攻撃を受けて体がしびれてうまく動けないタイガに続いてラピスが短剣を持ってウイズに立ち向かう。

「キミはこれでどう?」

再び杖に魔力を込める。

すると、ウイズの周りに氷柱が発生し、ラピスめがけて発射される。

「なッ!!」

計5発。

3発までは持ち前の盗賊としての技量なのか、アクロバティックな動きでかわした。

だが4、5発目は左足と右脇腹をかすれる。

「くわッ。」

足をやられ、バタリとその場に倒れてしまうラピス。

先ほどの魔術は『コールドニードル』である。

「にやはははは、次は誰かね?」

「なら俺様が相手をしてやるよッ!!」

ティレクはそう言うと言いつつ槍に魔力を込める。

「真空衝撃波ッ!!」

ティレクは一度剣を鞘に収め、そして一気に鞘から剣を抜き衝撃波をウイズめがけて飛ばせた。

「なかなかなんだけどねえ。」

杖に魔力を込めると、ウイズに当たるかどうかというところで不可視の壁に当たり消えうせた。

「『シールド』だと!?!」

「何も攻撃するだけが能じゃないからね。」

そう言うと、ウイズはティレクめがけて雷を落とす。タイガと同じ『ライトニング』だった。

「つう！」

身体を電気が伝い、うまく動けなくなったティレクはその場で倒れる。

「次はあゝ．．．．．キミだけだね。」

ウイズはミラージュを捉える。

ミラージュはすでに戦闘体勢に入ってた。

「いくわよッ！！」

ミラージュは一気に踏み込んでウイズめがけて走り出す。

「．．．．．ふ。」

ウイズは口を緩めると、再び『シールド』を展開する。

「はああああああッ！！！！！！！！」

渾身のパンチッ！！！！

ガッキイイイイイイン

だが、ミラージュの渾身の一撃はウイズに届かなかった。

不可視の壁『シールド』を破るだけの威力が足りなかったのだ。

「女の子なのにすごいパンチだね。すごいけど．．．．．私にはかなわないみたいだね」

「く．．．．」

苦虫を噛み潰したような表情になるミラージュ。

「コールドニードルウゝ」

とつさに下がるミラージュ。

だが無情にもその攻撃はミラージュの身体を裂く。

両腕、右脚、頬、そして右脇腹に氷柱が直撃こそしなかったものかすれる。



「いつつう……。」

全身を襲う痛みにミラージユはその場に倒れこむ。

「にはははゝ やっぱり私って強いゝ」

自分で自分をほめるウィズ。

だが、この圧倒的強さ。ウィズの行動もわからなくもない。

4対1であるにもかかわらず、ウィズは4人とも地面にねじ伏せたのだ。

「にははッ 痛いのももう嫌でしょ？だから、とどめをさしてあげるヨ」

ウィズは目の前に倒れている一行に、そう言うのだった。

第29話〜セルリア奪還戦15 魔女の恐怖〜（後書き）

ライトニング

雷系初級魔術。

対象の敵に一筋の雷を落とす。

コールドニードル

氷系初級魔術。

自分の周りに計5本の氷柱を発生させ、相手に向かって飛ばす。

シールド

補助系初級魔術。

自分の周りに不可視の壁をつくり、敵の攻撃を防ぐ。

### 第30話　セルリア奪還戦16　奪還

魔女、ウィズはそう言うのとタイガたちとの間合いを少しとる。

そして、ウィズは杖を構えると足元に魔法陣を展開させる。呪文の詠唱をする気だ。

それもこの魔女の能力から見てかなり強烈な一撃を持つ。

「浄化の光よ。我が前に立ちはだかるものを聖の檻ひしりに閉じ込めよ。  
．．．．．シャイニング・プリズンツ！！」

ウィズが詠唱を終えると、タイガたちが倒れている場所に魔法陣が現れ、無数の光がその魔法陣の中に降ってくる。

「がああああああああ．．．．．！！！！！！！！」  
絶叫。それも断末魔にはるかに近い。

魔法陣の中に降ってくる無数の光はタイガたちの身体を中まで焼き尽くすほどの熱があつた。

その熱に身体を焼かれる痛烈な痛みをタイガたちを味わった。

「どう？私ってやつぱり強いでしょ？」

強いなんてレベルじゃなかった。

どう考えても現在のタイガたちは歯が立たない相手だった。

アリ数匹が象1頭と戦っている．．．そんな感じだった。実力差がありすぎる。

「ぐ．．．．．うう．．．」

かろうじてタイガはまだ意識があつた。

他の3人は先ほどの攻撃を受けて、死には何とかしていないようだが気絶している。

「でも、まだ意識あるんだねえ。体力は見かけによらずバリバリあるって感じ？」

そう言うウィズも見かけによらず恐ろしく強い。

「はあ．．．．．はあ．．．」

アリが一匹になっても象に立ち向かおうと立ち上がり得物を構える。

「へえ〜。おまけに立つちやったりもできるんだ〜。」

へえ〜、とばかりウイズは感心する。

「はあああああああああッッ！！！！」

タイガは走る。それも並の速さではなかった。

肉眼で追いきれるかどうかというくらいの速さ。

「うをー！！」

その速さに驚きを隠せないウイズ。

やばいと思ったのかシールドを身の回りに展開させる。

「爆裂突刃破ッ！！！！はくれつじんは」

ウイズ・・・のシールドに渾身の爆裂斬で攻撃する。

ピシ・・・

（にゃんとおー！！）

シールドにひびが入りやや冷や汗を流すウイズ。

そこに間髪入れずに突き攻撃を放つ。

パッキイイイン

ガラスが割れたような音がすると同時にウイズは突きの衝撃波で大きく吹き飛ばされる。

「ううわあああああああッッ！！！！！！」

そのまま『コメット・カリバー』に激突。衝撃波のせいで砂煙が発生。

「はあ・・・はあ・・・。」

肩で息をするタイガ。

体力がギリギリの状態でタイガの持つ技の中で高威力を持つ剣術を使ったので、そのせいであろう。

やがて、砂煙が晴れると

「いったあゝ。さつきのは効いたあゝ。」

ウイズが腰をさすりながらよれよれと立っていた。

パツと見た感じ外傷はほとんどない。

「そんな・・・。」

自分の手持ちの技の中で高威力の技を受けてもあの程度。

アリがアリ専用のバズーカ砲を撃ったところで象にはかすり傷程度のものなのか。

絶体絶命。そう思ったタイガ。

一方ウイズは『コメット・カリバー』を見てなにやら考えている様子。

そして・・・

「このまま叩きのめしてあげたいけど、こんなデカイの私1人で持ち運べないから今回は引き返すね。」

そんな一言を言うと、ウイズは突然その場から消える。

「『空間移動』か・・・。」

だが助かった。感謝すべきは『コメット・カリバー』の大きさと言ったものか。

おーいッ！タイガーッ！！

遠くで自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ってみるとシャープが走りながら手を振ってこちらに向かってきているところだった。

やがてタイガのところへ来る。

「はぁ・・・はぁ・・・まったく、こちらも大変だったんだねえ。」

「息を切らしながら言うシャープ。」

シャープの身体にはいくつもの傷跡があった。

「シャープこそ、あのジークなんとかって人に苦戦していたようだね。」

未だにジークフリートの名前を覚えていないタイガ。

「まあとにかく。通信で『ラグナエース』を呼ぶからちょっとまっ  
といてくれ。」

シャープは通信を『ラグナエース』に入れ、艦長と話し始めた。

（あ、そうだッ！）

タイガは思い出すとすぐさまセルリアの元へと駆け出す。

セルリアは『コメット・カリバー』の中にいた。

『コメット・カリバー』とセルリアと分けて運ぶのは面倒だったの  
だろうか。

幸い、セルリアに何にも外傷は無い。

「……ふう。よかったあ。」

無事を確認すると、タイガは安堵の息を吐いた。

第30話〜セルリア奪還戦16 奪還〜（後書き）

シャイニング・プリズン

詠唱文：浄化の光よ。我が前に立ち<sup>おっ</sup>はだかるものを聖の檻に閉じ込めよ。

説明：光系中級魔術。

対象の敵の足元に魔法陣が現れ、無数の光を魔法陣内に降らせる。

爆裂突刃破<sup>ばくれつじんぱ</sup>

最初爆裂斬で攻撃し、その後突きの衝撃波で大きく吹き飛ばす。

### 第31話　真夏のミステリー1

その後、セルリアを念のため医務室へと連れて行ったが特に異常はないらしいとのゴルドー。

セルリアはあれから数日がすでに経っているが、特に変わったこともないので「ああ大丈夫だ。」と誰もが思っていた。

それとタイガたちはジークフリートを雇った人物は魔術師ウィズだということを経長であるカイルに言った。

そのときウィズは一度戦って『空間移動』で逃げたことも同時に伝えた。カイルはその人のことを調べると言ってタイガたちの報告は終わった。

それはそうと、今回の話に入る。



開かずの扉。

学校の七不思議とかにもよくあるものである。

そして、この『ラグナエース』にも、そんな場所があった。

「・・・・・・。」

『ラグナエース』第4階層。そこにそれはあった。

そしてその前に現在タイガが立ち止まっている。

扉の前にはなぜか『開けてはいけません』ではなく『艦長ヴァカ』

と書かれた紙が貼られており、艦長にその部屋について聞いてみると・・・

「艦長。第4階層にある『艦長ヴァカ』って書かれている部屋はなんですか？」

「あの扉は開けてはいけないよ。あの扉を開けるなり警報装置が作動して謎の魔法陣が現れた後女装をした50歳サラリーマンの男性が現れ『何見てんのヨッ！』と言われた後自分も女装への道を歩まなければならなくなるぞ。」

と、むちゃくちゃなことを言ったので今は開ける気がしない。

それとむちゃくちゃ……というよりはおかしいことがもうひとつあった。

この艦内、広いことは広いのだが乗員がけっこう少ないので普段はガラ〜ンとしているのだが、なぜか食事……それもちょうど朝食、昼食、夕食のときだけやたらと多いのだ。

別に食堂が狭いわけではない。

タイガの知る限り、十分すぎるほど広い……はずだが、ある程度の時間がくると満員。それ以上。

これは、そんな疑問を感じるタイガ・ウナバラの勇気の体験談である。

### 第31話、真夏のミステリー1（後書き）

#### 空間移動

魔術師じゃなくても使える技。

空間に穴を開け、別の場所へ一瞬で移動できる。

例えるならドラ もんの通り抜けループみたいな感じである。  
相当な強者でないと使えない。

### 第32話 真夏のミステリー2

とりあえずお腹が減ったのでタイガは食堂に入る。

現在時刻は12:00。食堂はややがらくんとしていた。

乗組員はタイガの知っている限りこれをもう少し足したくらいだったので気にしない。

「お、タイガじゃねーか。」

「ん、ラピスか。なんだい？」

「おまえ腹減ったからここに来たんだろ？一緒に食べようかと思っ  
てな。」

「あ、うん。別にいいよ。」

「・・・ねえ。ラピス。」

「あ、なんだ？」

ここでタイガは、『ラグナエース』で暮らしていて気になっている  
ことをラピスに言った。

「ふーん。確かに妙だな。言われてみれば確かに食堂に来るやつら、  
やけに多いよな。」

ラピスは注文した蕎麦をすすりながら言った。

「でしょ。現に今だって・・・。」

タイガは周りを見渡すのでラピスもそれにつられて見渡す。

現在12:30。タイガたち食べている間に、いつの間にか食堂は  
人であふれかえっていた。

「・・・どこにこんなにいるんだよ。ホントに。」

「居そうな場所なら、心当たりがあるんだよ。」  
「え？」

「ここだよ。」

第4階層。『艦長ヴァカ』と書かれた紙が貼つてある扉の前へとラピスを招待する。

「・・・んで、なんでおめえはあけねんだ？」

「いやあ。艦長が言うには『あの扉を開けるなり警報装置が作動して謎の魔法陣が現れた後女装をした50歳サラリーマンの男性が現れ』『何見てんのヨッ!』』と言われた後自分も女装への道を歩まなければならなくなるぞ。』らしいから・・・。」

「意味わっかんねーけど、実際にそうなったら確かに嫌だな。」

「て言うかラピスは女でしょ？女装させられても別にいいんじゃないの？」

ドゴオッ

女性からくりだされたとは到底思えないほどの痛烈なパンチがタイ

ガの腹にヒット。

「バツカ野郎ッ！！おれは他のやつらがはいっているような『すかあと』とかそういうのは着ねえ主義なんだよッ！！」

確かに、この暴力的かつ雑かつこの男のようなしゃべり方……それに『スカート』なんざはかせた日にはそれこそ男性が女装しているように見えてもおかしくない。

幸い、このラピスにはそんな純粹かつピュア（意味がかぶってる気がするが）な乙女心というものは皆無と思える。

「だいたい、そういうおめえこそ容姿が女みてーじゃねーかよッ！！おめえこそ女装しやがれッ！！」

「な、僕は男だッ！！」

「男だから女装しろっていつてんだよッ！！『艦長ヴアカ』とやらがこの扉を開けるなり女装させられるって言うんならとつととおめえが開けやがれッ！！！！」

「僕は女装なんてしたくなあああああああッッ！！！！！！」

「おれだってガラじゃねえぜッ。」

結局、ラピスに開けさせようと少しばかり考えてたタイガの計算は大きく狂わされたのであった。

（こうなったら今日の夜、この扉を開けてやるッ！気になるし。女装させられるのはいやだけど死にはしない。……たぶん。）

### 第33話 真夏のミステリー3

23:00。

第4階層を目指して一人の青年が立ち上がった。

優男で女性のような顔立ちをした青年、その名もタイガ・ウナバラ。彼は、女装への道を歩むために、『艦長ヴァカ』の扉を開けようとしている――！

ドゴッ

・・・彼は、その扉の秘密を知るために、『艦長ヴァカ』の扉を開けようとしている――！

通路は節電のためか蛍光灯があまりついてなく、薄暗い。

真夜中の病院の通路のようである。

その通路をツカツカと歩むタイガ。寂しく通路にタイガの足音が響く。

そして第4階層に足を踏み入れようとしたそのとき、

「おい。」

「！！！！！！！！！！」

突然背後から声をかけられ、大きくビクウ、と身体を震え上らせる。

心臓バクンバクンの状態のまま後ろを振り返ると、

「よお。」

懐中電灯を自分の顔に照らしている女性が1人。

「・・・ラピスか。なに？」

「けつ。少しぐらい驚けよ。」

「背後から肩をたたかれたときのほうがよっぽど怖かったけど。」

そう言われるとラピスは自分の顔を懐中電灯で照らすのをやめる。

そして、タイガが驚かなかったのがよっぽどつまらなかったのか、  
「そういうおめえこそ、何してんだよ。」

やや突っ張って言うラピス。

「僕は第4階層の『艦長ヴァカ』の扉を開けようと思って。」

「お。女装する気になったか。」

「いや、ならないって。」

ツッコミ。

「まあ、実をいうとおれもその扉を開けようと思ってな。」

「ラピスこそ、ついにスカートでもはく気になったのかい？」

「なってねえよ。」

ツッコミの代わりに顔面パンチ。

「……とにかく、僕たちの考えてることは一緒か。」

「よし、だったら一緒にいこうぜ。どっちが女装させられても恨み  
つこなしという条件付きで。」

「いいよ。本当に恨みつこなしだからね。」

こうして2人が合流して、例の扉の前へと向かう。

（へへっ。女装させられそうになったらこいつを身代わりにおれは  
逃げてやるぜ。）

（ふふっ。ラピスには悪いけど、女装させられそうになったら身代  
わりにしてやるうっつと。）

2人の腹黒さ、ここに在り。

扉前。





真夏のミステリー。

### 第34話　ガスマスク

「何事だッ！」

「すごい悲鳴が聞こえましたけど・・・。」

タイガたちの元へと駆けつけてくるカイルとセルリア。

タイガたちはと言うと、衝撃的なものを目にして腰を落として口をパクパク。

「あれ？この部屋って開かずの扉じゃないですか。」

「あゝ。開けちゃったんだ。」

「開けちゃったんだ、じゃないですよ！艦長、これはなんなんですか？」

ようやく言葉にするタイガ。

部屋には全身黒タイツに黒マスクをかぶった人々。まるで戦隊モノの番組でよくワラワラ出てくるザコ敵のような人々が全員同じポーズのままこちらを向いているのである。

「なにがあるんです・・・か。」

部屋の中を覗き込むセルリア。

「・・・・・・・・・・。」

ボタン

「うわッ！セルリアが倒れたあ！！！」

セルリアにとってよほど衝撃的だったのであろう。

ものの数秒で現実から目をそらすために自ら気絶した。

「おいおい艦長さんよおッ！そんなことよりこれはホントになんなんだー！！」

ラピスもようやく言葉を出す。

「おいおい！どうしたんだい、みんな。」

「まったく、目が覚めちゃったじゃない。」

のちにシャープとミラージユもタイガたちの元へやってくる。

「って、なんでセルリアは気絶してんの？」

タイガの腕の中で倒れているセルリアを指差して言うミラージユ。

「セルリアってこんな役ばっかだねえ。．．．．．ところで、開かずの扉が開いてるじゃないか。アタシにも見せてもらっようよ。」

「あッ！！シャープ！！！」

止めようとするタイガ。だが時すでに遅し。

「．．．．．」

黙。

その後、停止。

「どうしたんですか、シャープさん。」

ミラージユも中を覗き込む。タイガとラピスはもう何も言わない。

ボタン

覗いてコンマ1秒で倒れるミラージユ。

残念なことにタイガはセルリアを抱えているので受け止めるものがおらず、そのまま後頭部を床に激突。

「．．．．．あ、艦長。」

タイツ人間の1人がカイルに話しかける。

抑揚がなく、ほぼ棒読み。

「艦長！これで3回目ですけど本当にこの人たちはなんなんですか？」

「んゝ。．．．．．簡単に言えば、戦闘員だね。この船が危なくなったら出勤するんだけど。」

「危なくなったらって、じゃあ前のスライムが侵入してきたときと

か、ラピスが盗賊で侵入してきたときはどうしてでてこなかったんですか？」

「スト中だから、俺たち。」

タイツ人間がタイガの疑問に答える。

ストライキ・・・。

「それで艦長。俺たちの望み、聞き入れてくれるんですか？」

抑揚がなく、かつ棒読みでカイルに問うタイツ人間。先ほどから同じタイツ人間がしゃべっているのだが、リーダーなのだろうか。

「望みつて、何なんですか？」

「いや。この戦闘員の人たちが『ガスマスクがほしい。』って言うって聞かないんだ。」

ガスマスク！？

「ガスマスクは俺たち戦闘員のロマンです。ガスマスクあってこそ戦闘員は初めて戦闘員を名乗れるのです。タイツにガスマスク。これぞ戦闘員のロマン。」

（って、それだけのためにこいつらストライキしてんのかよ!!）

ばかばかしい理由にラピスは心の中でツッコむ。

「ガスマスクはダメだって言ってるじゃないか。」

「ガスマスクはロマン。」

「ガスマスク最高。」  
「」

「ガスマスクGreat。」

ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
 ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
 ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
 ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
 ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
 ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！

ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！  
ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！ガスマスク！

ガスマスクコールが『艦長ヴァカ』の部屋の中で響き渡る。

「……………」

無言で扉を閉めるカイル。

中で無情に響くガスマスクコール。

「……………さて、寝よう。」

「あの、艦長。」

「寝よう。」

「……………はい。」

有無を言わさないカイルにタイガたちは従うことにしたのだった。

### 第35話　次の目的地

「ふああ。よく寝たあ。」

ベッドから起き上がるタイガ。

それにしても昨日のアレはすごかった。

部屋にみっちりとかつ、ズラ〜と同じポーズで並んでいる戦闘員。あれがクローン人間のなれの果てかと思えるくらいだった。クローンじゃなかったけど。

タイガはまず、朝食を食べるために食堂へ行き、朝食を食べる。そしてその後ブリッジへと入る。

「おはようございます、艦長。」

「ああ、おはよう。タイガ。」

背を向けていたので振り返ってあいさつをするカイル。

「それで艦長。どうしますか？」

オペレーターの1人がカイルに何かを問う。

「うーん。そうだなあ。」

「……何かあったんですか？」

「まあね。」

やや深刻そうな顔をするカイル。

「実は、『ラグナエース』の燃料が切れかけててね。」

「燃料だけじゃなくて、艦内の物資もですよ。食料とか、水、医療道具……その他もろもろ。」

オペレーターも揃って深刻そう。

だが確かに、燃料が切れたら漂流状態になってしまう。そこに敵がやってきたら……。

（……あれ？）

ここでタイガは1つ疑問を抱く。

なぜ艦長たちはこんな母艦を引き連れて旅をしているのだろうと。

「艦長、質問があるんですけど。」

「ん？なんだい？」

「艦長は何をするためにこの母艦で旅をしてるんですか？」

「あゝ……………時期が来たら話すよ。」

結果的に答えになってなかった。

よほど他人に言えないことなんだろうか。

「艦長。どうします？」

「え、ああ。近くの惑星で補給をするしかないね。この辺りで一番近い惑星は？」

「えゝと……………惑星『スレイミア』ですね。」

惑星スレイミア……………タイガとティレクがかつて行こうとしていた惑星だ。

「よし。じゃあそこで補給をしよう。目的地を惑星『スレイミア』にセット。」

「了解。」

オペレーターの様子を見てから、タイガへと振り返る。

「まあ。何度も言うようだけど気にするなよ、タイガ。」

「え？」

「少しばかりつらい顔してたぞ。」

この人はすごい。

タイガの心情を振り返った瞬間、いや振り返る前からわかっているようだった。

タイガ自身も、もうあのことは気にしないでいるつもりだったのだが、カイルの前では通用しなかった。

「……………大丈夫です。もう。」

「そうか。なら、君はもうみんなのところへ行ったらどうだい？ ちようどこに来るとき、ピロティ辺りで見かけたけど。」

「はい。そうします。」

過ぎたことをいつまでも後悔してられない。

せめて今自分にできることは、もう2度とあんな悲劇を起こさないように行動することじゃないのか。



そう思いながら、タイガはブリッジを後にした。

### 第36話　ちよつとした会話

「ていうかおめえらの仕事楽すぎねえか？仕事るとき以外はこうやっておしゃべりとかよ。」

「まあねえ。言われてみれば確かにね。でも楽しいことはいいことサ。」

（あ、本当にいた。）

ピロティにはティレクを除く全員がお菓子をつまみながら会話をしていた。

「あ、ウナバラさん！よかつたらこっちに来ませんか？」

セルリアがタイガがいることに気づくと、他のメンバーもタイガを見る。

「そうよ。レディの誘いにのらないなんて失礼よ、タイガ。」

「いや、まだ断ってもないんだけど。」

ミラージュにツッコむ。

「それで、アタシたちの誘いにはのるのかい？」

「まあね。暇だからのらせてもらおうかな。」

タイガは、手ごろな空いている席に座ると机の上に並べられているお菓子をひとつ食べる。

「それでは私、ウナバラさんの紅茶を入れてきますね。」

「うん、ありがとう。」

タイガにそう言われるとセルリアはスマイル0円をしてから紅茶を入れに一時その場から離れた。

そして、完全にセルリアの姿がピロティから見えなくなる。

「……なあ、タイガ。」

「なに？シャープ。」

シャープは紅茶を一服すると、

「単刀直入に言うけどサ。」

「・・・・・・・・うん。」

タイガはお菓子をひとつまみいただく。そしてそのまま食べる。  
「セルリアのことどう思ってるんだい？」

ブ

！！！！！！ゴホガへ・・・

「ちょッ！汚いわよ、タイガッ！！」

ミラージユ一喝。

タイガはそのままなぜかむせこむ。

「な、なんでいきなりそんなことを！？」

「いやあゝ。セルリアってさあ、タイガのことずっと『ウナバラさん』だろ？タイガとしてはどう思ってるのかなあゝてサ。」

「べ、別に。どうにも思ってたませんけど。」

「それはそれでどうかと思うぜ、おれ。」

「たしかにね。」

「だって、実際そうなんだからしょうがないでしょ！」

「ふゝん。あつそ。」

シャープはやや意地悪っぽく口元をゆがませる。

「それじゃそのこと、セルリアに報告してもいいんだねえ？」

「あ、いや……。それは困るッ！！というか……。」「

徐々にしどろもどろになるタイガ。

それをみてなぜか満足そうなシャープ。

「ま、それは止めといてやるさ。いい反応見れたしね。」

「ひ、ひどッ！！まさか初めっからからかうつもりだったんですかあ！？」「

「ご名答ゝ」

そんな会話が終わったとき、ちょうどセルリアがタイガの分の紅茶とお菓子を持って来た。

「おッ！セルリア、おしかつたねえ。」

「え、何がですかシャープさん。」

「いやあ。ついさっきまでタイガがね」

「わああああああ！！ストツプウウウウウツツ！！！！！！  
プライバシー侵害だああああ！！！！！！」

ピロティ中に響くタイガの声。

いやあ、実に平和である。

### 第37話　スレイミア

（ふう、なんとか話をそらすことができたあ。）

心の中でほっとひと息なタイガ。

さきほどまでの【タイガはセルリアのことをどう思ってるのか？】

という話をタイガの華麗な話術……ではなく超強引な会話のそらし方によりなんとかセーフだった。

ちなみに現在のテーマは【戦闘員】である。

「いやあ、すごかったよな、アレは。」

「アレってなんですか？」

ラピスに聞き返すセルリア。

一度誘拐された身だったけど、もう大丈夫らしい。

「アレって言えばアレだよ。昨日の夜中の第4階層の『開かずの扉』」

。

「『開かずの扉』がどうかしたんですか？」

……どうやらあまりのショックで記憶が消去されているようである。

だが、そのショックな出来事を強引に思い出させるのはかわいそすぎるとセルリアを除く一行が思ったのか、『戦闘員』の話題は黙認で終了となった。

「あ、そうそう！次の目的地が決まったらしいよ。」

【タイガはセルリアのことをどう思ってるのか？】という話題に変えられないように即座に次の話題に切り替えた。

「へえ。で、どこなのよ。」

「惑星『スレイミア』だって。艦長が言うには物資の補給と燃料補給のために行くらしいよ。」

「物資の補給かあ。言われてみれば確かに、最近食堂で出されるおかずが少しばかり少なくなってたような……。」

「そうなの？僕は気づかなかったけど。」

「ほら、ミラージュはねえ、ああ見えて大食漢なんだよ。」

「シャープさん。何か言いました？」

「いんや。べつにいゝ」

ミラージュの目がキラッと光ったのでシャープはそれ以上言わなかった。

続いてタイガにその目が向けられたが、タイガも目で「いや、何も聞いてないって！本当だって！！信じてよ！！ミラージュが大食漢だったなんて話聞いてないからッ！！」と訴える。

「タイガ。後でトレーニングルームまでいらっしやい。」

につこり笑顔・・・そしてこめかみには血管が浮き出て・・・

「・・・」

「返事は？」

異様なミラージュの迫力に、タイガは首を縦にぶんぶん振る。それはもう首が取れるんじゃないかってほど。

そのあと、よろしいとばかりに満足げな表情になるミラージュ。

「そ、それより『スレイミア』って、ラピスさんのラストネームと同じですね。」

「・・・！！」

セルリアの言葉にピクリと眉を動かすラピス。

「あ！そう言えばそうだね。」

「ぐ、偶然だろ。」

「実は王女・・・とか？」

「だから偶然だろ！そんな惑星『スレイミア』となんて、おれは縁もゆかりも無い！！断じてッ！！」

力説で否定しまくるラピス。傍から見れば怪しさ100%である。

「ほんとかねえゝ」

疑り深い目でラピスを見るシャープ。

「ほんとだっつーのッ！しつつけぞー！！」

「そうやって思い切り否定しまくるから怪しいんだって。」

「・・・！！」

タイガに言われ、黙るラピス。

「でも、久しぶりにこの船から外に出られるってわけよね。」

「え？……うん。たぶんね。」

出られるかどうかはまだわからないが、あの艦長の性格からしてそうなる確率が高いだろう。

「やったあッ！それじゃあたし、ブランド品買いまくるわよ！」

「だったらアタシも、久しぶりに武器でも買いあさってみようかねえ。」

「み、みなさん。まだおりれるって決まったわけじゃないですよ。」

「なぐに、言ってるのセルリア。あのカイルの性格から考えるとほぼ100%おりられるわよ。」

「……あれ？気づいたんだけど、ティレクはどこ？」

ここまで会話してようやくティレクがいないことに気づくタイガ。

「ああ、アイツなら格納庫じゃないのかい？スピルと色々話したいって言ってたし。」

スピルか……。そういえば一度会ったきり会ってないなあ。

「それじゃあ僕も格納庫へ行くよ。ぼくもスピルと話したいし。」

「ああ。行つといで。」

### 第38話　襲撃任務

「・・・てな感じで『スペース・フォース』を盗むのを失敗しましたあ　ははは・・・。」

と、反省をしているつばさゼロの口調で魔女ウィズは報告を済ませる。

「まあいいよ。タイガ・ウナバラをおびき出すための餌だったんだからね。」

と、銀色の髪をした少女が言った。

惑星『カムラン』。あたり一面が砂で覆われ、水一滴すらない死の惑星。

また、かつての人間たちの母星でもある。

母星を捨て、別の惑星に移住するようになった人間たちにとって、

この『カムラン』ははつきり言って用済みだった。

その『カムラン』にひとつの大きな塔が建てられており、そこに彼らはいた。

「餌にしても、随分とでかい餌でしたけどね。」

「まあね、セシル。でも、残念ながら記憶は戻ってないようなんだ。」

「だったら、もっとドでかい衝撃を与えたらどうです？」

紫色の髪をし、背中に槍を背負っている青年セシルが銀色の髪の少女にそう言つと、

「そうだねえ。・・・ジン、現在タイガ・ウナバラが向かってるさきはどこ？」

「『スレイミア』だ。」

淡々とした口調でそう述べる黒髪の青年ジン。彼の両手にはガントレットが装備されていた。どうやら格闘術士のようだ。

「『スレイミア』かあ。そう言えばこの前撃墜した船も、『スレイミア』行きの船だったね。」



「はい。そうです。」  
と、セシル。

「よし。今度は『スレイミア』に着陸したときに攻撃でも仕掛けようか。今度は前よりでかいのをね。」

「ルシアちゃん、私行きた〜い」

小学1年生みたいに、はいはいは〜いとばかりに手を上げるウイズ。  
「いや。ウイズは今回はお休みだ。」

「ぶー。」

「オーガナイト、セシル。」

銀色の髪少女が名前を呼ぶ。

「はい。」

「俺たちの出番か、ルシアさんよおおおおおッッ!!!」  
「!!!」

「オーガナイト。少し黙りなよ。……それでルシア様。ぼくたちにその任務を？」

「うん。まかせるよ。タイガ・ウナバラだけは殺さないでよ。シヨツクが足りなかったらタイガ・ウナバラの仲間を殺してもかまわないよ。」

「はッ!」

セシルと全員鎧で身体を装備された男オーガナイトはそう言つと『空間移動』で姿を消した。

魔女ウイズ。

人斬りセシル。

豪腕のオーガナイト。

疾風のジン。

それら4人の上にたつ者の名を、彼らはルシアと言った。

550年前、『崩壊戦争』の英雄と謳われた者の名前と同じ。

### 第38話〈襲撃任務〉（後書き）

セシル・レイス

年齢 20

性別 男

職業 槍使い

一人称 ぼく

とある機関の最高幹部の1人。

紫色の髪をした青年で、槍使い。

通称「人斬りセシル」。

オーガナイト

年齢 30

性別 男

職業 大剣使い

一人称 俺

とある機関の最高幹部の1人。

全身鎧で装備をしている。身の丈は2.5メートル。

通称「豪腕のオーガナイト」。

紅 ジン（くれない じん）

年齢 17

性別 男

職業 格闘術士

一人称 オレ

ウィズ、セシル、オーガナイトと同じ機関の最高幹部の1人。

冷静沈着で、淡々とした口調で物事を言う黒髪の青年。

通称「疾風のジン」。

ルシア

年齢 15

性別 女

職業 ????

一人称 ボク

ウィズたちを従えている銀色の髪の少女。

タイガを狙っているようだが、現在その目的は不明。

第39話（脳味噌筋肉野蛮）怪力女・・・

ここは格納庫。

そこでは現在、『スペース・フォース』のメンテナンスが行われているところだった。

「お、タイガじゃないのよ。」

タイガを呼ぶ声。そこにはティレクとスピルがいた。

ちょうど、他の整備員たちの邪魔にならないような場所に。

「やあ。ティレクにスピル。」

歩み寄って話すタイガ。

「全く、いつ来てくれるのかと思ってたぜ。同じ船の中にいるのになかなか顔ださねーもんなあ。」

「いやあ、それは仕方ないよスピル。だって、ここのところ盗賊侵入してくるわ、セルリア誘拐されるわで会える時間が無かったからね。」

「ははは・・・。たしかに言われてみりゃあそうだよな。」

「ところでタイガ。さっきまでどこ行ってたのよ？」

と、ティレク。

「え？ああ、さっきまでみんなのところだね。」

「みんな？・・・あゝ。シャープお姉さまとセルリアちゃんとラピスと・・・あの怪力女のところか。」

「ティレク。セルリアはギリギリOK、ラピスは普通と考えて・・・なに？その呼び方。」

シャープお姉さまに・・・怪力女。

怪力女は、消去法で考えてミラージュのことであろう。

「いやあゝ。だってよおシャープって姉貴って感じじゃねーか。そんなに怪力女はそのまんま。本当は脳味噌筋肉野蛮怪力女だったんだが、おまけにおまけして怪力女になったんだよ。あえて言うなら（脳味噌筋肉野蛮）怪力女だな。」

（ ）をつけたただけだが。

「……………いまのをミラージュに言ったらどうなるだろうね、スビル。」

「あの姉さんのことだ。ティレクをそれはもう……………例えばうがないくらいにボコボコに。」

「してあげるわ。」

男たちの会話の中に突然乱入してきたミラージュ。

「ミミミミミミミラージュッ!? いつの間にいるのさ!-!」

驚くタイガ。そりゃそうだろう。

「まああんたに用があつてね。……………それより、色魔男。さっきまでのあたしの呼び名、ばつちしと聞かせてもらったわよ。」

視線をティレクに向けるミラージュ。

それも殺気立つ。

「え? あ……………空耳でしょーよ、ミラージュ様。」

冷や汗を滝のように流すティレク。どうやら本人の前では言ったことがなく、陰口で言ってるに過ぎないようだ。

「というか「様」って……………」

「さて。楽しいショータイムを始めましょうか、ティレク。タイトルを付けるなら『ブラッド・バーティ-』を。」

それを聞いてどんどん顔を青ざめていくティレク。それから震えだすティレク。

だがそんなことはおかまいなしに、震える子猫の首根っこをつかむようにティレクを引きずっていくミラージュ。

そしてそのまま格納庫から姿を消していった。

「……………じゃあスビル。この辺で失礼するよ。」

「あ、ああ。暇があったらティレクの様子を見てやってくれよ、タイガ。」

「うん、そうするよ。」

タイガはそう言つと格納庫から出て行った。

そう言えば、ミラージュの用件ってなんだったのだろう？





・・・・ニャ〜。

(ニャ〜!?)

他の音はわかるとして、『ニャ〜』はなんなのだろうか？

中をのぞきたい気もするが下手をすると自分が自分でなくなるような気がして仕方がないタイガ。

謎の物音(?)を気にしつつ、トレーニングルームの扉前から去ることにした。

「かんちよ〜。」

「お、タイガか。」

シャープは剣術の修行。セルリアは倉庫の当番。ラピスは自分の得物の手入れ。スピルは『スペース・フォース』のメンテナンス。ゴルドーはさまざまな医療器具の点検をしており、ティレクとミラージユは……現在大変な状況。

結果的に行き着いた場所がブリッジ。

ちなみに、カイルが艦長なのに一番暇そうだからここに来たというのはふせている。

「ちょうどよかった。あと10分ほどで惑星『スレイミア』につくよ。」

「へえ。そうなんですか。」

「……ところで、みんなはどうしてるか知ってるかい？」

「えっと……。」

かくかくしかじか……。

「ふん。他はともかくティレクはたいへんだねえ。」

それだけで済まされるのか。

「それじゃあ僕はちよつとミラージユに用がありますので……。」

「うん。せいぜいティレクの二の舞にならないように。」

たぶんならない。

きつと……たぶん……願わくば……。

第40話、ミラージュさん、性格変わってますよ。(後書き)

スレイミア

惑星の名前。

5：5の比で陸と水があり、陸の70%が草原。

気温は1年を通して最低10度前後、最高25度前後といった感じ。  
経済的にも豊かで、貧富の差がほとんどない。

貧しいものには、この惑星を統治している王様がじきじきに手を差し伸べているので、民間人から絶大な支持を集めている。

## 第41話　サンドバック

再びトレーニングルーム前。

先ほどの騒がしさがうそのように静まり返っていた。

「……終わったのだろうか。」

終わったって何が？と聞かれるとそれはもう……ミラージュのサディスティックモード（タイガ命名）とか、ティレクの命とか……その他もろもろ。

「し、しつれゝしまあゝす。」

おそろおそろ扉を開けると、

「あら、タイガじゃない。どうしたの？」

と、運動に適した服装に着替えたミラージュが、トレーニングルームの中心にぶら下がっているサンドバックをボコボコと殴っていた。

「え、あゝいや。じつは……」

と言いながら部屋を見渡すと、ちょうど部屋の端っこにやや黒ずんだ赤い液体が付着した服が無造作に置かれていた。

「……あれ？」

そのいわくありげな服を指差すタイガ。

「ああ。あれね……。……トマトジュースがこぼれたのよ。」

そのトマトジュースが入っていたと思われる容器がないんですけど。再び部屋を見渡すと、いわくありげなミラージュ曰く、『トマトジュースがかかった服』のちょうど逆の隅っこにサンドバックが置かれていた。

「……あれ？」

サンドバックって、真ん中にぶら下がつて……

「のうわああッ！……！」

突然大声を出すタイガにびくつとするミラージュ。

「ど、どうしたのよ。急に大声なんか出しちゃって。」

「あああああああああれ．．．」

口をパクパクさせながらぶら下がっているサンドバックを指差すタ  
イガ。

サンドバックの中には本来砂かその類が入っているものなのだが．  
．．．なぜか人の形が。

「ああ、あれね。人型サンドバックよ。」

ミラージュが言ってる矢先から人型サンドバック（ミラージュ曰く）  
はもそもぞと動いていた。

「あ。サンドバックって、動かないよね？」

「．．．．．電動式なのよ。」

「おい。」

サンドバックの中から弱々しい声が．．．．．

「サンドバックって、しゃべらないよね？」

「．．．．．音声付きなのよ。殴ると．．．。」

ドゴオッ

「げふうッ！！」

「．．．．．て感じでしゃべるのよ。」

「いやだつてさっき、殴る前からしゃべって．．．。」

「あたしが腹話術でしゃべってたのよ。」

「今さっきの状況で腹話術をやる必要性って、ないよね？」

「人は時々やるものなのよ。」

「．．．．．さっき殴ったサンドバックが赤く変色してるんだけど。  
とくに．．．．．人で例えるなら口の部分。」

「トマトジュースがこのサンドバックには入っているのよ。」

「．．．．．微妙に鉄くさいけど。僕の知る限りこの匂いは生き物  
とか斬ったときに出てくる液体に．．．。」

「……品種改良してつくられた血味のトマトで作られたトマトジュースだからよ。」

「……。」

ここまで言い訳が出来るなんて……。

ネタはすでにわかっているタイガだが、下手に切り出すと同じ目にあう可能性大。  
そんなところに。

ピンポーン

「まもなく、惑星『スレイミア』に到着します。まもなく……。」

と、放送が流される。

「もう着くのねえ。それじゃあ、あたしはちょっと自分の部屋に戻るわね。」

そう言つとミラージュは逃げるようにトレーニングルームから出て行った。

「……。」

気になってサンドバックの中を調べてみると、虫の息のテレクが中からによりと出てくるのだった。

#### 第41話〱サンドバック〱（後書き）

サディスティックモード

タイガ命名。

ミラージュがティレクをボコボコに殴っているとき性格が変わっているときのことを言う。

トマトジュースがかかった服

ミラージュ曰く。

だがほぼ100%血である。

サディスティックモードでティレクをタコ殴りにしてたときに付着したものと思われる。

## 第42話　スレイミア到着、そして災難

「ウイズ。」

「はいはい　なになにルシア様。」

銀色の髪の少女ルシアに呼ばれ、返事をしながら傍へ寄ってくるウイズ。

「キミにちょっと頼みがあるんだけど。」

「なんですか？」

ルシアは耳を近づけるようにと手で合図をする。

そして小声でその頼みを伝えた。

「りよゝかいりよゝかい　もゝまっかせちゃってくださいルシア様」

そう言うときウイズは『空間移動』でその場から姿を消した。

「さあて。どう出るかな、元英雄さんは。」

呟くように言うときルシアは砂塵が吹き荒れる外の景色をなんとなく見るのだった。



一方タイガたちは現在、惑星『スレイミア』に着陸していた。  
『スレイミア』の首都『グリーンヴェル』。そこにタイガたちはい  
た。

建物はレンガでできたものが多く、ちょうど東西南北に首都の出入  
り口がある。

その出入り口からそのまま直進していけば王様が住んでいる城へ直  
行できるように道路が整備されていた。

「いやあ。この大地に立つ感覚、ひさしぶりだねえ。」

『スレイミア』の大地に足を踏み入れたシャープの第一声。

今まで『ラグナエース』の中にいたので生の大地の感覚が久しぶり  
に味わえてうれしいだろう。

「まあね。それより早いとこ王様と面会に行こうよ。」

「全く、カイルのやつ。こんなときに限って仕事があるんだから。」

こういう仕事こそ艦長のカイルがやるべきでしょッ。」

やや不満＆怒り気味のミラージュ。

「アンタが言うな。だいたいアンタのせいなんだから。ティレクを  
虫の息まで叩きのめしたせいでアタシたちが代わりに面会する羽目  
になったんだからね。」

なるほど。要するにサンドバックから救出されたティレクは着陸と  
同時に病院送り。

その連れとしてカイルが行ったというわけか。

「まあとにかく。早いとこ終わらせればいいだけのことだって。じ

ゃあ、行こうか。」

「いかねえ。」

そう言ったのはラピスだった。

「な、なんで？」

タイガが尋ねるが、

「行きたくねえんだよ。」

「いや。その理由を聞いてるんだけど。」

「だから行きたくねえから行かねえんだよッ！」

怒りながら辺りを先程からきよるきよる見渡しているラピス。  
はたからみればそれは……

「ラピス。何あんた変な行動とつてんのよ。」

ずばりミラージュに言われる。

「え？あ……いやその……。」

とそんなとき。

「見つけたぞッ！！」

「やばッ。やつぱきやがったッ！！」

ラピスが言ったときには時すでに遅し。城の兵士であろう人たちに  
囲まれる。タイガたちも。

「え、ええ！？なに、何なのさ？僕たち何か悪いことしたっけ？心  
当たりがあるとすれば『ラグナエース』のコンビに売っていたア  
イスの当たり棒を偽造したくらいだけど。」

「ってアンタ真面目人のくせにそんなことしてたのかよッ！！」

ちなみにそのあとそのバチが当たったのか、タイガが腹痛になった  
と言うことはトップシークレットである。口が裂けても言えない。

読者の皆さんには言ってしまったが……。

「抵抗はしても無駄ですよ。王女様。」

この兵士たちを率いている隊長であろうその人がラピスに言う。

「この者たちはどうします？」

「一緒に連れて行くぞ。王女様を連れまわしていた曲者だ。」

「わかりました。」

数十秒思考が停止したラピスを除くタイガたち。

そして次の言葉を叫ぶ。

「……王女様ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああ  
……」

第42話、スレイミア到着、そして災難（後書き）

【グリーンヴェル】

惑星『スレイミア』の首都。

### 第43話 ミラージュ大活躍？

ガチャン

「ちょっと！！なんであたしたちが捕まらなきゃなんないのよッ！！」

「ここは城の地下。」

じめじめと湿気があり、おまけに蒸し暑い。

そんな地下にある牢屋にタイガたちは放り込まれていた。

「だまれッ！！王女様を連れまわしていた曲者どもがッ！！」  
見張りからそう怒鳴られる。

「王女つて、やっぱりあのラピスのことですか？」

いまだに信じられないタイガが見張りに質問してみると、

「そうだ。あのお方こそ惑星『スレイミア』の王女、ラピス・スレイミア様だ。」

「でもアンタたちのいうその王女様とやらは、この惑星を出てから盗賊まがいのことをしてたんだけどねえ。」

「だまれッ！！王女様がそんな下賤なまねをするわけないだろッ！！」

「実際にしてたのよッ！！どこまで頭固いのかしらこのデカブツッ！！」

「だまれッ！！見るからに暴力そうな女がッ！！」

プッチイーン……

なにか切れてはいけないものが切れたような音。

「暴力」、「怪力」、「バカ」、「阿呆」、「クソ」、「脳味噌筋肉」などの言葉をミラージュに言うとか手を破滅へと導くのだ。

その中で「暴力」、「怪力」、「脳味噌筋肉」の3つはその確率が最も高い。

「ふっふっふ……。」

突然含み笑いをしだすミラージュ。

「最近死に急ぎたがる若者が増えてホント困るわねえ。」

「お、おいミラージュ。さすがに今の状況じゃまずいって。」

シャーブが言うが、ミラージュは聞いてもないようだ。

ふらふらと鉄格子をつかむミラージュ。

「ふん。所詮牢に入れられたネズミどもがこの見張りである俺に何ができるというのだ。」

「……。」

グニ……。

そんな音と共に、鉄格子がぐにやりと左右に曲げられ、人一人通るには十分すぎる隙間ができた。

「な。なんて怪力だ。」

怪力……。

その言葉に眉をピクリとさせるミラージュ。

破滅の言葉を2つも言うとは、よほど死にたいようだ……。

ポキポキ……ゴキッ

見張りに近づきながら手を鳴らし始めるミラージュ。最後やけに重い音が聞こえたが気にしない。

「お、おいッ！！おまえたち2人ッ！！この女をどうにかしろッ！！！」

見張りが叫ぶが、タイガとシャープは座禅を組んで手を合わせていた。

ご愁傷様……という意味を込めて。

ガシッと見張りの胸倉を左手でつかみ、右手で見張りの顔を往復ビンタ。

事務的かつ機械的に、それでいて無表情のままビシバシビシバシとビンタをする姿はいろんな意味で怖い。

それも目にもとまらぬ速さ！1秒につき往復5回のペースで。

「ぎよああああああああああ……！！！！！！！！！！」

暑苦しい牢屋に、見張り兵の叫び声が無情に響く。

#### 第44話 城を出る王女

地下でそんなことが起きているとも知らず、現在ラピスは王様と応接間で面会をしていた。

「さてラピス。聞かせてもらおうか。この城を去ったわけを。」

「なんでクソ親父にいわなきゃなんねえんだよ。」

眼を付けながら王様……実の父親に言うラピス。

「それでは、何が気に食わないのか。話してくれぬか。」

「何が気に食わないか気づいてもいねえやつに、なんでそんなことを言わなきゃなんねえんだよ。」

「でも言わなければ、何も事が進まないと思うがな。」

「それで結構だ。クソ親父に話すことなんざなんにもねえ。」

堂々巡り。

先程からこの会話の繰り返しである。

そんなところへ、1人の兵士が割り込んできた。

「王様ッ！！」

「なんだ？」

「牢に閉じ込めておいた者が暴れて今こちらに……。」

ドゴオッ

応接間の扉を蹴破って入ってきたのはミラージュ。それにタイガとシャープ。

「な！？今は面会中だぞッ！！」

応接間にいた兵士たちがタイガたちを囲んだ。

「やめろッ！！そいつらはおれの連れだぞッ！！」

「ラピス。おまえが何も言わなければ、この者たちに少しばかり痛

「目を見てもらうぞ。」

「そんなのただの脅しだろッ!!」

「他の惑星の者など、どう扱おうとわしの勝手だ。」

口で言わぬなら力づくでと言う事だろうか。

「だったら何が気に入くわねえのかを教えてやるよッ!!おめえのその自分の惑星の住民だけを助ける精神が気に入くわねえんだよッ!!」

「王が自分の場所を守るのは当然のことではないか。」

「だからもつと大局を見渡してだなあ……。」

「他の惑星の者などどうなるうとかまわん。わしは自分の惑星だけを守ればいいのだ。」

「……!!」

怒りを全面的に出すラピス。

そして……。

「わかったッ!!だったらおめえの好きにすりゃあいだろッ!!おれはこんな場所とはにかく嫌なんだよッ!!」

そう言うラピスは入り口は兵士でふさがっていたので窓から飛び降りる。

「……ってラピス!!ここは3階だつてッ!!」

囲んでいる兵士たちを退けて窓の下を見ると、城の外へと走っていくラピスの姿があった。

「タイガッ!!追うよッ!!」

「わかった!」

そういうタイガたちも窓から飛び降りて、ラピスの後を追うのであった。



第45話 そのころの病院、迫る脅威

一方こちらは病院。

「うゝ・・・あゝ・・・オレンジの化物があああゝ・・・」

ベッドでうなされているティレク。

その傍にはカイルとゴールドー。

「オレンジって、果物のことでしょうか？」

「いや。オレは違うと思うなあ。」

大体想像がつく。……というか、タイガに教えてもらったの  
で知っている。

オレンジ色の髪少女M（仮名）にやられたのだ。

少女M（仮名）はティレクをボコボコにして気絶させた後、サンドバックの中に砂の代わりとして入れ、再び殴り続けていたらしい。

「ああッ！！消火器ッ！！消火器いいいいいいいいッ！！！！！！！！」

ぎゃあ ああ ああ ああ ツッ!!!! やめてくれッ!!! オ

レンジイイイイイ

ツ  
ツ  
ツ  
!  
!  
!  
!  
!

カイルはだいたいわかっているのだが、ほんとに付き添いのみでやって来たゴールドにとっては何を言ってるのかさっぱり。

「ランディ・ジョンソンがあああああ！！！！！」

消火器でも投げられたのだろうか。とある投手の名前を叫ぶティレク。

復活には、時間がかかりそうだ。

「やつほーッ！！ジークくん、元気してた〜？」

「…………おまえは。」

とある洞窟。

そこに「冷氷のジーク」と、「魔女ウィズ」がいた。

「何用だ？」

「いやあ〜。実はもう一度私たちに力を貸してくれないかなあ〜、なんて思ってたね。」

「…………どんな依頼だ？」

「この前戦ったやつらのこと覚えてるよね？」

「ああ…………。」

「そいつらの抹殺って感じ この前は盗みだったけど、今回の人殺しだから、ジークくんも得意っしょ？」

「…………。」

「頼むからさ〜、ね？」

色仕掛けのつもりなのか最後にウィンクをするウィズ。

「・・・・・・・・・・わかった。」

「さすがジークくん　じゃあじゃあ、私と一緒にレッツゴー」  
ハイテンションなウィズについていくジークフリート。どうやら依頼に乗るようである。

・・・・・・・・色仕掛けのせいかどうかは知らないが。

## 第46話 王女の・・・

「おいッ！ラピスッ！！」

「ついてくんなタイガ！！」

町の中をひたすら適当に走り続けるラピス。それを追うタイガ。

城を飛び出してからすでに30分ほど経っており、その間ずっとこの2人は走り続けていた。

ちなみにミラージュは途中でダウン。

そのミラージュを『ラグナエース』へ連れて行くためにシャープもラピスを追いかけるのを止めた。

表通りを駆け抜け、建物と建物の間から裏通りへと行き、とにかくタイガを撒こうと必死のラピス。

だが、全く撒かれないように追いかけるタイガ。

「ハア・・・ハア・・・。し・・・しっけ ぞッ！！」

「しっこくて結構だよッ！！」

「女に嫌われるタイプだなッ！！・・・だッ。」

足を躓き、派手にすっころぶラピス。

本気で走ってただけに、見事といえるほどのヘッドスライディングである。

「うえッ、土が口に入っちゃったよ。」

起き上がろうとすると、ラピスの目の前にタイガが立っていた。

それを見上げるラピス。

「・・・やっど、追いつい・・・たあ。」

ゼエハアと息を肩でしながら言うタイガ。

身体からは汗が出ており、タイガは額から出てくる汗を手で拭う。

そこまで必死だったのだろうか。

たかだか仲間1人のために、30分間追いかけることができるのかこの男は。

「・・・ラピスって・・・この惑星の・・・王女だったんだね。」

「……ああ。まあな。」

走るのをあきらめたのか、逃げる様子もなくその場に立ち上がる。

「なんで……家から逃げたのさ。」

「……嫌だったからさ。」

「嫌？」

「ああ。あのクソ親父は自分の惑星しか頭に入ってねえ。そのせいでこの惑星『スレイミア』の軌道上にある衛星が貧しさで大変だつてのに、あのクソ親父は何にも対処とかしねえのさ。だからおれは、城を出て、その衛星を少しでも豊かにするために外で働いた。」  
うんうんと、タイガが頷く。

「だけど、所詮子供の仕事なんてたかが決まってる？とてもじゃないけど、仕事の稼ぎだけじゃその衛星を救えないと思ってな……。」

「……それで盗賊になって、盗んだものでその衛星を救おうとしたのか。」

「まあな。」

なるほど。これがラピスの盗賊になった理由。

私欲のためではなく、ひとつの衛星を貧しさから救うためにした行動であり選択。

「……だけ。」

「けどラピス。他人のものを盗むなんて、やっぱりダメだ。その衛星の人が貧しさで苦しんでいるように、盗まれた人たちだって、盗まれたことで苦しんでいるかもしれないじゃないか。」

「わかってるさッ、そんなことくらいおれにだってッ！だけど、あのクソ親父がどうにも動こうとしねえんなら、おれが動くしかねえだろッ！他人が頼れねえなら、自分を頼るしかねえだろッ！！」

うつむきながらラピスが叫ぶ。その叫びは、裏通りに響いた。

タイガしか聞くものがないというのに……。

「……だけど、今は僕たちがいる。」

はつとした表情でうつむいた顔を上げる。

「昔は自分ひとりだったとしても、今は僕たちがいるだろ。仲間なんだから……もう少し頼ってくれていいんだよ。」

そう優しく言葉を言うタイガ。

仲間……今までラピスにとって、そんなものお飾りかと思っていた。

だけど………。

「………ツ……ウ……。」

「ラ、ラピス？ ないて……。」

「うつせ                      ツッ！ おれは……おれはなあ……」

ッ！………汗が目に入ったただけだッ！！！」

そう大声で言うのと、ラピスはタイガから顔をそむけ、再び顔をうつむけるのだった。

うつむいてわからないが、顔からは水が落ちていた。

汗なのか、………それとも。

## 第47話　襲撃開始

「セルリアさん。物資の補給がもう少しで終わります。」

「はい、わかりました。」

セルリアは今、物資の補給の手伝いをしていた。

物資を保管しておく倉庫の管理はセルリアが主に担当しているからだ。

「セルリアさん！のこり足りない物資は何ですか？」

遠くからセルリアを呼ぶ『ラグナエース』の乗員。

「あと医療関係の物資をお願いしま〜す！」

「わかりました！」

嫌な顔ひとつせず、その乗員は医療関係の物資を仲間と一緒に運びに行った。

あわただしく過ぎていく時間・・・。

そんなとき、町中がやや騒がしくなっていくのがあったセルリア。

「・・・？何かあったんでしょうか？スピルさん。」

ちょうど近くを通りかかったスピルに尋ねるセルリア。

「ん？いや、俺に聞かれてもなあ。」

そりゃそうだ。

スピルはそれだけ言うと他の荷物運びを手伝いに行こうとするが・・・

ドゴオオオオオオ・・・

突然強烈な爆発音が聞こえたかと思うと、音の発生源付近から煙が出ていた。

「・・・。なんだか知らんが、ただ事じゃあなさそうだな。」

「な、なに？今の音？」

一方こちらはタイガとラピス。

恥ずかしい話、現在道に迷っている。

表通りと裏通りを適当に突っ走ったために完全に迷ってしまった。

「わかんねえけど、嫌な予感がするぜ。」

「うん。行くっツ、ラピス!!」

「わかってらあッ!!」

「ハ　ハツ　ハツ　ハツ　ハツ　ハツ　ハツ　ハツ！！！」どうしたあああ  
あッ！！！貴様らの実力はその程度かあああああああああ  
???もつと俺たちを楽しませろおおおおおッ!!!!!!」

巨人を思わせるような大きな体格、全身を鎧で身を包んだ男が周りの人々に言った。

「ホントだね。どうせなら、城の衛兵１００人ほど呼んできなよ。そしたらおまえたち一般人はしばらく殺さないでやるからさあ。まあ、その衛兵がザコだったら３分以内に片付けてやるけどね。」



槍の先端に大量の血を滴らせている青年が言った。

そして、その青年の足元には10人ほどの人が血まみれで横たわっていた。息はないだろう。

一方、鎧の男の周りには、見事なまでに上半身と下半身を真つ二つに切断された死体がごろごろ転がっていた。男が持っている大剣には、青年の持つている槍と同じく血で染まっていた。

あからさまに危険人物な2人に、人々は2人から距離を離す。

「おっと。ぼくたちのエサが逃げないでよ。」

スッパアアアン

次の瞬間、人々から悲鳴が上がる。

逃げようとした適当な3人ほどの首を槍で刎ねたからだ。

そのままバタリと倒れる。周りからは今もなお悲鳴を上げるもの、人によつては失神、気絶するものまで現れた。

「…………お、おまえたちの…………、おまえたちの目的はなんだ。」

「…………」  
なんとか声に出して言う1人の男性。

「俺たちの目的かあああああああ???」

「そうだね。何も知らないであの世に逝くのも不憫だしね。いいよ、教えてあげる。ぼくたちの目的は…………。」

青年は男性に向かって槍を構える。

「…………『タイガ・ウナバラ』さ。」

言い終わると同時に、青年は男性の胸を串刺した。

第48話『人斬り』と『豪腕』

「・・・かはあ。」

男性は一度血を大量に吐くと、槍で串刺しにされたままぐったりと動かなくなった。

「まあ、所詮こんなものさ。」

青年は槍を振るって男性を槍から無造作に引き抜いた。

「ほらほらあッ！キミ達もこんな目に遭いたくなかったら衛兵が『タイガ・ウナバラ』を連れてくるんだなあ！さもないと・・・。」

青年は適当に目についた女性の胸を指す。

「こゝんな目に遭っちゃうよ。」

その女性は突然のことに何が起きたかわからないまま永遠の眠りにつく。

「まてッ！！」

「ん、なんだ？」

「おおおおおおおッ！！！！あいつはもしかするともしかするぞおおおおおおおおお！！！！！！」

槍使いと大剣使いは声のした方向へ振り返る。

見えるのは優男とガサツそうな女。

「おめえらッ！！こんなところでなにやってんだッ！！」

ラピスが2人に吼えた。

「なにつて殺人さ。ぼくたちの周りに見えるでしょ？」

薄ら笑いをしながら答える槍使い。

「そうじゃないッ！何の目的があつてこんことをするのさッ！！」

次はタイガが吼えた。

「俺たちはああああああああああああ！！！！あるやつを探してるのさああああああああああ！！！！！！」

「『タイガ・ウナバラ』ってやつをね。」

「！！！！」

タイガは驚きの表情を見せた。

タイガだけじゃない。ラピスもだ。

「僕を・・・？」

「あ。やっぱりキミがそうなのかあ。よかったよかったあ。いやあ、こんなことをしていればきっとキミが現れるだろうと思ってさあ。」

「当たり前だ！！僕に用があるならこんなことしないで普通に僕を探せよッ！！」

「それじゃ面白くないんだよね。こんなに人が町にいとさあ、『人斬りセシル』としての血が騒ぐわけさ。」

自分のことを『人斬り』という槍使いセシル。

自分でいうだけあって、セシルの周りには大量の血と死体があった。俺も『豪腕のオーガナイト』としての戦士の血が騒ぐのさああああああああああああああああああッッ！！！！！！！！！！

いちいち大声で叫ぶ大剣使い『豪腕のオーガナイト』。

「・・・それで、僕に用というのは何なのさ。」

怒りを押し殺したような声でタイガは問う。

「まあ、単刀直入に言つとぼくたちの仲間になってくれないかなあ、て思ってるわけ。」

「断る。」

即答するタイガ。

考えるまでもない。

「うわああ。そりや残念。」

と言いながら周りに集まっている町人を適当に3人ほど斬りつけた。」「ぐああああああああああああ！！！！！！！！！！」

即死ではなかったが、その場に倒れこむ斬られた人々。

「あゝ、ごめんごめん。手が滑っちゃったよ。」

「ハア　　ハッハッハッハッハッハッ！！！！おまえの手は何回滑らせりや気が済むんだよおおおおおおッッ！！！！」

次の瞬間、青年が叫ぶ。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
.....」

#### 第49話　タイガの選択

タイガはもう我慢の限界だった。

怒りが我慢や忍耐と言ったものでは抑えきれないので、後先考えずにタイガはその2人に突っ込んで行く。

「バカ！！タイガまでッ！！」

ラピスが言ってもすでに遅かった。

得物まで抜き、タイガは混信の限り斬りかかる。

「ふ。」

口元を緩ませるセシル。と、同時に攻撃対象をタイガに変更する。

「爆・烈・斬ッ！！」

刃に魔力をまわせ、混信の限り振りかぶった剣を振り下ろす。

キイイイイイイン

そんな金属音がしたかと思うと、タイガの攻撃はセシルの槍によって受け止められていた。

「このッ！」

「子供だねえ。」

「なんでさッ！」

「感情のままに行動するなんて、知能の発達していない子供、・・・いや、ガキのやることだよ。」

交差した状態からそのまま押し返すセシル。

「感情のまま動いていると。。」

槍を構えなおし、そして・・・

ズバアアア・・・

「痛い目を見るのさ。」

「ぐあああああああああああああああ！！！！！！」

袈裟斬りで、右肩から斜めに左わきの下まで斬りつけられ、吹っ飛ばされるタイガ。

そのまま痛みあまり絶叫する。

「殺しはしないよ。殺しちゃ怒られるからね。」

「タイガッ！大丈夫か？」

「ハア・・・ハア・・・。」

傷口を押さえ、苦痛の表情をしているタイガ。

「頼むからさ、ぼくたちの仲間になつてよ。仲間になったら、こんな痛い目をみないで済むんだからさ。」

「だから・・・断るって・・・言っただじゃないか。」

「ああ、そう。」

そう頷くとセシルの視線がタイガから傍にいるラピスへと変わった。

「・・・おれと戦うつてのか。」

「そうだねえ。タイガがおとなしく来てくれないなら、タイガの仲間であるキミを殺すしかないねえ。」

セシルは突きをする体勢をとる。

それを見て、ラピスも得物である短剣を抜く。

「タイガ、キミが来ないなら仲間に痛い目をみてもらうよ。」

言い終わると同時に一気にラピスめがけて突っ走る。

ラピスが紙一重でそれを避けようとビュンツと風を切るような音がして、ラピスの腹部をかすった。

「避けたつもりかい？」

槍をそのままラピスの避けた方向へと振るうと、

「ぐああッ！！」

今度はかすり程度ではない。

ラピスの腹部一直線に槍で斬られた痕ができた。

そしてそのままセシルは突きの体勢をとると、体勢が崩れたラピスにとどめの突きを入れた。

「アッ。」

声にならない悲鳴を上げるとラピスはぐったりと動かなくなる。

限りなく胸に近い部分をラピスは突かれたのだ。

タイガはあまりのショックに一瞬何が起きたかわかっていなかった。「……ね、タイガ。他の仲間たちにもこんな目に遭わされたくなかったら、ぼくたちの仲間になってよ。」

槍から抜かれるラピス。そのまま人形のようにばったりと自分でつくった血溜まりに倒れる。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
死んだのか？

そう思うと、タイガは頭の中が真っ白になった。

自分がこいつらの仲間にならないせいで、仲間が……。

おまけにこいつらは自分が仲間にならないと他の仲間もラピスと同じ目に遭わせると言った……。

「セシル。」

「なんだい？」

「僕が仲間になったら……他の仲間には手を出さないんだね。」

「向こうから何もしなければ、何もしないさ。約束するよ。なあ、オーガナイト。」

「おおおおおおお！！！！その通りだぜえええええつええええええツ！！！！！」

そうか  
・  
・  
・  
・  
。

それなら安心だ。

仲間には自分を追ってこないように言えば、仲間には危険はない……。

「……わかったよ。あなたたちの……仲間になるよ。」

その返答に満足したのか、セシルは口元を緩ませる。

「・・・・・・・・ただ。」

「ん？」

「ただ・・・・・・・・今一度仲間に会わせてくれないかな。少しの時間でいい。」

「・・・・・・・・ああ。いいとも。別れの挨拶は必要だからねえ。それじゃあぼくたちは、町の外で待つとくよ。」

「・・・・・・・・ああ。」



第50話 さようなら。そして・・・

現在、セルリアは『グリーンヴェル』内を迷走していた。  
なにせ町中を動き回るのはこれが初めてだからだ。

（ああ。スピルさんも連れてきた方が心強かったです・・・。）  
1人だと心細い。

何も知らない町中では、その心細さもなおいつそう強まる。おまけ  
に今セルリアは裏通りにいた。

・・・と、そんなとき。

「セルリアッ！」

少女の名前を呼ぶ声。

そこには、少女がよく知っている青年、『タイガ・ウナバラ』が  
いた。

「ウナバラさん！」

セルリアが寄ろうとしたが、途中でそれを止める。

なぜなら、タイガがどこか悲しげな顔をしていたからだ。

「・・・」

「ウナバラ・・・さん？」

セルリアの名前を呼んでから、まったく何も話さないタイガ。

「ウナバラさん。どうかしたんですか？」

「セルリア。・・・君に、言わないといけないことがあるんだ。」

「」

「？」

何だかわからなかった。

だが、タイガの表情を見ればだいたいいいやなことを言われることく  
らいはわかった。

タイガは必死に隠そうとしているようだが、少女にはわかってしま  
う。

「・・・悪い・・・知らせですか？」

単刀直入にセルリアは問う。

「半分はね。もう半分は．．．僕にはわからない。半分はわかった。」

だが、もう半分のほうは全く見当がつかない。

「．．．どちらから言ってほしい？」

「それでは．．．悪い知らせから、お願いします。」

「．．．さようなら。」

一瞬、何を言われたかわからなかった。

あまりにも唐突過ぎて。

「あの．．．もう一度、言ってくれませんか？」

「さようなら。」

同じフレーズ。聞き間違いではなかった。

「どうして．．．ですか？」

「．．．爆発音が聞こえたでしょ？その元凶である人たちに、『仲間になれ』って言われて．．．それで。」

「どうしてですかッ！！どうしてそんな人たちの仲間になるんですかッ！！」

セルリアが叫ぶ。それを見てタイガは驚いた。当然だろう。

普段温厚な彼女が、こうして激昂しているのだから。

「最初はもちろん断ったよ。だけど．．．仲間にならないと、君たちに被害が出すって言われて．．．」

要するに、タイガは仲間を盾にされたのだ。

「でも．．．だからって．．．」

「僕があいつらのところに行っても、僕を取り戻そうなんて思わないですよ。」

「どうしてッ!？」

普段の温厚さが本当に嘘のようだ。

裏通りに響くセルリアの声．．．。

「僕を取り戻そうとすると．．．あいつらが君たちを殺してしまっから。現にラピスも．．．」

「ラピスさんが、どうかしたんですか？」

「僕が一度誘いを否定したから、ラピスを瀕死の重傷を……。今は、病院に送られたはずだけど。」

病院となると、カイル、ゴルドー、ティレクがいる場所だ。

「だから……。もう我慢ならないんだ。これ以上、君たちに被害を出すわけには行かない。」

セルリアは言葉が出せなかった。

自分かもしタイガの立場なら、同じ行動をしていたらだろうか。

「……………それじゃあ、もうひとつの知らせは何ですか？」

「……………もう会えないだろうから、言わないといけないことがある。」

・  
そのときだけ、タイガは柔らかなやさしい表情を出しながら……

そして言った。

「君が好きだ。」

## 第51話　カイルとシャープの胸騒ぎ

「お、来たよオーガナイト。」

「うおおおおおおおおおおお！！！！お出ましかああああああああ！！！！！！！！」

『グリーンヴェル』の外に、1人出てくるタイガ。

近くに仲間の気配はないようだ。

「ふふ……。少し暗い顔してるね。……。ははぁん　さては、大切な人に別れでも告げて来たのかい？」

その言葉を聞いた途端、タイガの目付きが鋭く変わり、セシルをにらみつける。

「ごめんごめん。失言だったね。これから仲間になるんだ。仲良くなるうよ、タイガ。」

「好きで仲間になったんじゃないけどね。」

呟くようにタイガは言った。そりゃそうだろう。

あの状況なら、ほとんど脅しとしか言いようがない。

ラピスに瀕死の重傷を負わされ、拳闘他の仲間も同様の苦しみを与えるといわれたのだから……。

それに比べたら、自分がこいつらの仲間になるだけでそれがなくなるのだから、条件としてはやすいのかもしれない……。

「さあ、行こうか。」

「……。ああ。」

そう返事するタイガの足取りは重かった。

「でひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ……！俺様だいふつか　つつ  
！！」

カイル、ミラージュ、シャープがいるピロティで3人に向かってブ  
イサイン。

恐ろしいほどの再生能力。実はポ　モンの『じこさいせい』とか覺  
えているのではないだろうか。

「ったく、心配せんじゃないわよ。」

心配のもとをつくった張本人であるミラージュがテレクに言った。

「はははははは！！俺様は、全世界の女の子のためにも、そう簡単  
にくたばるわけにはいかないのさあ！！」

「一度くたばって輪廻転生してその性格直したほうがいいと思うわ  
よ。」

「輪廻転生しても、俺様の性格は変わらないぞ！絶対ッ！！」  
むしろ今までよりやかましくなったのは気のせいだろうか。

そんなことを思いながら、シャープは自分で入れた紅茶を一服した。

「そう言えば、タイガはどこ行っただろうねえ。」

「ん？タイガまだ帰ってきてないのかい？てつきり部屋の中にいる  
と思っただけだ。」

「いなかったよ。部屋にも。」

「じゃあ……。まだ『グリーン・ヴェル』にいたりとか……。」

「そうだといいんだけどねえ。それにおかしいのはそれだけじゃな  
いさ。」

と、シャープはカイルに言った。

その内容は、カイルにもわかっていた。

「ラピスのことだね？」

「ああ。あの子が瀕死の重傷なんて、絶対ただ事じゃないことが起  
きたって事だよ。」

「そういえば……。何か爆発音が聞こえたけど……。」

「アタシも聞こえたよ。あれが何か関係あると考えるのが妥当だろうね。」

ついでに言えば、ラピスがティレクが入院していた病院で入院することになったので、『ラグナエース』の出發は先延ばしされていた。……それで、もうひとつあるんじゃない？ シャープ。」

「へえ。わかってたかい。」

「内容はわからないけどね。」

「セルリアのことさ。」

「セルリア？ たしかに、ここに来てないけど……。」

「あの子は部屋にいるよ。呼び出そうとしても返事のひとつ返ってこないのさ。」

「ふん。珍しいね。」

カイルは紅茶を一服。普段は何も言わずともセルリアが紅茶を用意してくれるのだが、いまは部屋の中。

「ただ、壁に耳を澄まして聞いてみると『ウナバラさん、ウナバラさん……。』って涙ぐんだ声で聞こえるのさ。」

「っていうか、そんなことするのかこの人は……と、口には出さないが思うカイル。」

「じゃあタイガにも何かあったのかなあ。」

「このまま『ラグナエース』に帰ってこなかったら、何かあったと考えるべきだろうね。」

ことが予想以上に重大な感じがしてくるカイルとシャープ。

そんな2人をよそに、ティレクとミラージュは互いに言い争いをしている。

『色魔男』と『怪力女』の言い争いである。

「まあとにかく。アタシはこれからセルリアの部屋に行ってくるよ。」

「

「オレも行こうか？」

「女同士の話に、男は邪魔さ。」

「そうか。じゃあ頼む。くれぐれも手荒な真似はしないでよね。し

ないと思うけど。」

「わかってるって。」

シャープはそう言っていると、セルリアの部屋に向かった。

ピロティに残ったのは、カイルと『色魔男』と『怪力女』の3人である。

シリアスなムードが、『色魔男』と『怪力女』のせいで台無しになるのだった。



## 第52話　遠い記憶

そこは荒野だった。

ただ、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面……。

血の臭い……。気分のいいものではない。

その血の発生源であるたくさんの兵士たちの死体がところどころに山積みになされていた。

そんなところに、青い髪の青年と銀色の髪の少女が互いに剣を構えて向き合っていた。

「ヴァイン。あなたはここで終わりです。自己の判断だけで滅びかけている世界を立て直すことはできないッ！」

銀色の髪の少女が青年に言った。

「だがその自己の判断がより崇高なものならば、周りの者の意見に耳を傾ける必要はないのではないか？ ルシア。」

平然と言ったのける青年。銀色の髪の少女が言うには、その青年はヴァインという名のようである。

そして、銀色の髪の少女はルシアという名らしい。

「そんなことはありませんッ！ 崇高かどうかは自分の意思だけではなく、周りの者の意見も必要ですッ！ ましてやこれから本当の戦いが始まりますッ！ おそらくは今回起きた戦争よりも大きな戦いが！」

「そんなことくらいわかつている。だから僕は最も優良な方法を民に教えるつもりだ。」

「それは自分の意思しかないではありませんかッ！」

「それでかまわない。」

「かまわなくななどありませんッ！ あなたがこれ以上身勝手な行動をするというのなら……ッ！！！」

「・・・・・・・・夢、か。」

目を覚ますと、タイガはベッドの上で眠っていた。

（それにしても・・・・・・・・ずいぶんとリアルな夢だった。たしか・・・・・・・・。）

タイガは夢の内容を思い出そうとする。・・・・・・・・だが、なぜか思い出せない。

頭の中にもやがかかったようだった。

なにかとても重要なことだったと思う。

なんかこう・・・・・・・・夢というよりは、記憶を眠っている間に再生させたような・・・・・

と、そんなところにコンコンと扉のノック音がした。

「・・・・・・・・だれだい？」

カチャリと扉を開けて出てきたのは・・・・・・・・

「ハロ　！！タイガくゝん　ひっさしっぶりいゝ」

扉を開けるなりなれなれしく抱きついてくる魔女。

その魔女には、タイガは見覚えがあった。

「き、君は確かウイズ！」

抱きついてきた魔女を引き剥がしながらタイガは言った。

「ピンポーン 大正解ッ！」

「なんで君がここに？」

「そりゃ私もセシルとオーガナイトと一緒に組織の人だもんねえ」

「

まさかこんなところで会うとは・・・。

驚きを隠せないタイガ。

「あ、そうそう。ちよつとタイガくんこれから私たちのリーダーに会ってもらいたいんだ。いいっしょ？」

現在タイガはこいつらの仲間。従うしかないと思い、こくこくと頷く。

「じゃあけつてい じゃ、ついて来て。」

そういうウイズに、タイガはついていくことにしたのだった。

### 第53話　ルシア

とことことウイズについて来ているタイガ。

自分が寝ていた部屋を出て、歩き続けて5分ほど。まだ場所には着かないようだ。

また、歩いているうちにわかったのだがこの場所タイガにはどこかわからないはかなり広い。

そして、広いゆえにしまってしまうことがある。

もしかして……。

「ねえウイズ。」

「なにになに？」

「迷った？」

間。

「……そんなことないよ」

さっきの間は何だったのか？と、問い質したいタイガだが、無駄な時間は今のところつくりたくないの、間については軽くスルーすることにした。

ただ、言葉で言わない代わりに目で「さっきの間は？」と質問することにした。

そのことに気づいたのかウイズは「さあ〜て。とつとと行こっか。寄り道せずに。」と言ってさっきよりやや早歩きになる。

こんな道案内で大丈夫なのか？と思いつつタイガはその後について行くことにした。

「はい、タイガくんここだよ」

ウイズが案内した先には、他の部屋の扉より少しばかり大きい扉があった。

「この先に私たちのリーダーがいるよ」さ、はいつてはいつて。  
そう急かすウイズに、しぶしぶタイガは従い扉を開けた。

扉の先の部屋は、大広間だった。

とにかく大きい。『グリーンヴェル』の城にあった大広間より大きいかもしれない。

「やっと来たね。待ってたよ。」

そんな大広間のちょうど中心あたりに、その声の主がいた。

銀色の髪を腰あたりまで伸ばし、白色メインの服装をした少女が。

ウイズはタイガを案内だけすると、大広間から出て行った。

現在、大広間にいるのはタイガの銀色の髪の少女だけである。

「君は？」

当然ながらタイガは名を聞く。

その言葉を聞くと、少女は嘆息まじりのため息を出す。

「やっぱり、覚えてないか。」

タイガは首をかしげる。

一度も会った覚えがないからだ。

だけど……………

なぜだろう。どこかで会ったような覚えもある。

「まあいいよ。ボクの名前はルシア。」

丁寧な自己紹介してくれる少女ルシア。

……………ルシア？

どこかで聞いたような……………。

「ボクはキミの事を覚えてるのに、キミはボクのことを覚えていないんだね。ちよつとばかり残念だよ。」

「……………あのさ。僕と君は今現在のはじめて会ったんじゃないの？」

「いや。大昔に一度会ってるよ。キミは単に忘れてるだけだよ。」  
……………。

『大昔』というレベルで会ったことがあるようだ。

「まあいいや。ルシア、僕は君にいくつか質問がある。」

「いいよ。ここにはボクとキミしかいないから、遠慮なく言ってくれ。」

答える気は十分にあるようだったので、タイガは遠慮なく質問することにするのだった。

## 第54話　質問タイム

「それじゃあ第1の質問。ここはどこ？」

窓越しから見ても砂嵐一色。はつきり言っただけだかわからなかった。

「ここは、人類の母星『カムラン』だよ。今ではとてもじゃないけど、人の住めるような惑星ではないけど。」

これが『カムラン』。聞いたことはあったけど、実際に目の当たりにするのは初めてだった。

「じゃあ続けて質問させてもらおうよ。人が住めそうにない惑星に、なんで君たちは住んでいるのさ。」

「簡単なこと。見つかりにくいからだよ。敵にね。」

敵……この人たちの言う敵とは僕たちのことなのだろうか。

「その敵ってさ。僕たちのこと？」

「いや。少し違うね。」

意外な回答。

「そもそも、キミはもうボクたちの仲間じゃないか。まあキミの言っている『僕たち』はたぶんつい最近まで共に行動をしていた人たちのことだろうけど。」

無論だ。

そもそもタイガは、完全にルシアたちの仲間になる気はなかった。

半ば強引………というより強引に仲間にされたのだから。

「じゃあ君たちの敵とは何なのさ。」

その質問に、ルシアは少し考えるようなしぐさをする。

そして……

「ごめん。それだけは今のところ教えられないな。」

「どうして？さっきなんでも答えてやるって言ったばかりじゃないか。」

「今言ったところで変な人扱いだろうしね。」

十分変じやないかというツツコミは伏せておく。

話は続く。

「まあ、ボクたちの敵は『ラグナエース』の人間たちじゃない。本当の敵は別にあるんだ。『ラグナエース』の人間たちはあくまでオマケの敵って感じだよ。」

「オマケって……。」

タイガは『ラグナエース』の人たちの強さを知っている。

少なくともほとんどの人たちは並の人の戦闘能力を凌駕していた。

……戦闘員たちの戦闘能力は今は何んとも言えないが。

そんな人たちがルシアたちにとっては『オマケ』レベルなのかと考えると、本当の敵の強さの程がうかがえるような気がするタイガ。

とは言え、本当の敵がなんなのかを聞くには今のところ無理らしいのでひとまず気にしないことにする。

「それはそうとタイガ。『ラグナエース』は何のために旅をしているのか知ってるかい？」

「え？」

そういえば前、カイルに聞こうとしたのだが結局聞けなかったことだった。

「いや。知らないけど。」

「じゃあここで教えてあげるよ。」

「……なんで『ラグナエース』のこと知ってるの？」

「オマケの敵とは言え、敵のことはちゃんと調べないといけないからね。」

『オマケ』という言葉がただでここまで腹が立つものなのか……。

タイガは今、それを感じている。

次にルシアから発せられた言葉は意外なものだった。

「簡単に言つと、『ラグナエース』がキミに出会うまで調査していたものと、ボクたちの敵は、実は同じ可能性があるんだよねえ。」



## 第55話　回答の意味

「なッ。」

ルシアの言葉に、さすがに驚くタイガ。そりやそうだろう。

「その『ラグナエース』の調査の内容は、『死んだはずの人がどこからともなく現れる』というものなんだ。」

「……………」

タイガは「は？」と言いたげな表情をしていた。

「とある実例を教えてあげるよ。」

そのタイガにわかりやすくするためかルシアは実例で教えてくれるようだ。

「ちよつとしたニュースでやってたんだけど、とある人の葬式をやっているとき、突然その葬式に乱入してきた人がいるんだ。その乱入した人が葬式をしている人と同じ人物だったってものだよ。」

「単に似ている人なんじゃない？」

その言葉にルシアは首を左右にふる。

「同じだったのさ。声も身長も体重も年齢も指紋の形も……………」。  
ただ、唯一違うところがひとつあったんだ。」

「違うところ？」

「性格さ。それだけが違っていた。」

「そんなことって……………」。

だいたい、指紋が同じという時点でその人が同じ人物であることが証明されているわけだ。

まるで同じものを複製できるコピーのよう。

「……………クローンとか？」

「クローンなら、一から育てないといけないから、同年齢にはならない。」

一からというのは赤ちゃんからということだろう。

「とにかく、『ラグナエース』が調査していることは以上だよ。」

「君たちの目的というか敵もそれじゃないの？」

「あくまで可能性だからね。ほぼ確実だろうけど。」

「だったらそいつが敵決定と言ってるものじゃないか。」

「まだ聞きたいことがあるんだけど。」

「なんだい？」

「君たちは、なんのためにその敵たちを倒そうとしているんだい？」  
最もタイガが聞いたかったこと。

おそらく自分がここに連れてこられたのはその敵と戦わせるためだ。  
けど、疑問がひとつ残る。

なぜ自分なのかということだ。

この『タイガ・ウナバラ』でないといけないのか……………。  
なぜ『ラグナエース』の人たちじゃいけないのか……………。  
そんな考えを質問すると同時にしてしまう。

「この世界を救うためさ。それ以外の目的はないさ。」

「じゃあなんで僕を仲間にしたのか。」

続けてタイガは質問をする。

「そうだねえ……。なんて言えばいいのかな。正確には『  
タイガ・ウナバラ』ではないんだ。」  
「？」

わからない。

自分は『タイガ・ウナバラ』だ。

それなのにルシアは仲間にした『タイガ・ウナバラ』を仲間にして  
ないと言っている。

「まあ、じきにわかるよ。今は意味がわからないだろうけどね。」

大広間が沈黙につつまれる。

「質問は以上かい？」

「今のところはね。」

「そう。まあ今のところキミに仕事はないから部屋でゆっくりしててよ。」

「そうさせてもらつよ。」

タイガはそう言つと、大広間から出て行くのだった。

## 第56話『仲間』のもとへ

ここで時間をさかのぼり、真夜中の『グリーンヴェル』。

敵の仲間になったタイガはこのとき眠っており、カイル、シャープ、ミラージュにテレクはピロティで会話をしていたこと……。

あれ。

生きてるのか、おれ……………

……………

場所は病院。少女のいる部屋はベッドがひとつあり、そのベッドで少女が眠っている。

個室で、人気は少女以外誰もいない。

窓があつたので、少女はまだ意識がはっきりとしていないような目で窓の外を見る。

夜……………

ベッドの横に机があるのだが、その机においてあつたデジタル時計

をその後見る。

2時……………

完全に深夜。

深夜になるまで、自分はいつたい何をしていたのだろうか、少女は記憶をまき戻す。

まず爆発音。

人二人。

そのうちの1人に、自分の胸を……………

串刺しにされた……………

まだはつきりとしえない意識の中で、少女は串刺しにされた箇所を素手で触ってみる。  
包帯が巻かれていた。

……不思議だ。

かぎりなく心臓に近い部分を刺されたのにお  
れはまだ生きてる。

自分の生命力に少女は1人、感心した。

……眠いな。少し寝るか。

現在時刻は2時10分。

寝て当たり前の時間だ。

少女は、それ以上何も考えずに眠りに着いた。

少女は夢を見た。

青年がおれを串刺しにしたやつらと一緒に、どこかに行く夢を……

……

青年はおれが知っている人物。

出合ったところは敵同士だったが、いつの間にか『仲間』になってて

……

ただのお飾りの『仲間』かと思ったら、そうじゃなくて……  
決して、城にいるだけじゃ手に入らないものをおれは手に入れていた。

そして、おれを『仲間』とはつきりとさせてくれた青年が、どこか遠くへ行こうとしている夢を……

……いや、『夢』じゃない。

これは、おれの目の前で起こった

『現実』だ。

そしておれは

そいつを

同じ『仲間』として

連れ戻す。



翌朝、個室はもぬけの殻だった。  
窓が開いているところから見て、そこから抜け出して、目指したの  
だろう……………。

『仲間』のもとへ。

## 第57話 少女の決意

一方こちらは、惑星『スレイミア』の首都『グリーンヴェル』で一夜を過ごした『ラグナエース』。

一夜過ごしたことで、カイルたちはひとつわかったことがある。

タイガに何かあったということ。

結局一夜過ごしてもタイガは『ラグナエース』に戻ってこない。そう考えるしかないだろう。

（まったくどうしたもんかねえ…。）

『ラグナエース』内の通路を歩きながらつい思ってしまうシャープ。シャープは朝食を食べた後、セルリアの部屋へと向かおうとしていた。

『ラグナエース』に戻ってきてから全く出会っていない。

中からわずかに聞こえる言葉から、原因はタイガがらみということにはわかつている。

もっとも、その肝心のタイガはここにはいないのだが…。

ピンポン

セルリアの部屋の前に来ると手始めに部屋のチャイムを鳴らす。

……………。

返答なし。

出てくる気配もなし。

ただ、部屋には鍵がかかっていないようだった。

「……………入らせてもらうよ、セルリア。」

そう言つと返答を聞かずにセルリアの部屋に入るシャープ。

「……………あ、シャープさん。」

ベッドで寝ていたセルリアは、そう言つと起き上がった。  
ひどく元気がない様子…。

「単刀直入に聞かせてもらうけどさ。どうしたんだい？」

「……………」

その質問を聞くとセルリアはややうつむいてしまった。

「……………タイガのことかい？」

ピクリとセルリアの肩が動いた。

凶星のようである。

「タイガのやつ、昨日から全く戻ってきてないんだけど…何かあったのかい？」

「……………さようならつて。」

「え？」

あまりに小さい声だったのでシャープには聞こえなかった。

いや、それとも自分の身体が無意識に聞かないようにしたのか…………。

…………。

「さようならつて…ウナバラさんに言われて……………」

「……………どうしてだい？」

とてもじゃないけど信じられない。

「昨日、爆発音がありましたよね？……………その元凶の人たちにウナ

バラさん、『仲間になれ。』って言われたらしくて……………」

声はやはり小さくて弱々しい。

「……………けど、なんでタイガはそんなやつらの仲間に……………」

「仲間にならないと、私たちに被害が出すって言われたらしくて……………」

それで……………」

小さくて弱々しい声がやや涙まじりの声になった。

ああ、なるほど……………。あのバカのことだ。

仲間に被害を出したくないと思つてやつらの仲間になったのだろう。  
特にタイガは、その想いが強い。

「どこに言ったのか、わかるのかい？」

「わかりません。『さようなら。』って言われて……それだけでしたから……………」

やっぱりタイガのやつが教えるわけないか…。

だけど、だからといってこのままほっておくわけにはいかない。

「探すよ、セルリア。タイガをね。」

「無理ですよ。場所さえわからないんですから。」

「そりゃそうだけど、このまま見捨てる気かい？」

「違いますッ！けど……………」

そう言いかけたとき、セルリアの部屋の扉が開いた。

そこにいたのは

「ラピスッ！？なんでこんなところに？」

「あんなところでのんびり寝てられるかッ！そんなことより……………」

……………」

ラピスは病院から勝手に抜け出し、ここまでやってきた。

傷口は、ラピスの超人的な回復能力のおかげで見た感じではふさがっているようだ。

そんなラピスは入ってくるなりセルリアの傍まで近づく。

「おめえ、タイガを探さねえのか？」

「探したいですけど……………場所が……………」

「場所なんてしらみつぶしに探せばいいだろ。それに、だいたいの場所がおれには想像がついてんだよ。」

「でも……………」

「でももクソもねえよッ！！だいたい、タイガに直接別れを告げられたのはおめえだけじゃねえかッ！！おれたちはそれすらなしにずっと別れちまったんだぞッ！！」

「！！！」

言われてみれば確かに……………。

「つらいのはおまえだけじゃねえんだ。直接別れを告げられなかったおれたちもつらいんだッ！それくらいわかりやがれッ！！」

そうだ……。

私はまだマシなほうだ。

他のみんなは、『さようなら』すら言われていないのだから……。『聞かせてもらうぜ、セルリアさんよ。おめえはタイガにもう一度会いたいかな？』

「……はい。」

セルリアは涙を堪えきれなかった。

だから涙声になってそう言った。無論、瞳からも涙を流して……。

「私……もう一度タイガさんに………会いたいです。」

それは、少女の本心であり、決意だった。

『さようなら』と言われても、やっぱり別れたくないものは別れたくない。

そしてその言葉に、ラピスとシャープは満足するのだった。

余談だが、セルリアがタイガのことを『ウナバラさん』から『タイガさん』に変わっていたことに気づいたのは、その数十秒後である。

## 第58話　これからどうしようか……

セルリアを部屋の外へ連れ出して、現在主要メンバはピロティに集合していた。

主要メンバ　というのは、カイル、ティレク、セルリア、ミラジユ、シャプ、ラピスのことである。

ピロティに設置されているテブルの上には、いつものことながら菓子類と紅茶人数分がセッティングされていた。

ちなみに『ラグナエス』は、ラピスも戻ってきて、補給も終わったので再び宇宙を航海中である。

「ところでラピス。アンタ、だいたいの場所は想像がついているって言ってたけど、どこなんだい？」

「ああ。そのことか。あくまで推測の話になるが、それでもいいか？」

「ろくな情報がないので、ラピスの言葉にその他全員はうんと頷く。

「はつきり言うतすごい単純と言えば単純な考えなんだけどな。ああいうやつらはたいてい自分たちの存在をなるべく知られないように、人目に付かないような場所に本拠地があるはずだ。例えば……

……人が住めそうにないところとか。」

「たしかに、その通りかもしれないねえ。アンタに致命傷を負わせられるほどの凄腕のやつらなのに、知っている人がいないんだからね。」

「まあとにかく。まずは人目につかないような場所で人が住めそうにない場所を探せばいいんでしょ？」

と、ミラジユ。

「よし。それじゃオレはブリッジに行つてレダで調べてみるよ。」

「レダでそんなことまで調べられるのか。」

さきほどから菓子類をパクパクを食い荒らしているティレクが言っ

た。

「ああ。この『ラグナエス』はそこらの戦艦よりはるかに優れているんだ。それにこの『ラグナエス』は、『超高度先史文明時代』の産物だしね。」

そう言うときイルはブリッジへと向かった。

そして再び菓子類を食べ始めるティレク。

「……………あんたさあ。自分の親友がどっかいつちやっただっていのに、よくもまあおんきねえ。」

おもわずそう言ってしまうミラ ジュ。そりゃそうだろう。

「大丈夫だって。タイガのやつなら大丈夫だ。」

「なんでそんなこと言い切れるのよ。」

「親友兼心の友だからさ。」

……………。

どっちもほぼ同じような気がするが。

「親友だから、あいつを心から信じてやれるのさ。心から信じねと、7年間も一緒に流浪の旅なんてできないしな。」

「……………」

…ああ、そうか。

こいつは心から信じているから、タイガは無事だってはつきりと言えるんだ。

と、ついミラ ジュは思ってしまう。

「さてとそれじゃ、俺様はトレ ニングル ムにでも行くぜ。」

菓子をさんざん食った後、ティレクはピロティから出て行った。

「……………じゃ、あたしもトレ ニングル ムにでも行くわ。じやあね。」

ミラージュはそう言うときティレクの後を追うようにして出て行った。残ったのは、シャープ、ラピス、セルリア。

特に何もすることがない3人は雑談でも始めるのだった。



一方こちらはタイガ。

どういうわけか、タイガはウイズの部屋にいる。

「やつほ、タイガくゝん 頼みがあるんだけどさ」

大広間を出ると、ウイズに話しかけられる。

どうやら外で待ち構えていたようだ。

「なに？」

普通に言い返すタイガ。

いい加減タイガはこのウイズの扱いに慣れ始めていた。……………

敵なのに。だけど、今は仲間。

「まあまあ、ここで立ち話もなんだしさあ 私の部屋に来ない？ え、なにに来てくれるの！？ それじゃレッツゴッ！」

勝手に1人で決定すると、ウイズはタイガを引っ張って自室へと連れ込む。

……………そして現在の状況へと至る。

（なんだか調子狂うなあ。）

ついそんなことを思ってしまう。

ウィズは、自分が仲間になってから普通に話しかけてくるし…。

だいいち、もともと敵同士だったのにウィズはそんなこと全く気にしてない様子である。

なんて言うか……………天真爛漫。

そのため、下手な情が入りそうになるタイガ。

「…みんなどうしてるかなあ。」

ふとそんな言葉を口にするタイガ。

怒ってるんじゃないだろうか。…いや、怒ってるだろうなあ。

ろくにさよならも言わずに、ここに来たんだから…。

「はあ。」

ため息をひとつ。

考えたところで、タイガにはわからない。

無情に時間が過ぎていく……………。

## 第59話　タイガとウイズの会話

「はいはい、タイガくん　まずはティ　をどうぞ」

ティ　：紅茶をタイガが腰掛けているソファ　の前にあるテーブルに置くウイズ。

そして自分のをテーブルをはさんだ向かい側にあるソファ　の前に置き、そのままソファ　に座る。

ついでに言うと、テーブルの上にはそのほかにもお菓子が大きな皿に山のように積まれている。

紅茶を差し出されたので、まずは一口飲む。

：　なんかこうしているとピロティでみんなと一緒に雑談をしていたときのことを思い出してしまう。

実際雰囲気と状況なんてそれにはるかに近く、相手がティレクたちの代わりにウイズがいるようなものだった。

「　ん？私の顔に何かついてる？」

ずっと見られていることに気づいたウイズ。

気づかれて顔をそむけるタイガ。

バリバリバリバリ.....

ズズ.....

.....。

菓子を食べる音。

紅茶をすすする音。

そして沈黙。

「静か過ぎるんじゃないやあああああああああ

！！！！！！！」

飲みかけてた紅茶をつい噴き出してしまふタイガ。

静寂をものの見事に粉碎するウイズの声。

「タイガくんッ！何か話題とかないの！？なんでもいいからさあ！」

「え、あゝ……。」

こちらに来てまだ1日目。

こちらの話題なんて正直なかった。

しばらく考えて……

「そつえばさ。ルシアって何者なの？」

「へ？ルシアちゃん？私の友達兼リダ だけど……。」

いや、そんなウイズとルシアの関係を聞きたいんじゃないやなくて

「そうじゃなくてさ。その……どこからやってきたのかとか……。」

あ、そゆこと。とばかりの表情になるウイズ。

「どこからやってきたのかって……ここだよ。」

「ここって？」

「ここって言えばここだよ。惑星『カムラン』出身。」

「そんなバカなッ！『カムラン』は、だいぶ昔から人が住めないような惑星じゃないか！」

いや、こいつらを除いてだけどさ……。ついでに言う自分も。

「でもここだよ。『カムラン』出身だって本人からちゃん聞いてるんだから。」

……。

「いつから？」

「いつからって、ずっと昔だよ。」

「昔ってどのくらい？」

「……………言っても信じられないと思うよ。今のタイガくんには。」

「それでもいいからさ。」

タイガのしつこさに観念したのか、ウイズはこう言う。

「約550年。」

「……………は？」

「いやだから、約550年前から。」

…。

……………。

……………。

……………。

……………。

「うそでしょ。絶対。」

「ホントだって！やっぱりタイガくん信じなかったあゝ。」  
やや怒り口調になるウイズ。

「だって約がついてても550年だよ？そんなに生きられるはずないじゃない。」

「生きられるんだよ。ルシアちゃんはねえ。」

その言葉の後、ウイズはこう言った。

「人間じゃないんだよ。私と同じでね。」

## 第60話　タイガとウイズの会話2

「人間じゃないって…どういう意味？」

「どういう意味も何も、そのまんまの意味だけど。」  
「たしかに…」

「それではタイガは言い方を変える。」

「じゃあ、人間じゃなかったらいったい何なのさ？」

「……………」

少し間をおいて少し冷めた紅茶を一服するウイズ。  
そして言った。

「『エルフ』って知ってるかな？」

「『エルフ』？」

「少しだけ聞いたことがある。」

「『エルフ』はかつて生きていた伝説上の生き物だと…。  
そう。あくまで伝説。実在するとは聞いたことがない。」

「で、でも『エルフ』って伝説上の生き物なんじゃ」

「いやいや。実際こうして君の目の前にいるじゃないの　魔女ウイズ様がね」

「たしかに見た目こそは魔女…というか『エルフ』だ。」

「『エルフ』の典型的過ぎるほどの人より長いとんがった耳。肌が漆黒でもなく褐色でもないところを見ると『ダクエルフ』ではないようだ。」

ただ、『エルフ』の典型的な例として長くとんがった耳とだけではなく、細身の身体と切れ長の目もあるのだが、切れ長の目のほうはウイズには当てはまらない。むしろその逆かもしれない。

「つぶらな瞳…」といったところか。

細身の身体のほうはというと、服を着ているので正直わからないがおそらくそうなんだろうと想像がつく。

タイガは前回戦ったときに吹っ飛ばしたわけだが、そのときウイズ

はあつけないほどに簡単に飛ばされたのだから…。

「『エルフ』は実在するよ。最も、自然の中で暮らす種族だから人目に付かないだけだよ。また、『エルフ』の集落付近には結界が張ってあるからね。それでなおさら見つからないんだよ。結果として人間たちの間では『エルフは伝説上の生き物』となったわけ。」

「へえ。」

おもわずそう口から出てしまうタイガ。

エルフは賢明だと聞くが、その点でもウイズは当てはまるだろう。

「…てことは、ルシアも『エルフ』なのかい？」

「せいかゝい 『エルフ』はすごく長い寿命だからね。おまけに見た目に全く老いがこない。ある程度、成長すると10〜25歳くらいの若さで見た目はほとんど変わらなくなるよ。それで死期が迫り始めたら老人みたいになるんだよ。」

「へえ。」…てことはウイズもルシアも若いほうなんだ。」

『エルフ』のなかでは…。と言う部分はあえて言わない。  
ということはルシアは見た目こそ15歳ほどだが、550年前から生きているってウイズは言っていたから実際の年齢は…。

「じゃあルシアの歳って550…。」

ドゴオオオオオオオオン

ウイズからの強烈なストレートパンチが炸裂。そのまま、見事にぶつ飛ぶタイガ。

「なにすんのさッ！」

「女の子の年齢を口に出そうとするなんてタイガくんサイテッ！」

「……。」

こういう考えは人間も『エルフ』も変わらないのか。

「…すみません。」

もと座っていたソファに座り、とりあえずあやまるタイガ。

「よしよし。いい子いい子」

（僕は子ども扱いだよ。）

「ま、私はタイガ君が思っているほど生きてないけどね。」

「……。」

歳を聞くとまたぶっ飛ばされるだろう。

口で言わない代わりに目で言う。

「私は15歳だよ。」

わかったのか自分の年齢を言うウイズ。

15歳って…。自分と2歳しか変わらない。

ルシアもパツと見た感じ15歳だったが、年齢は軽く500才バ  
。それで15歳の若さを保っている…。

『エルフ』の血は偉大だ。女性の方々はさぞ『エルフ』がうらやま  
しいと思うだろう。

「…それでさ、タイガくん。ちょっと私の相談に乗ってほしいんだ  
けど……………」

「相談？」

ウイズの表情はどこか違っていた。

なんていうか……真剣。

もとよりこのためにタイガを呼んだんだろう。…というか強引に連  
れてきたのだろう。

「うん。僕でよかったら、相談に乗るけど。」

ウイズは自分に『頼みがある。』と言っていた。

おそらく頼みとは『相談』のことなのだろう。

それ抜きでも、困っている人をほうっておけない性格のタイガは、  
ウイズの相談に乗ることにしたのだった。



## 第60話「タイガとウイズの会話2」(後書き)

エルフ

伝承におけるエルフの姿は、基本的に人間に近い姿をしている。大  
体の伝承において自然と共に暮らす種族であり、住まう自然につ  
いて深い知識を持ち、これを脅かすものを許さず、妖術をもちいる。  
エルフは一般に、不死もしくは非常に長い寿命を持ち、事故に遭  
ったり殺害されたりしない限り、数百年から数千年生きるといわれ  
ている。ただし、徐々に活力がなくなるなど、「枯れていく定め」に  
あることは確かなようだ。

ダークエルフ

特殊なエルフの種族としてダークエルフ(闇エルフ)を登場させて  
いる物語やRPGは少なくない。そのような作品では、普通のエル  
フは光や善、秩序の体現者、ダークエルフは闇や悪、混沌の体現者  
と定義されていることが多い。容姿については、ほぼエルフと同じ  
だが肌の色だけが漆黒(あるいは褐色など)であるとするのが典型  
的である。そして大抵は、普通のエルフと強く敵対する存在で、エ  
ルフと同等の能力や洗練された文化を持つものとされる。

参考サイト

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%95>

## 第61話 揺れるタイガ

「それで、相談って何？」

「……………タイガくんはさ、『エルフ』のことをどう思うっ？」

唐突に言われて返答に困るタイガ。

「どう思うって…何も思わないけど。」

心底から思っていることを言うタイガ。

タイガにとって、相手が人間だろうが『エルフ』だろうがどうでもいいことである。

「ホントに？」

「うん。」

そう言っていると、タイガは残りの紅茶を飲み干した。

それを見てウイズは

「どうするタイガくん。」

「なにが？」

「いや。紅茶をまだ飲むか飲まないのか。」

「え…っ」と。

正直タイガは、自室として用意された部屋に行っても特にやることなんてない。

やることなくそのまま食っちゃ寝みたいな行動をするよりもウイズと会話をしていたほうがいくらか暇つぶしになる。

「うん。じゃあお願いしようかな。」

「りょ〜かい じゃ、まってるね。」

ウイズはタイガのティ カップを台所まで持っていった。

……………。

なんだろう。この感覚は……………。

一秒でも早くこいつらのもとを離れたいという気持ちが徐々に薄れ始めている……。

なんだか、自分の思っているような場所ではなかった。てっきり自分はここで殺されるんだと思っていた。仲間にするとは口だけで……。そして自分を殺した後、邪魔な『ラグナエス』の人たちを殺すのだと。

けど、違っていた。

少なくとも、ルシアとウイズは自分に危害を加える気はないとわかる。

特にウイズはこうして僕と会話までしてくる。

『仲間』と僕を認識して……。

なら、僕はどうしたらいいんだろう。

『ラグナエス』の人たちは僕のことを『仲間』として受け入れてくれている。

けど、ルシアたちも僕のことを『仲間』として受け入れてくれる。

そして僕は今迷い始めている……。

ここに初めてきたときは『ラグナエス』に帰りたいと思っていた。

だけど、ここにいる人たちも心底から悪い人じゃないとウイズと会話していてわかった。

別段悪い人たちと戦う必要なんてあるのだろうか。

ルシアは「『ラグナエス』の人たちと自分たちの敵は同じかもしれない。」と言っていた。

なら、共に手を取り合って共通の敵を倒すことはできないのか。

……できれば戦いたくない。

「はいはい タイガくん 紅茶持つて来たよ……っ て、あれ  
れ？タイガくん、やけに変な顔になってるよ。」

「へ？」

ウィズに言葉をかけられ考え事を止めるタイガ。

よほど悩んでいるような顔をしていたのだろうかとウィズに言われ  
て思うタイガ。

だけどこの悩みは、とても大切なことだ。

人が死ぬか死なないかがかかっている悩みだ。

タイガは揺れる。

## 第62話　夢、ゆめ、ユメ

「んで、話つてのはなんなんだよ。」

それがラピスの第一声。

現在、ティレク、セルリア、ミラージュ、シャープ、ラピスはブリッジにいる。

その理由は、カイルが「話がある。すぐに来てくれ。」と艦内放送で呼んだからだ。

「もしかして、タイガのことか？」

ティレクの言葉に、カイルはこくりと頷く。

「そう。実はタイガの居場所と思われるような場所が特定されたんだ。場所は惑星『カムラン』。人が住んでいないはずの惑星なのに、なぜかレダで確認したところ生命反応があった。」

「だからと言って、それでタイガがいるかどうかは別だとアタシは思うけどねぇ。」

たしかに。人が住めそうにない場所にタイガがいるとは限らない。

「だけど、オレは行ってみる価値はあると思うんだ。せつかく見つけたんだしさ。みんなはどう思う？」

「どう思うも何も、可能性があるなら行ってみるべきだと思うわ。ね、みんな？」

ミラージュの言葉に、反論するものはいない。

「よし、決定ッ！『カムラン』に着いたらまたみんな呼ぶから、それまで自由にしておいてよ。」

そう言うカイルに、他の一同は従うことにしたのだった。

そこは荒野だった。

ただ、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面…。

血の臭い…。気分のいいものではない。

その血の発生源であるたくさんの兵士たちの死体がところどころに山積みになっていた。

……また、…この、ゆ、め……。

そんなところで、青い髪青年と銀色の髪の少女が互いに剣を交えていた。

……ああ、あのユメの…つづ、きか……。

青年と少女は互いの身を削りあう。

青年の腕に少女は己の持つ剣をかすらせ、青年は少女の頬の肉を裂く。

そんな戦いが続き、少女は青年の攻撃で吹き飛ばされて死体の山に埋もれるが、少女はその死体を足蹴にしてその場から力づくで退か

す。蹴つても退かすことのできない死体は自分の持つている剣で5体にバラして退かしやすくした後、再び雑に退かす。

周りに積み上げられている兵士の死体は2人にとってはもうただの『風景』なのだろうか。

少女の行動は、まるで小さい子供が小石を蹴って遊んでいるようにすら思えてしまう。

それを感情が無いような目で少女を見る青年。少女の行動が、さも当然のようにこの青年は思っているようだ。

「わざわざ障害物を退かしてくれて…感謝するよ。」

青年の口が開いた瞬間に言った言葉がそれだ。

……………なん、で。

何で僕が……………

こんな、

クルッタ、

ユメを、

みなきや、

いけないんだ…。

早く…



はやく…

ハヤク…

目覚める…

めざめる…

メザメロ…

僕、

ぼく、

ボク、

こんなの…

コンナノ...

Handwriting practice lines consisting of 18 vertical dotted lines, with the first 15 lines grouped by a short horizontal dotted line at the top.

.....

気持ち悪い

### 第63話 声

はあ… はあ… はあ…

タイガはベッドから起きると、まるで全力疾走でマラソンをしてきたかのように呼吸をしていた。  
着ていたシャツは冷や汗でびちょびちょ。  
手は汗で濡れていた。

最近、やけにあの夢を見る気がする……。

荒野だけど、灰色の地面ではなく赤く血で染められた地面で、リアル過ぎるくらいの血の臭い…。

それから、

たくさんの兵士たちの死体がところどころに山積み……。

そこまで回想して、タイガはそれを止めた。  
はつきりいつて気分がいいものでない。思い出すだけで吐き気を感じるような内容の夢だった。

「…ああ、たしかここって自分のために用意された部屋だっけ。」  
今気づいたようにタイガは呟く。

タイガはウイズの部屋を出るとまっすぐ自分に用意された部屋に戻って、そのまま何もすることが無いので眠ったのである。

（その結果がああ夢か…。）

はあ、と深いため息をひとつ。気が落ち込む。  
なんとなくタイガは窓から外を見る。夜だ。

さきほどまでの砂嵐がうそのように止んでいた。

どうやら『カムラン』の砂嵐は、夜には起きないようだ。

「…暇だし、外に出てみよっかな。」

沈んだ気持ちも元に戻したいし…と考えて、タイガは1人外に出てみることにした。

外ははっきり言うと「寒い」の一言。だが、タイガにとっては落ち着ける寒さだ。

タイガが現在住んでいる塔の辺りはすべて砂。砂砂漠である。

そんなところで、タイガは1人寝転んでいた。

寝て視界に入ってくるのは星の絨緞。

明かりが塔以外からはどこにもないので、はっきりと星が見える。

広大な宇宙。

そこには、

数え切れない数の星があり、

惑星があり、

命がある。

そして、

その命の数だけ、

喜びが存在する。

また、悲しみも……………。

「……………」

そんなことを思いながら、タイガは星空を見ていた。  
そして、自分でその通りだなあと試してみたりもしていた。

人間の母星『カムラン』。その母星を人間は捨てた。

母星を殺すほどまでに成長した技術。それを平然と人間は今現在も  
使い続けている。

おそらくそうしていられるのはたとえ自分の住んでいる惑星が滅ん  
でも「代わりの惑星があるから」だか思っているからであろう。

今はあるかもしれない。

だけど、形あるものすべて有限だ。無限など無い。

『何か』と競い合うように、文明は進化し続けている。

その『何か』とは、恐怖、不安と言った類のものかもしれないけど、  
そんなものは僕にはわからないことだ。

ルシアたちも、『何か』と戦おうとしている。

『ラグナエ ス』の人たちも、『何か』と戦っている。

……………なんだろう。僕はこの『何か』が全部違うものとは考えられ  
ない。

全部同じに思える……。

ドクンッ

突然、タイガの鼓動が高まった。  
それと同時に、凶悪なまでの頭痛がタイガを襲った。  
ハンマ　何かで力いっぱい殴られたような痛み。

……メザ、……口。

だ……れ……？

ザ……メ口……。

だ、……れ……なん……だ？

ワガ……キオ……メ

ザメ……口。

ダレか……キいて……るッ。

ボ……ハ、オマ……

ダ。

……？キこエ……ない。

ボクハ……、オマエ

……ダ。



知らないッ。……………シらな

ワガ…………キオ…………ク

「知らないっていつてるだろおツッ!!!!!!!!!!」  
大声で叫ぶと、タイガはその場で気を失った。  
砂砂漠に響く青年の声。  
聞いている者は、誰もいなかった。

青年以外は。

## 第64話　避けられないもの

僕は7年前、自分の家を出た。

家に居続けると、ホンモノの殺人鬼になりそうな気がして……………

いや、もうすでに殺人鬼だ……………

今でも疼く、その感覚……………

今までは近くに仲間がいたから、なんとかそれに耐えられていた。

ただ、今回は殺人鬼としてだけではない、何か別のものも表に出ようとしていた気が

「タイガくんッ！」

甲高い女性の声でタイガはうつすらとまぶたを開けた。

タイガが初めに見たのは、魔女ウイズの見下ろす顔だった。

なにやら心配そうな表情をしている。

「……………」

「よかったあ。目を覚ましたんだ。」

ウイズはそう言うのとタイガを見下ろすのを止め、ホッと一息つく。

タイガは自室のベッドにいた。

だけどタイガは、さきほどまで外にいたはず

「……………」　なんで、僕はここに？」

「タイガくん。私が外でちょっと気分転換しようとして出てみたら倒れてるからびっくりしたよ。」

「倒れて……………」

ああ、あれか。頭痛と同時に変な声が聞こえ始めたあの……。

僕は知っている。ときどき、昔の自分に戻りそうになり、声が聞こえることが。

他の誰でもない。自分の声が自分の頭で響く。

だけど、今回ののは少し違っていた。

それと一緒に、何か別の声も聞こえたような……………。

「タイガくん？」

考え込んでいるタイガを見て、ウィズは声をかける。

「え？…あ、ごめんね、ウィズ。なんだか迷惑かけちゃって……………」

「ああ、うん。私は別にかまわないけど……………」  
他に何か言いたそうなウィズ。

「僕なら大丈夫。僕にかまわないで自分のやりたいことをしてきなよ。」

「ああ、うん。それじゃあね。」

ウィズはそう言うタイガの部屋から退室した。

それからしばらくすると、今度はルシアがタイガの部屋に入ってきた。

「ルシア？どうしたの？」

「気絶していたようだね、タイガ。」

「まあね。」

事実なのだから否定はできないと思ったのか、タイガは単刀直入にかつごまかすような返答は避けた。

「それで、僕に何か用があつてここまできたんじゃないの？」

「まあん。キミにとっては、喜ぶべき状況か、それともそれとは逆か……。」

タイガは首をかしげる。そんなことを言われただけじゃ何か見当がつかなかった。

「……なんなの？それって。」

「……………」

ルシアは少し間をおいて、こう言った。

「『ラグナエス』が、惑星『カムラン』に近づいている。」  
「なッ。」

「おそらくキミを追つてだろうね。始めに言っておくけど、やつらが攻撃を仕掛けてきたらこちらでも全力でやつらを倒させてもらふよ。」

言いたいことだけ言つて、ルシアは退室した。

……………。

戦いは避けられないのか……………。

## 第65話　通信での会話

現在『ラグナエス』はタイガがいる塔より200メートルほど離れた場所に着陸している。

下手に近づきすぎると攻撃されるかもとカイルが思ったからだ。その意見にみんなも賛成している。

辺りは砂嵐でほとんど見えない。ときどき塔の影が見えるくらいだ。ちなみに主要メンバはブリッジにいる

「こんな状況じゃあ下手に外に出れねえな。」

。ボソリとぼやくラピス。敵の本拠地らしいものが目の前にあるのに、攻め込むことができないので少し苛立っていた。

「待つしかないねえ。それにまだ敵と決まったわけじゃないし。人が住んでいるかも疑わしいよ。」

そんなことをシャープが言い終わると同時に…

「艦長ッ！」

「ん？どうした？」

オペレタがカイルを呼ぶ。

「通信です。発信源はあの塔の中からです。」

「…………さて、相手は人違いか、それとも敵か…。」

そう言いながら、カイルはオペレタに通信をつなげるように指示する。

「モニタに映せ。」

「はい。」

通信をつなげモニタに映ったのは

「やあ。『ラグナエス』のみんな。遠方からはるばる来てくれてごころうさま。」

銀色の髪の少女。

「あ、ボクの名前はルシア。」

「わざわざ自己紹介ごころうさま。オレは『ラグナエス』艦長。」

カイル・クロドだ。」

「ふん。キミたち、タイガを追ってここまで来たんでしょ？」

「てことは。」

「うん。ここにタイガは居るよ。」

「タイガさんは無事なんですか？」

ルシアの言葉を聞いて、言葉を荒げながら質問するセルリア。

「安心しなよ。タイガはボクにとって大切な人だ。傷ひとつ付けてはいないよ。」

その言葉を聞いて、とりあえずホツと一息ついたセルリア。

「質問させてもらう。タイガをなぜ連れて行った？」

あくまでも普通に質問するカイル。相手に対する怒りを殺して…。

「さっきも言ったとおり、タイガはボクにとって大切な人だからさ。」

「

「どういう意味だ？もつと詳しく言ってくれないか？」

「長年からボクと同じ立場の人間だからさ。もつとも本人はすっかり忘れてしまっているようだけだね。」

「同じ立場の人間ってどういうことだ？」

「……………」

モニタ上に映るルシアは少し考えてからこう言った。

「単刀直入に言っと、ボクとタイガは『英雄』なのさ。」

「英雄？」

「理解できていないようだね。なら、説明してあげるよ。」

今から550年前、この惑星『カムラン』で『崩壊戦争』が終戦したことは知っているよね？」

その質問にカイルたちは頷く。

「その『崩壊戦争』の後、2人の英雄が現れた。」

「……………まさか。」

「そう。英雄ヴァインとルシア。その英雄ルシアとはボクのことさ。そして、キミたちだけに言うておくけど、タイガは英雄ヴァインの

生まれ変わりだ。」

「なッ」

カイルだけじゃなく、ブリッジにいた全員が驚く。当然だろう。

「で、でも歴史ではヴァインとルシアは相打ちになったって

」

「はつきり言えば、あれは嘘だ。」

おそろしいほどシンプルな答え。

「歴史改変さ。おそらくキミたちは学校の教科書とかで勉強したんだろうけど、歴史改変なんてざらにあるよ。それにこれは当時を生きていた本人が言っているんだ。うやむやな教科書に書かれているものより、当時を生きてきた本人に聞いたほうが確実な歴史だろう？」

「仮にそうだとしたら、ルシア。君はどうしてそんなに長く生きられる？」

「それはボクが『エルフ』だからさ。」

「『エルフ』って、あの……。」

「そう。ファンタジ小説や伝説や神話とかに登場する種族のことさ。キミたちの言いたいことはわかるよ。だ

けど事実さ。『エルフ』は存在する。」

.....。

しばらく静寂がブリッジを包み込む。

「質問は以上かい？」

「まだあるよ。英雄ヴァインの生まれ変わりがタイガなんだろう？ だったら、そのタイガに何の用があって連れて行ったんだ？」

「協力して欲しいからさ。」

「何に？」

「.....悪い言い方をすると、人殺しかな。」

.....。

どうせならもつと控えて言っただけ欲しいものだとかいるは思う。

「だけど、これはこの世界を存続させるために大切な試練さ。」

「どういうことだ？」

「言ってもわからないだろうからこれ以上は言わないさ。ただ、世界の存続にかかわることに、タイガ………いや、英雄ヴァインに協力してもらうのさ。」

「……………それで、肝心のタイガはそれを承諾しているのか？」

「まだ迷ってるね。けど、『NO』とは言っていないよ。」

「そうか……。なら、タイガを返してもらう。」

「……………。やっぱり、そう来ると思ってたよ。それじゃあ、キミたちは今夜に攻め込むんでしょ？なら、たつぷりと歓迎してあげるよ。」

ルシアはそう言つと、通信を切るのだった。



今夜、最後の戦いが始まる。

## 第66話〈今夜にも…〉

僕はどうしたらいいんだ。

ノ本能ノママニ。

このままじゃあ、『仲間』が…。

……。

だけど、僕が行っている『仲間』は、  
どちらの『仲間』のことを言っている  
のだろうか……………。

ヨ。

……さっきから変な声が聞こえる。

ダ。

自身ガ

止めてくれ。

ドウスルコトモナイ。己

本能ノママニ行動セヨ…

己ノ本能、『殺戮』ヲセ

敵モ味方モ関係ナク…。

オマエハ所詮『殺人鬼』

ソレハ、他ナラヌオマエ

知ッテイルコトダ。

僕はあそこを思い出したくない。

オマエノ『血』ガ

思い出シタクナクトモ、  
他人ノ血ヲ求メテイル。

…違う。そんなはずないッ。

ソナコトアルサ。  
サア、7年間抑エテキタ

『本能』ヲ解放セヨ。

したくない。僕はもう……………。

嫌わデがモき今お夜くニ

よハみ解が放えデるキガルよハいズダ。

……………。

解放スル気ニナツタカ？

嫌だ。

ツ  
!!

ダガ、先程モ言ツタヨウ

無駄ダ。才前ハ呪ワレシ

生わマがレきタおソくノ

よトみキがカえうる、オがマよエいハ『殺人鬼』ナンド。

「その言い方は止めてくれええッ!!!!!!」

自室の隅々にまで響き渡るほどのタイガの大声。

途中感情が高ぶりすぎて同じようなことをしたのだが、それ以上だった。

ぜえはあと、肩で息をするタイガ。

「また、あの声……………」

気がおかしくなりそうだった。

さっきのでも半狂乱状態だったのだから、これ以上こんなのが続くと本当に

嫌デモ今夜二八解放デキルハズダ。

あの言葉と同じになりそうだった。

さきほどまでタイガは1人ベッドに腰掛けていた。

そんなときに、あの声が聞こえたと言うわけだ。

けど、前もそうだったけど、声が2つ聞こえたように、タイガは思っていた。

ちょうど、声が重なってうまく聞き取れなかったが……………。

そんなとき、自室の部屋の扉がノックの後開いた。ルシアだ。

「…なんだい？今、気分が悪いんだ。」

「そうかい。だけど、さらに気分が悪くなるようなことを言わないといけないんだ。」

「……………なに？」

「今夜、『ラグナエス』のやつらとボクたちが戦うことになる。

以上だよ。キミはそのとき好きにしていいいよ。戦闘に乱入するの  
もよし。やつらのところへ帰るのもよし。ただ、そうした場合、ボ  
クたちがまた取り返すまでだけだ。」

ルシアはそう言うのと、部屋から出て行った。

嫌デモ今夜二八解放デキルハズダ。

……………。

本当にそうなりそうだ。

## 第67話 最後の戦いの幕開け

星空が見えるようになる。

辺りは月明かりと星の明かり、そして塔から漏れる光。

砂嵐は治まり、ひんやりとした空気が惑星『カムラン』を包み込んでいる。

夜だった。

『ラグナエ ス』から数人の人が現れる。

ティレク、セルリア、ミラ ジュ、シャ プ、ラピスの5人。

カイルは戦艦の見張りである。

「……………みなさん。タイガさんを連れ戻しましょう！」

「……………おお ツ……………」

セルリアの一言で、最後の戦いが幕を開けた。

「……………始まったね。」

応接間で、ティレクたちの行動を監視しているルシアがそう言った。  
「あんな人たちにタイガくんは渡さないんだからねえ」  
その傍らにはルシアの親友と呼べる存在、ウイズがいた。  
その他の者たちはすでに自分たちの持ち場に行っている。  
「当たり前さ。タイガは渡さない。英雄ヴァインの生まれ変わりなんだからね。記憶もあの様子じゃ戻っていないようだし、仮に戻ったとしたらタイガはこちらに加担するだろうね。これから本当の戦いが始まることを思い出せば……………」

塔内部。ひたすらに螺旋階段を上るティレクたち。  
ちなみに塔に侵入してからすでに10分ほど経過しているが、敵という敵には全くあつていなかった。  
そして、ようやくひとつの部屋に到着する。戦闘するには十分すぎるくらい広い部屋に。  
その部屋の中心に、1人の男がこちらを見据えていた。



「!!」

シャ プはその男を見て驚く。いや、その男に面識があるものは全員驚いた。

「来たか。」

「ジ クフリ ト……………」

蒼い長髪をし、腰には長剣をぶら下げている男。そう、傭兵ジ クフリ ト。2つ名を『冷氷のジ ク』。

「なんでアンタがここに？」

と、シャ プ。目付きは鋭い。殺気を感じるほどだ。

「依頼だ。」

たったそれだけ…だが、ジ クフリ トの職業は傭兵だから納得できた。

「アンタ。こんなやつらの加担するなんて、よっぽど性根が腐ったんだねえ。」

「おまえと別の道を歩んでから数年経っているんだ。いくらでも性根なんぞ変わるだろう。」

「アンタの場合。腐って変わってるけどね。数年の年月は、人を腐らせることができるって、アンタを見てよくわかったよ。」

それだけジ クフリ トに言っと、ティレクたちに振り向き、こう言った。

「アンタたちは先へいきな。こいつはアタシが相手をするからさ。」

シャ プの気持ちに揺らぎは無かった。本気だということがわかる。「わかった。だけどシャ プ、俺様たちとタイガを悲しませるようなことにはなるなよ。」

「ああ。言われなくてもね。」

その返答に満足したあと、ティレクたちは先へと行った。

「…さて、はじめようか。ジ ク。」

「そうだな。邪魔はいなくなったしな。」

互いにそれぞれの剣を構える。そして、互いに本気で戦う気である。言い換えれば、互いに互いを殺す気で。

## 第68話 それぞれの戦い

ティレクたちは再び、螺旋階段を上っていく。

敵は今のところ、さきほどのジクフリトだけ。

だが、気は抜けない。

そして、再び先程のような大きな広い部屋にたどり着いた。

そこにも敵が1人。全身鎧の男が…。

どうやら、1つの部屋に1人敵が居るようだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！ようやく到着かああああああああああああ！！！！！！！！」

……第一印象。むさい。

むさい男が叫んでいるのでなおさらだ。

「……………まったく、おれの相手はこんなむさいのかあ。」

ぼやきながら前に歩み出るラピス。

そして、自分の背をティレクたちに向けながらこう言う。

「ここはおれに任せな。後で絶対追いついてやっからよお！」

「ああ、頼む。」

ティレクのその言葉を聞いて、なぜかずっとけるラピス。

「……………少しくらい、止めるような声をかけて欲しかったな。」

「ラピスはこんなやつに負けるほど弱くは無いだろ？」

ティレクの言葉を聞いて、ラピスははっとさせられる。

こいつは自分が勝つつて信じてくれているんだ、と。

「……………と…ぜんだろ？さ、いったいたあ！」

ラピスにそう言われ、ティレクたちはむさい男…オガナイトの後ろにある螺旋階段の入り口へと向かった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！自らを犠牲にして、仲間を先に進めるとは、さすがは俺のライバルだああああああああああああああああああッッ！！！！！！！！」

「だれがおめえのライバルだ。おれはなあ、おまえみたいなむさいやつは嫌いなんだよッ！」

「来たか。」

3つ目の大きな部屋。そこにも敵が1人いた。冷たい目でこちらを睨みつけている。

「ここはおまえが相手か？」

「ああ。死にたいやつは、かかってくるがいい。」  
「淡々と言う『疾風のジン』。」

「こいつはあたしが相手をするわ。」  
「ミラ ジュ……。」

どこか心配そうな声でミラ ジュを呼ぶティレク。

「なぐにあんたがあたしの心配してんのよ、ティレク。」  
「……………はっ。」

急にあきれたような顔になるティレク。

さきほどまでの心配そうな態度がうそのようだ。

「な、なにがおかしいのよッ!!」

「なんで俺様がおまえの心配しなきゃなんねんだよ。おまえがこんなところでくたばっちゃったら、タイガに言い訳すんのが面倒になっちゃうからだよ。」

「あつそッ! いらないお世話よッ!! あんたなんか心配されなくつてもねえ、あたしはそんなに弱くは無いわよッ!! だからさっさと先に行つてッ!!」

「はいはい。いくぞ、みんな。」

ティレクたち            と言つても残りは3人。

とにかくティレクたちは次の螺旋階段を進んだ。

「            オレ相手に1人とはな。どうやら本当に死にたいようだな。」

「死ぬのはあんたよ。」

「やあ、やつときたね。待ちくたびれてたよ。」  
そこには、槍を玩具を扱うかのように振り回している槍使い、通称

『人斬りセシル』がいた。

セシルを見るや否や、ティレクはセルリアにこう言った。

「ここは俺様に任せとけ。」

「ティレクさん……………」

「残りはおまえ1人で先を行け。」

「ですけど　　ッ！！」

「セルリア。おまえは絶対にタイガに会わないといけないんだ。この場にいる…………いや、『仲間』の中のだれよりもな。」

何かを言おうとしたセルリアの言葉をさえぎり、そう言葉を述べるティレク。

「　　わかりました。ティレクさん、死なないで下さいね。」

「当たり前だ。タイガのバカには、俺様のような親友がついてなきやいけねえからな。」

満足したのか、セルリアは先を行く。

「　　へえ。ティレクつか言ったっけ？君、タイガの親友なの？」

「まあな。」

そう返答しながら、自分の得物を構えるティレク。

「親友だから、あいつを最後まで見届けねえといけねえんだ。あいつの良き理解者としてもな。」

「ふん。　　でもさ。残念だけどその願いはかないそうに無いよ。なぜならぼくが相手なんだから。この『人斬りセシル』がね。」

「だからどうした？相手が人斬りだろうがなんだろうが、俺様の壁になるやつには容赦はしない。」

## 第69話『死』の恐怖

「はああああッ!!」

シャ プとジ クフリ ト、2人の声が重なる。

そして同時に剣の刃と刃が交じり合うときに響く金属音。

そのまま力で押し合う。

「こっのッ!」

「……………」

うなるシャ プ。一方、沈黙したままでうなり声ひとつ出さないジ クフリ ト。

沈黙でシャ プにプレッシャ を与えているようにも思えるだけではなく、おまえと私の実力はこれほどに差があるのだ。と言っているようだった。

そして力勝負は徐々に結果が見え始める。

シャープが押されていた。

単純に言えば腕力である。ましてやシャ プは女性。

鍛えも男性よりは筋力の発達がやや遅いのが仇となっていた。

そして、ジ クフリ トは剣を大きく振るうと、シャ プはの拍子で体勢が崩れてしまう。

やばい…と思ったときにはすでに手遅れだった。

ジ クフリ トが情け容赦なしにシャ プをちょうど胸部と腹部の境目を真横に斬りつけた。

「ッッ!!」

声にならない悲鳴を上げるシャ プ。

そして左手で斬られた部分を押さえるシャ プ。だが、そんなものでは血は止まらない。

蛇口をひねると水が出るように、斬られた部分から血が流れ出している。

左手も血で染まる。短い時間のうちに

。

かろうじて心臓という人体のエンジンとも言えるモノにあ傷ひとつ付かなかった。

わざと外したのか。

シャ プにはすぐにわかった。

相手を『殺す』気で戦っているやつが、一番手っ取り早く相手を『殺せる』心臓を狙わなかったのだ。

心臓じゃなかったら首筋を狙うだろうが、ジ クフリ トは狙う気はないと気配でシャ プにはわかった。

「アンタ、アタシを『殺す』気で戦ってるんじゃないのかい？」

「ああ。そうだとも。」

「だったらなんで急所を狙わない？」

「『死』の恐怖を、おまえは味わうべきだ。」

なるほど。

ついそう思ってしまうシャ プ。

ようするに、急所を狙えば相手はほぼ一撃で『殺せる』が、その代わりに相手に『死』の恐怖を体感させることができない。なにせ一瞬で相手を『殺せる』のだから……………。

そうではなくジ クフリ トは、相手を痛めつけるだけ痛めつけて、しだいに近づいてくる『死』の恐怖を体感させた後、『殺す』気でいるのだ。

ふ。

1人シャ プは口元を緩ませる。それは決して、自虐的な笑みではなかった。

むしろ逆だ。相手をあざけ笑っているのだ。

そして傷口を押さえるのを止めて、ジ クフリ トと真正面から向き合う。

『死』の恐怖を味わうべきだと？……ふざけるなよ。

アタシはもう飽きてんだよ。『死』の境界線に行くのはよ。

モノホンの戦争でアタシは戦ったんだ。『死』の恐怖なんてそのときに味わったし、なによりもう飽きてんだよ。

アタシはもう飽きたから、今度はおまえに体感させてやるよ。

一度も『死』の恐怖を味わったことのない……

アタシの戦いの友……

ジクフリト……………。

少しばかり、ジクフリトは背筋が凍ったような感覚を覚える。

殺気だった。それも、さきほどまでの殺気とは比べ物にならないほどの……。

目の前には1人の戦友、シャプ。

「ジク。」

「なんだ？」

「『死』の恐怖を体感させてやるよ。」

刹那の間だった。ジクフリトの視界が赤く染まる。

赤く、紅く、あかく、アカク……………。

その紅いものからは鉄の臭い。なにが起きたかジクフリトにはわかるまい。

自分の身体がズタズタに、紙がはさみで切られるようにズタズタに……………。

そのまま仰向けに倒れるジクフリト。



ふ。

今度はジ　クフリ　トが笑みを浮かべる。

『死』の恐怖を体感させてやると言ったわりには、できなかったなあ。あまりにも一瞬で。

ジ　クフリ　トはまぶたを閉じる。

それが、最期にジ　クフリ　トの思ったことだった。

## 第70話 アカイフンスイ

こちらはラピスとオ ガナイト。当然ながら、戦いは始まっていた。「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお おおおツツ！！！！！やるなああああああああああああああ ツツ！！！！！さすが俺のライバルだあああああああああああああああああツツ！！！！！！」

いちいち大声で叫びまくるオ ガナイト。獣の咆哮と思われるも仕方がないくらいだ。

そしてラピスを真つ二つにしようと大剣を振り回す。

はたから見ればオ ガナイト優勢。ラピスはひたすらに相手の攻撃を避けるだけ。

だが……………

いけるな。

思わずそう思ってしまうラピス。

なぜならオ ガナイトの攻撃方法は、大剣をとにかく振るって相手を一撃で仕留めるもの。

ただ、その代わりに大剣を振り回すときに大振りしなければならないので攻撃前後の隙が大きい。

拳句に攻撃方法がほとんどそれしかないと言ってもよい。

それに対してラピスの攻撃方法は、一撃必殺ではないが小回りが利くうえ、隙がほとんどない。

それに盗賊として鍛え上げた足の速さやアクロバティックな動きがあるのも、オ ガナイトの攻撃は非常に避けやすい。

つまり、ラピスにとってオ ガナイトのような力で押してくるよう



## 第71話　対面

セルリアがひたすら螺旋階段を上ると、ようやく階段の出口にたどり着いた。

階段が終わった先には大きな長い通路が続いていた。

床には赤い絨緞が敷かれており、その先には大きな扉がある。

この先に、タイガさんが…。

セルリアは1人、大扉に向かって歩み出る。

とにかく絨緞にしたがって進む。ところどころで分かれ道のようなところがあるが、セルリアはまっすぐ先にある大扉を目指す。

自分はどうなるかわからない。

ただ、返事をしなくちゃいけない……。

そして会いたい

やがて大扉の前までたどり着いた。

開けばもう後戻りまでできないだろう。

いや、もうすでにここまで来てしまったのだから後戻りはできない。意を決してセルリアは大扉を開けた

「驚いたなあ。まさか1人でここに来るなんて。」

「ホントホント。さすがの私もビックリ仰天って感じだよ。」

そこには2人の少女がいた。

その2人と真正面に向かい合うセルリア。

「ルシアさん。それと……。」

セルリアは魔女の少女を見る。

「あ、私？私はウイズ。魔女だよ。」

視線に気がつき、ウイズは自己紹介をする。

「単刀直入に言います。タイガさんをかえしてください。」

「通信でもボクは言っただけど、それは無理だね。ヴァインは……いや、キミたちの言い方にあわせようか。タイガはボクの大切な人だからえすわけにはいかない。」

「たしかにタイガさんは確かにヴァインさんだったかもしれませんがッ！ですが、今はヴァインさんではなくタイガさんなんですッ！生まれ変わって……タイガさんは英雄ではなく……。」

言葉が詰まる。それ以上は大声で言えない。いや、人前ではなかな

か言えないことだった。

「『なく……』　　なんだい？」

問うルシア。だけど、セルリアは言えなかった。

なぜなら、一番初めに言わなければならぬ相手にすら、言っていない言葉なのだから

だから、セルリアはだんまりしてしまう。

「あれ？急に黙ってしまったよ？ルシアちゃん。」

「　　乙女の悩みだよ。」

セルリアには聞こえないように、ウイズの耳元でそう囁くルシア。言われてピンときたのか、ウイズは「あゝ、なるほどねえ。」みたいな顔をしている。

「そっかゝ。たしかにそれは私たちには言いづらいかもね。」

「ウイズ。」

「はい。これ以上は言いません。」

意地悪な笑みを浮かばせながらセルリアにそう言うウイズを黙らせるルシア。

以後、沈黙が続く

第72話　オマエハボク、ボクハオマエ

素直ニナレ。楽ニナルゾ。

だからあのときだつて  
嫌だつて言つたじゃないか。  
これ以上僕を惑わすな。

『惑わすな』？ソレハツ

マリ、迷ッテイルト言ウコトカ。

……………うるさい。

オマエハ迷ッテイルンダ。

『今』ノママデイルカ、

『殺人鬼』デアル『昔』

ニモドルカ…………。

違う。

違ワナイ。ボクハオマエ

ダ。オマエガボクヲ否定ス

ルトイウコトハ、自分自

身ノ存在ヲ否定スルコトニ

ツナガルンダ。迷ウコト

ハナイ。少シデモ『昔』ニモドリタイト思ッテイルノナラ、モドレ  
バイイ。

本能ノママニ行動セヨ。

.....。  
嫌だ。

ワリオマエ自身が壊レルダケダ。

どうして僕が壊れるのさ。

マエハモドリタイト思ッテ

ノ身体ガ我慢シテイルノダ。

オマエハ救ワレルゾ。

テレバ、後ハボクガヒキウケヨウ。

...

.....。

ナラバ、ボクニ任せロ。

君に任せれば、  
僕は救われるのか？

分ノ身体ガ.....。

否定ヲスルノカ。ソノカ

我慢シテイルカラダ。オ

イナクトモ、オマエ自身

モドルガイイ。モドレバ

善人トシテノ生き方ヲ捨

オマエノ身体ヲ.....

我慢シテ疲レタダロウ？

アア、救ワレルトモ。自

昔ノヨウニ、人ヲ殺シテ



殺シテ殺シマクツテ、自ラ

鬼』トシテノ欲望ヲ…。

殺人鬼』トシテノ欲望ヲ。

ノ欲望ヲ満タセ。『殺人

目覚めよ。記憶……。

サア、欲望ヲ満タセ。』

目覚めよ。記憶……。

欲望ヲ満タセ。

記憶よ目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。

満タセ。

目覚めよ。満タセ。

疲れたなあ。ホントに…。

ドウスル？

疲れたって、  
言ってるじゃないか。

ソウカ……………。

### 第73話 その人登場

「それで、ここまで来たってことは、それなりの覚悟はできているんだよね。」

しばらくの沈黙の後、ルシアがセルリアに問う。

「あなたたちと戦うってことですか？」

「まあ、そんなところかな。キミがタイガを取り戻したいって言うんなら、それくらいしか方法は無いけど。」

戦い。最悪のパターンだった。

もしそうならば、セルリアにははっきりって勝ち目は無い。

セルリアの武器は弓矢。弓矢というものは遠距離から前衛を補佐する……はつきり言って護衛的な役割になるものだ。

今、前衛はいない。なにより、セルリア1人で戦わないといけない。仮にそれをなしとしても、2人は戦いのプロ的存在。

勝ち目はゼロに等しい。絶望的だ。

「んで、どうする？ 私たちに勝負を挑む？」

「挑みます。もとより、私は戦いを覚悟でここまで来たんです。」

勝ち目はゼロに等しいしれない。けど、ゼロではない。

0、000000001%でも勝算があるかもしれない。なら、セルリアはそれに賭けた。

「そうかい。なら、キミの望みどおり戦ってあげるよ。」

「せめて痛みはほとんどなしであの世に送ってあげるよ。1人で私たちに戦いを挑むからね。」

セルリアは手始めに魔力で矢を生成して相手を射る準備をする。

ルシアとウィズはまるで『一度だけチャンスをあげよう』とばかりにまったく攻撃をしてこようとはしない。

なら、そのチャンスをものにしよう。

セルリアは弦を千切れるかと思えるくらい強く引き、そしてルシア

めがけて射る。

音速ともおもえるほどの疾さでルシアの心臓部分めがけて飛んでいく矢。

だが空しくもルシアに当たる直前で矢がはじかれてしまう。結界だ。「残念だったね。でも、なかなかの攻撃だったよ。」

ルシアは指をパチンと鳴らす。するとセルリアめがけて一筋の雷が落とされる。

魔術『ライトニング』だった。

どうやらルシアもウィズと同じく、下級魔術程度なら無詠唱で発動できるようだ。

「ッ！」

一瞬だったので何がおきたかわからないセルリア。

だが、倒れて少し時間が経てば自分は攻撃されたとわかった。

わかったところで何もできない。

雷を受けたせいで、身体中の筋肉が硬直し、思うように動けなくなっていたからだ。

ものの数十秒。1分はおそらくかかっていない。それだけで、セルリアは自分の負けを確信させられた。

そんなとき……

バン

と、景気が良すぎるくらいの勢いで大扉が開いた。そこには1人の青年の姿。

それは、セルリアが最も会いたかった人物だった。

タイガ・ウナバラその人の登場である。

## 第74話 殺人鬼

「タイガ……さん。」

倒れた身体を少し起こしてセルリアが言った言葉だ。

「タイガ、どうしたんだい？」

ルシアがタイガに問う。

「獲物がいっぱいだ。」

その言葉を聞いて、ルシアはタイガに身構える。腰にぶら下げていた鞘から剣を抜いて……。

それと同時に、タイガはルシアに斬りつける。

ほぼ一瞬。さきほどまで大扉の前にいた青年が、一足飛びでルシアの目の前まで迫ったのだ。

かろうじて受け止めたルシア。そのまま力比べになる。

「ど……どうしたのさ。……タイガ。」

「どうもしない。ただ、欲求を満たそうと思ったただけだ。」

そう言くと、タイガはルシアを弾き飛ばす。

「っッ！」

大きく飛ばされるルシア。飛ばされた後、再び構えるルシア。

「欲求って……。」

「僕の……タイガ・ウナバラの『殺人鬼』としての欲求さ。550年来に会うルシアさん、わかるかい？」

「……タイガ……キミ、記憶が戻ったのか？」

「まあね。『殺人鬼』としての欲求を満たそうと思ったら、記憶が戻ったみたいだ。一種のショック療法かな？善人としてタイガ・ウナバラは生きたかったみたいけど、なんだかんだ言っても『殺人鬼』の家庭で生まれてきた人間はやっぱり『殺人鬼』なんだって思っ  
てね。善人になるのをやめたのさ。」

「……………」

久しぶりに出会ったタイガ。だが、セルリアの知っているタイガと

は違いすぎていた。

目の前にいるのは、ひたすらに血に飢え、生き物を殺すことを自らの糧としている『殺人鬼』。タイガのうちに秘めていた『殺人鬼』としての人格がよみがえっているもの……………。

だが、セルリアの知っているタイガは、こんな血生臭い人間ではない。

誰にも優しく、真面目で、必死に仲間を守ろうとする人間…………。

それはセルリアから見て決して偽善ではなかった。立派に善人。

「タイガッ！！ いや、ヴァインツ！！ 記憶が戻ったのなら知っているだろ？ ボクたちが殺し合いをする暇はないってことをッ！！」

「『崩壊戦争』よりも大きな戦いが近い将来始まるってやつだろ？

いいじゃない。たくさんの人が死ぬなんて。人が死ぬ分だけ僕は快感を覚えることができるしね。たくさん人の鮮血、散らばる肉片、そして死に際に人間が上げる断末魔が戦場に響き渡る……………最高じゃないか。人間が理性を捨て、ライオンやトラのように野生の本能のままに殺し合うなんて。」

セルリアは信じなくなかった。

タイガの口から、そんな殺し合いが最高だなんて発言を聞く羽目になるなんて。

「ヴァイン。…本気で言ってるのかい？」

「当然だ。細かいことを言うって僕の人格はヴァインじゃないけどね。」

その言葉を聞くと、ルシアはウイズを呼び、すぐ傍まで来させる。

「なんですか？ ルシアちゃん。」

「ウイズ。一時この場からあのセルリアという人と一緒に逃げてくれないか？」

「ルシアちゃんは？」

「時間稼ぎをする。こいつは危険だ。」

そう言うルシアはタイガを睨む。

だがタイガはその睨みを何とも思っていないようだ。

「暇があったら、下で戦っている人たちを呼んできてくれると助かる。」

「うん。わかったよ。……………死なないでね。」

「簡単には死なないよ。」

それを聞いて満足したのか、ウィズはこくりと頷くとセルリアの傍まで駆け寄る。

セルリアは放心状態で床に座りきっていた。

「セルリアちゃん。一時戦場離脱だよ。」

それだけ言つとウィズはセルリアの有無も聞かずに大広間から出て行った。

「獲物が減っちゃったな。」

「大丈夫さ。ボクはキミの言う得物100人分にはなるはずだからさ。」

「そうか。それじゃあ、殺し合おう。」

## 第75話　狂っているけど狂っていない

「そうか。それじゃあ、殺し合おう。」

瞬間、タイガの姿がルシアの視界内から消える。

すると瞬時に身体を横に移動させるルシア。すると、スパンと音が聞こえた。

（疾い。）

早く動いたのにもかかわらず、ルシアは自分の髪をタイガに斬られる。

正直、タイガの足の疾さは異常なほどである。

もともとタイガは足が速いほうだったが、速いというレベルを超えて疾いくらいのレベルだった。

即座にタイガとの距離を離すルシア。だが、距離を離そうとしているルシアにすさまじい疾さで距離をつめるタイガ。

次の瞬間

カン　キン　ギン　カキンッ　キンッ……………

互いに剣術の撃ち合いになった。

互いに揺れる髪を散らしあがらも、一撃を己の肉体に入れさせようとはしない。

入れさせたら最後、完膚なきまでに…………おそらく死ぬまで、いや死んでも殺し続けるだろう。

「ぐ…………ッ！」

一撃を入れさせはしてないが、徐々にルシアが押され始めていた。英雄すらも梃子搦らすほどの剣術と戦闘力。

いや、それを言うならタイガ自身も元英雄なんだけど。



しかし、ルシアは英雄のときのままの身体だが、タイガは生まれ変わって全く違う身体……それもさきほどまで記憶を忘れていた人間がここまでルシアを梃子摺らしていることがはつきりいつてすごいことである。

ルシアはオ　ガナイト、ジン、セシル、ウィズと強者を従えている人物。そのことからしても、ルシアの戦闘力はすさまじいだろうと予想ができることからもうすごいことだとわかるだろう。

……しばらく剣術の打ち合いをするとタイガは急にルシアと距離を置く。

さきほどまで休む間もなく剣術を繰り返していた彼がだ。

おまけにタイガは息１つきらしてなかった。

一方ルシアはと言うと、女性にしてはさきほどの戦いで髪は乱れ、息を肩でせえはあといていた。それに汗。剣術を打ち続けた上に、動き回ったせいでもあるだろうが、冷や汗もかいていた。

はつきり言って強すぎるのだ。

「どうした？もう疲れたのか？」

「別に……。」

本当の答えは無論疲れている、だ。

だが、下手に弱みを見せると確実に仕留めに来るだろう。

「そうかい。……それにしても楽しいなあ。殺し合うのって。」

「……………」

昔のタイガからは想像できない発言だ。

「楽しいだろ？生と死の境の遊びって感じで。勝ったほうが生き、

負けたほうが死ぬ。最高だな。これほどわかりやすいル　ルの遊び

はないな。ホントに。」

「狂ってるね。タイガ。」

「そうだな。僕は狂ってるかもしれない。だけど、これが人の本来の姿でもあるんじゃないのか？」

「どういう意味さ。」

「簡単なこと。人間は生きるために植物を摘み取り、魚や動

物を自らのエサとすべく肉塊にする。なぜそうするのかという理由はただひとつ。生きるためだ。生きるために、植物

と動物を殺す。僕はただ、その標的を人間に変えているだけのことだ。そして、その理由も生きるため。なぜなら僕は人殺しをする職業をする家庭のもとに生まれてきたからだ。」

「……………」

「『崩壊戦争』のときも同じだ。自分という生き物が生きるために戦争で他人を殺す。違うかい？」

「違わなかった。だからルシアは反論はできなかった。」

「だから僕は、正しくは『狂っているけど狂っていない』。」

「まあ、そんな感じになるな。」

「……………」

「さて、話は終わりだ。再び殺し合おうか。生と死の境の遊びの続きだ。」

## 第76話　槍対槍

ウィズはセルリアを引き連れてひたすら螺旋階段を下りていく。

セルリアはと言うと、未だにタイガの変貌ぶりが信じられないのか放心状態である。

だが、ウィズにはかまってあげる暇が無かった。とにかく1秒でも早く仲間を引き連れてルシアを援護する必要があったからだ。

何とか間に合わせようと螺旋階段を下り続けるウィズ。      放心状態のセルリアと一緒に。

「いやあ。やるねえ。テイレク。」

「おまえもな。『人斬りセル』。」

お互いの得物である槍が、何度も何度も交差する。

そのたびに火花が飛ぶ。決定的と言えそうな一撃は2人とも出していない。

ただ、互いに切り傷が身体中に付けられていた。

服を裂き、服の先にある肉を裂き、      骨まではいかないような傷。

そのような傷が、互いの頬、肩、手首、胸部、腹部、脚……………

場所という場所にそれはあった。

そこから生きているモノの証である血が流れ出ている。

赤い色から紅い色まで…………… いろんなアカ色の血が……………。

「てやッ！」

セシルがティレクに向かって鋭い突きを放つ。狙うは腹部。最も狙いやすい場所だ。

そして、狙いやすいわりには致命傷になりかねない場所でもある。

それをティレクは瞬時に見切り、とつさに突きの軌道上から身体を逸らせる。

だが、それをセシルは突きから薙ぎ払いに攻撃方法を変える。

「なッ。」

気づいたときにはすでに遅い。

ティレクの腹部に見事な『一』の字が描かれた。

そこから一気に鮮血が流れ出る。

「……………ぐ……………うう……………」

激痛にその場に跪くティレク。

「どう？ わかったかいティレク。君がいかに優れた槍使いだとしてもだ。この僕に勝てるわけが無いのさ。僕は『人斬りセシル』。人を斬るのが専門なんだからね、僕は。」

セシルの槍の刃先がティレクに向けられ、とどめをさそうとするそんなときだった。

「ちよつとまつたああああああああああッ！！！」

血生臭い戦場と化した場所に、（ばかりでかい）女性の声が響き渡る。

その言葉に耳を貸したのか、セシルはティレクにとどめをさそうとするのをやめた。

「ウイズかい？」

「そうそう セシル君だいせいかい！」

あいかわらずテンションが明るいウイズ。戦場には似合わない。

そして、その傍らにはセルリア。

「！！おまえ、セルリアに何をした！！！」



ピクリともしてない。まるで人形のようにだ。

そんなテロップが出てきてもおかしくない状態。

それを見てウィズはセルリアにこう言う。

「セルリアちゃん。仲間との別れはいつかは訪れるんだよ。」

「ごまかさないでくださいッッ!!」

とりあえずこの後、ウィズはテレクに治癒魔術をし、かろうじて命をとどめさせることに成功したのだった。

## 第77話 格闘戦

しばらく経って、ティレクが復活しウィズたちはさらに螺旋階段を下りようとしているとき

ガン、ギン、…キン、……………ギンッ

鈍い金属音が響く。互いの得物がぶつかり合うたびに打撃音とともに。  
ミラ ジュとジンである。

ジンの武器は鋼鉄でできたガントレット。それに魔力や気を宿らせ、通常の威力より数倍から数十倍に格闘技の威力を引き上げていた。  
一方ミラ ジュの武器は握り懐剣と呼ばれるものである。

古武器の一つで鉄拳の先端に鉈刃などの肉厚の刃をつけた物である。その威力は人によっては腕の一本は正拳ですっ飛ばすほど。また、頭を割ることも可能というほどである。

おまけにミラ ジュは魔力こそ使えないが気は使えるのでジンと同じく技の威力を数倍から数十倍に引き上げることができるので、まさに攻撃力は折り紙つきである。

握り懐剣の威力の大きさと気での能力アップ。まさに鬼に金棒である。

「てやあぁッ!!」

ジンの姿を捉えるとミラ ジュは一気に距離をつめ、するどい鉄拳を飛ばす。

握り懐剣の刃が風を切ることで聞こえる風切音。

ジンはそれを瞬時に避ける。疾さはタイガとほぼ互角とも言える疾さだ。

そのままやや棒立ち気味のミラ ジュとの距離を狭め、鋭い蹴りを放つ。

当たったかと思われたが、ミラ ジュはそれを紙一重で避ける。そのかわり脇腹部分にかすったため、そこから鮮血が噴き出す。しかし、それだけではミラ ジュはひるまない。

いや、ひるむような姿を見せたらジンは確実にとどめをさしにかかってくるだろう。 と、そんな考えがあつたからだ。

痛くても死ぬよりはずっとましだ、と自分に言い聞かせるミラ ジュ。

「……………思ったよりやるな、おまえ。」

攻撃を中断し、ジンが自分の口を開く。

あいかわらず淡々とした口調。

「当然じゃない。あたしはこんなところで死ぬわけにはいかないのよ。もう一度あいつの顔を拝みにいくためにもね。」

あいつとは無論タイガのことだ。

「そうか。……………だがオレたちも後には退けない。実のところ、オレたちはおまえたちとこうやって戦ってられるほど暇ではないのだがな。」

「……………なによ、それ。それじゃああんた、あたしと仕方ないから戦っているってこと？」

「当然だ。」

腹が立つ。

そんな言葉が第一に思えた。

「……………いいわ。それじゃあもう一度はじめましょう。『仕方ない戦い』を。」

再び戦いが始まるうとしたとき、あの声が響いた。



「ちよつとまつたあああああああああああああああああああああああ  
ああツツツ！！！！！！」

キンと、部屋が響く。ミラ ジュとジンは堪らず耳を塞いだ。

「君たち戦いは中止中止ッ！緊急事態発生だよッ！！」

ウイズだ。

2人にとってはウイズが出てきたこと自体、緊急事態なのだがウイズは気にしてない様子。

「……………なんだ。」

いつもどおりの淡々とした口調……………なのだが、どこか苛立っているようなジン。

「じつはね

。」

ウイズはミラ ジュとジンに説明をする。

説明というのは無論タイガのことだ。

「タイガが……………。」

「信じられないかもしれませんがミラ ジュさん。ウイズさんの言った通りなんです。私も実際見てしまいましたし。」

そう言うセルリアの表情は、どこか悲しそうだった。

「それで、原因は？」

「原因は、俺様が知ってる。

おそらく衝動だな。」

「衝動ってなに？」

ティレクにミラ ジュが質問をする。

「そうか…。おまえたちにはまだ話してなかったつけ。少しばかり長い話になるが、それでもいいか？」

ミラ ジュ、ジン、ウイズ、セルリア、セシルはこくりと頷く。

相手のことを知ることは何より大事だと思ったからだろう。

それを確認して、ティレクはこう言った。

「  
タイガの家は、人殺しを仕事としていたんだ。  
」

## 第78話 衝動の理由

「タイガの家は、人殺しを仕事としていたんだ。」

.....。

一同の頭が真っ白になる。

理由は簡単だ。ティレクの言った言葉のせいだ。

「.....は、ははは.....。ちよつとあんた、冗談きついわよ。」  
と、ミラ ジュ。

ちなみに対ジン戦で受けた傷はウィズに癒してもらっていた。

同様にジンも癒してもらっている。

「冗談よりもタチの悪い現実はいくらでもあると俺様は思っけどな。」

それを聞くとミラ ジュは黙ってしまった。

たしかにそうだった。

ましてや今はそのタチの悪い現実が実際に起きているのだから.....

...

「.....ティレクさん。続けて下さい。」

「ああ、そうだな。タイガは人殺しの家庭で生まれ育つ

たやつだ。それは、長くからのやつの親友である俺様が一番よく知っている。ちなみに言う俺様たちの故郷はある小さな村なんだ。タイガは初めのころは俺様にいろいろと愚痴をこぼしていた。内容は『どうして他人を殺さないといけないのか?』って感じのものが大半だった。幼いころから.....俺様が知っている限りでは5歳くらいの時にはすでにあいつは剣を握っていたな。5歳の子供がだぞ? 竹刀とか木刀とか、そんなレベルじゃなくていきなり真剣を5歳の

子供が握っているんだぞ？

5歳から小学1年生になるま

では俺様はそれつきりタイガに俺様の親からも、タイガの親からも  
会わせてもらえなかった。」

.....。

「そしてあいつが小学1年生のとき、やっと俺様はタイ  
ガに会えた。だけど、正直あのときのあいつは俺様の知っているタイ  
ガじゃなかったな。一言で言えば、常に周りに殺気を漂わ  
せて、触れれば斬れる剣のようになっちまってやがった。変わっち  
まっていた。小学1年生のときですであいつは『殺人鬼』になっち  
まっていたんだよ。」

.....。

「それで意を決して俺様はあいつに聞いた。『俺様と出会わなかつ  
た間、何をしていたのか？』ってな。するとあいつは口  
元に笑みを浮かべながらこう答えた。

数人ほど人間を斬った。

.....正直俺様は信じられなかった。だけど、あのときのあいつを  
見れば本当の話だということが嫌でもわかった。『殺人鬼』になっ  
ていた。そのあとタイガのやつは、俺様に聞きたくも無い詳しい話を  
聞かせた。初の自分に与えられた仕事だって。仕事だから、人を  
殺したってな。」

.....。

「そしてあいつが10歳になったとき、俺様はタイガにこう尋ねた  
んだ。『他人を殺して楽しいか？』ってな。するとあいつは『楽し  
い。』と言ったんだ。そう言ったから俺様はさらにこう質問した。  
『殺しの対象が仲間であつてもか？』。するとタイガは考え  
たそぶりをしてから『確かめる。』って言ったんだ。」

……。  
「そしてその翌朝俺様はタイガに出会ったんだ。……普通じゃない出会いかな。タイガの衣服は血で染まっていたんだ。ただ、その血はタイガのものじゃなかった。当然ながら俺様は『どうしたんだ？』って声をかけるとタイガは『……楽しくなかった。』って言った。俺様はその意味が最初わからなかった。そしてそのあとタイガが『殺しの対象が仲間であつてもか？』ってティレクが質問したから試したけど、楽しくなかった。』って言ったとき、やっと意味がわかった。そのあと俺様はタイガの家に向かった。そこにあつたのは……家族の死体。無論、タイガのだ。」

……。  
「俺様は責任を感じた。どうしてあんな質問をしたんだろうってな。あんな質問をしていなかったら、タイガが自分の手で家族を殺すことなんて無かつただろうに。……その出来事があつてから、タイガは俺様が住んでいた村から追放された。ほとんど島流しみたいなものだ。10歳の子供を村を追放するなんて。それからのタイガの選択肢は、そのまま餓死するか、それとも『殺人鬼』として生きていくか、それしかないって俺様はわかった。」

あいつが1人のままでは。」

……。  
「そして俺様は、1人のままではその2つしか道がなくとも、手助けしてやれるやつが近くにいたらそれ以外に道が増えるかもしれないって思ったんだ。だからあいつが村を追放されるとき、俺様はあいつと共に行動をすることにした。あいつの可能性を広げるため、そしてあいつの居場所を見つけるためにな。」

……。  
「たぶん、今のタイガはそのときの感覚が衝動でよみがえってしまったんだと思う。追放されてしばらくの間はしょっちゅうそんなことがあつたけど、最近はなりを潜めていたからな。俺様自身、もう

大丈夫だとおもったんだけど、まだだったようだ。」

.....

「タイガは悪いやつじゃないんだ、ホントはな。ただ、生まれた場所が偶然人殺しの家庭で、そこでの生き方を叩き込まれただけだから、それを取り除けばタイガはホントにいいやつなんだよ。」

「わかってるよ。そんなことはさ。」

突然、部屋の入り口から声が聞こえたかと思うと、そこにはシャブとラピスの姿があった。

「2人とも、無事だったの？」  
と、ミラ ジュ。

「ああ。それより、さっきまでの話、全部聞かせてもらったよ。」

なにやらないへんなことになっているようだねえ。」

「ティレク。」

ラピスはティレクを呼ぶ。

「なんだ？」

「さっきからぐだぐだと言ってたけどな、おれたちは過去のタイガなんてどうでもいいんだよ。」

そのラピスの言葉に、一同は頷いた。もっともセシルとジンは頷かなかったが。

「おめえがどう言おうがな、おれたちが知って初めに会っているのは『殺人鬼』のタイガじゃなくて『善人』のタイガなんだからな。」

「そういうこと。                      わかったらさっさとタイガを助けないとね。」

と、シャ プ。

さきほどシャ プはタイガを『助ける』と言った。『倒す』ではなく。

それは純粹に『仲間』としてタイガを元に戻したいという気持ちの表れでもあった。

..... もう、タイガの居場所は見つかったていた。

宇宙を漂流し、救助されたそのときから。

あとは本人を元に戻すだけ。

「よし、タイガを助けに行くぞッ!」

「ッッッ おうッ!」

一同の声が重なる。しかし、やはりそのときもノリの悪いセシルとジンの声は重なっていなかった。

最後の戦いが始まる。

## 第79話　殺人鬼は……

部屋にはいたるところに紅い血が飛び散っていた。

部屋にある大きな白い石柱、白い壁、白い床……………

それはもう、純粋な白ではなく黒く、そして紅く変色していた。

……………吐き気を誘う鉄の臭い。人間を興奮させる紅い色。

以上が地獄絵図となろうとしている部屋の説明だ。

「てやッ！」

剣を一閃させるルシア。

だが、タイガは口元を緩めるとそれを容易くかわす。

ルシアは続けざまにタイガが逃げた方向に向かって風と同様の疾さの突き。

「ふ。」

それも気づかれていたのか横にずれてかわす。

そしてルシアの背後へと移動するタイガ。

「はああああああああッ！！！！！！」

ルシアは振り向きざまに剣を一閃する。

が、タイガの剣に受け止められてしまう。

どれだけ攻撃してもこの調子だった。

流れるように攻撃してもタイガはすべてをよんでいるかのように次から次へと、繰り出す技をすべて避ける。

「ぬるいな。」

一言タイガはそう発するとルシアの腹部に痛烈な蹴りを一撃。その



ままルシアは飛ばされた。

「がはッ。」

そのままつつ立っている石柱に直撃する。

直撃した振動で一時的に肺に酸素が行き届かなくなる。が、すぐに立て直す

ドゴッ

いや、立て直そうとしたがタイガがすかさずルシアの腹にもう一撃蹴りを入れる。

「ぐ……っ……。」

倒れこんだルシアの顔を驚掴みにするとそのままルシアの身体を持ち上げる。

「どうした？せっかく相手をしているのだ。あまり僕を失望させるな。」

「……っ……。」

「もつと本気を出せ。そして僕に一撃くらい入れてみせる。これでは戦いにすらなっていない。ただの虐殺になってしまうだろう？」

そう。戦いが始まってからルシアはタイガに一撃すら入れる事ができていなかった。

ルシア自身本気を出している。だが、タイガの……いや、殺人鬼の実力がそれをはるかに上回っているのだ。

「くだらん。」

そう言うとき殺人鬼はルシアを投げ捨てる。それこそ、ゴミを捨てるような乱雑さで……。

すでにルシアは虫の息。一撃受ければほぼ確実に殺されるだろう。

「せっかく楽しめると思ってたんだがなあ。英雄と謳われている者がこの程度の実力とは。」

ゆっくりと歩み寄る殺人鬼。一歩一歩歩むことにルシアの死期は近づいてくる。

「これで終わりだ。安心しろ。死なんて所詮一瞬の痛みだ。後は適当に生まれ変わって終わりだ。」  
振り上げられる殺人鬼の一撃

「まったく。邪魔をしてくれる。僕の最高の至福のときを。」

「邪魔はあまり好きじゃないんだが、仕方ないな。今回ばかりは。剣と槍。互いに交差する。」

扉の近くにはたくさん人間がいた。

その人間たちに、瀕死状態のルシアがまざっていた。

やがて、得物の交差が終わり殺人鬼はティレクと距離をとる。

「おや。誰かと思えばティレクじゃないか。久しぶりだねえ。」

もしかして、僕を助けに来てくれたの？」

「……………生憎だが俺様はおまえを助けに来たんじゃない。おま

えの中にいる、善人のタイガ・ウナバラを助けに来たんだ！」

「ああ……………僕の中の善人の僕ね。殺人鬼の僕じゃなくて……………」

「わかったなら、大人しくしてくれ。そして、俺様と旅をしたあの

善人のタイガに戻ってくれないか。」

「……………ティレク。」

「なんだ？」

「……………。」

しばらく黙り込む殺人鬼。そして……………

「殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。」

## 第80話 最終決戦

「殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。」

そう言ったタイガ 殺人鬼の表情は、何か悲しそうだった。

まるで、「殺人鬼の家庭でなんか、生まれなかったらよかった。」、

『どうして自分は、殺人鬼として育てられたんだ。』とでも言いたげな……。

そのときだった。

ティレクは瞬時に元いた位置から離れる。すると殺人鬼は一足飛びで斬りかかってきた。

「くそッ。」

ティレクを槍を構え直す。

カンカンキンカンキンキン……………

連続で刃同士が交差し合う。

互いに攻撃しては受け止められ、攻撃されては受け止める……。他の人たちは、その戦いにとってもじやないが入れなかった。

いや、入った時点で餌食になるだろう。

だから、残りの人たちはただただ見守るしかなかった。そして、祈るしかなかった。

タイガが元に戻るように、と。

「さすがだなあ、ティレク。」

「…………おまえは」

斬撃の打ち合いの隙をみて、ティレクは殺人鬼を槍を振るって吹っ飛ばすと

「…………どうして元に戻ってしまっただよっ！！変わるんじゃないかっただよっ！！」

「変わるだって？殺人鬼からか？」

「そうだ。おまえ、気づいてるんだろ？『殺人鬼から変わりたい』って自分の心情の変化がッ！」

そう言われると、殺人鬼は眉を微妙に動かす。

「気づいていたから、おまえは村を追放されてから5年間必死に変わろうとしたんじゃないかッ！！」  
おまえはそれを全部捨てるって言うのか？」

「……………くせに」

小さすぎてよく聞こえない声。それはタイガの身体を借りた殺人鬼の口から出ていた。

「何もわからないくせに勝手なこと言うなッッ！！！！」

あまりに大きな声。あまりの大きさのあまり、部屋中に響き渡る。

「おまえにわかるか？ティレク。殺人鬼から必死に変わろうとしても、その衝動が時々襲ってくる辛さを！！他人事だからそんなことが言えるんじゃないのか？」

「そんなことないッ！！俺様はちゃんとおまえが辛いことを知っていたッ！だから…………俺様はおまえと一緒に村を出たんじゃないかおまえ1人だと辛いから、俺様が少しでもその辛さを和らげようと思っ……………」

「そんなのただの同情と同じじゃないのかああああああああああああああッッ！！！！」

そう叫ぶと、殺人鬼は感情のままティレクに向かう。

その感情とはもちろん、怒りだ。

ティレクはそれを避けようとせず、ただ槍で受け止める。

殺人鬼のありつたけの怒りを槍を通じて感じ取ろうとするティレク。

「……………同情じゃ」

そして渾身の力で

「ないッ！！！」

タイガを吹っ飛ばす。

「同情なんかじゃないッ！！同情なんかじゃおまえをここまで迎えに来るわけ無いだろッ！！！！わざわざ宇宙中を飛び回って、おまえを迎えに来るわけ無いだろッ！！！！」

「！！！」

再びティレクに刃を向けようとした殺人鬼の動きが止まった。

「タイガ…………おまえ『殺人鬼の家庭で生まれた人間は、所詮殺人鬼なんだよ。』って言うてたけど、少なくとも俺様と旅してた5年間は『殺人鬼』なんかじゃなかった。」

「……………」

「どこから見ても立派なやつだと俺様は思ってた。お人よしで、バカだけど俺様の自慢の『仲間』だと思ってた。」

「……………」

「だから、おまえの言ったことは間違っていると思うぞ。変わろうと努力すれば、変わるんだ。」

『殺人鬼』でもだ。」

「……………」

「だから…………もう一度やり直そう。やり直して、殺人鬼から自分のなりたい自分になるんだ。」

「……………」

長い沈黙。

そして

「……………うん。」

「……………迎えに来たぞ、タイガ。」

いつからだろうか、俯き気味のタイガからは涙がこぼれていた。

殺人鬼の濁った心ではなく、タイガの透き通った純粋な心のようにその涙は透き通っていた。

## 最終話〜エピロ グ〜

澄み切った蒼い空。

その蒼い空に、白い雲が泳いでいる。

うららかさが平和になったと実感させてくれる。

何もかも元に戻ったんだということ。

ここは『ラグナエ ス』の内部にある公園。

公園の中央には噴水がひとつあり、熱いときは水浴びできるようになっている。

そしてその周りは芝生の絨毯。昼寝には絶好だ。

そのほかには、入り口から道になるように並べられているたくさんの花が植えられている花壇。それに芝生のところには小さな木が何本か植えられている。そのほかには茂みがいくつかある。

はつきり言って、町とかで見かけられる公園より設備がいいほうかもしれない。

補足で言うと、蒼い空も白い雲は全部映像で映し出されている。さらに言うと、夜にはちゃんと星空が映し出される。

そんなところに1人の青年、『殺人鬼』から立ち直ったタイガ・ウナバラがいた。

タイガは1人公園で散歩していた。正直タイガはみんなと居ずらかった。

その理由は無論、『殺人鬼』としての人格を一時的に衝動で起こしてしまったからだ。

ここには居場所が無い。

そんなことを考え始めていた。唯一居場所があるとすれば、タイガにとって人目がつかないところだ。

そのため『ラグナエス』に戻ってきてからのタイガは人との接触を極力避けていた。

『また衝動が襲ってきたら……。』、『今度は元に戻るんだろうか。』……………そんな考えが、タイガに人を避けさせる……………。

「タイガさんッ！」

ふとタイガは公園の入り口を見ると、そこからある少女がタイガに向かって走ってきていた。

タイガが今一番会いたくない人物でもある。

嫌いだからという理由ではなく、別の理由で……………。

「…………セルリア。」

「タイガさん。ここのことろどうしたんですか？」

不意にそんなことをセルリアから聞かれるタイガ。

「どうしたって……………なにが？」

「ここのことろタイガさん、ずっと暗そう……………というよりどこか辛そうな顔をしていますよ。」

事実上その通りだった。

暗い考えや辛い考えがタイガの頭の中に渦巻いているからだ。

「だから……………どうしたんだろうつて……………。」

「……………セルリア。この『ラグナエス』での僕の居場所なんてあるのかな？」

今一番聞きたいこと。それをはっきりセルリアに質問をした。





ケキャラじゃね のか？」

「そうそう ジン君は意外と抜けてるんだよねえ」

「へえ」。新メンバ の意外なところ発見って感じだな。」

「それより2人がこっち見て固まっているように見えるのはボクの気のせいかな？」

出てくる出てくる。

小さな茂みから異常なまでに出てくる人間たち。

ティレク、ミラ ジュ、シャ プ、ラピス、カイル+新たに加わったセシル、ジン、ウイズ、ルシア……………計9人。

その9人を見て、口をあんぐり開けたまま固まってしまったタイガとセルリア。

「……………ど、どどど、どど、どどどどど……………どうしてみんながここに居るんですかあッ？」

ようやく言葉を発することに成功したセルリア。

「どうしてってそりゃあ……………かくれんぼだよ、な？」

ティレクがそう言うとかくコクと首を縦に振るその他8名。

「かくれんぼなのに鬼がいないようですけど。」

「鬼なしかくれんぼだよ、な？」

再びその他8名は首を縦に振る。

「まあまあそんなことよりせっかくみんな集まったんだしさ、この公園でピクニックとかしない？」

いとあやしとばかりに視線を向けるタイガとセルリアからなんとか逃れるべくウイズは超強引に話をそらす。

「お、いいねいいね そんなじゃあ早速準備しにいこ か、みんなッ。」

「……………」  
そう言うとかイルは一目散に公園から退場。それに続くように残り8名が出入り口に向かった。

「タイガ君とセルリアちゃんも準備しなよ ツー!ー!」

出入り口から叫ぶウイズ。どうやら本当にピクニックするようだ。

「……………なんだったんでしょう、あれ。」

「僕に聞かれてもなあ。」

公園に残された2人。

「……………タイガさん。」

「なに？」

「『殺人鬼』の人格がよみがえってしまったら……てタイガさん言うてましたけど、そんなものは仮定の話なんですから、今は考えないでおきましょう。」

「……………だけ。」

「仮に本当によみがえってしまったら、さきほども言ったとおり私たちが何とかしますよ。今のタイガさんは『殺人鬼』のタイガさんではなくて、『善人』のタイガさんなんですから大丈夫なんですし……………それに……………」

ふとタイガはセルリアを見る。

セルリアは微笑んでいた。とても優しく……………そして、とてもうれしそうに。

そしてこう言った。

「私は今のタイガさんが好きなんです。」

好き……………。

それはタイガが昔、セルリアに言った言葉。

それも『殺人鬼』としてのタイガではなく、『善人』としてのタイガが……………。

「だから、ここにいて欲しいと私は思います。タイガさんにとって『居場所』かどうかはわかりませんが、少なくとも私はここに居て欲しいです。この『ラグナエス』……………いや、私のそばに。」

「……怖くないのかい？」

「ぜんぜんと言ったら嘘になります。ですけど私、信じていますから。」

信じている……。

それはおそらく、タイガが『殺人鬼』の衝動に負けないことを信じているのだろう。

なら、タイガ自身それに答えないわけにはいかない。

「……うん。信じて欲しい。」

「それと……。」

少し間をおいて、セルリアはこう言った。

「おかえりなさい。」

その言葉は、居場所がある人間に言われる言葉。

返す言葉は決まっている

「  
ただいま。  
」

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】

THE END . . .

## 最終話〜エピロ グ〜（後書き）

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】全80話超完結です。  
約2ヶ月ちよつとの連載の間、読んでいただいて本当に感謝しています。

初小説ということもあって緊張していましたが、みなさんが読んでくださったのおかげでめでたく終了できました。

それでは、また機会があるときお会いできれば幸いです。

2006年平成18年9月24日

LEGEND『伝説』【輪廻の出会い】

完結

byなかたぐ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7016a/>

---

LEGEND 『伝説』【輪廻の出会い】

2010年10月15日21時38分発行